

Li-tweet 創刊十二月号

目次

巻頭詩十写真

「あの子の眼についての法則」

あんな (3)

特集「もっと日本文学。」

小説

「あまりある自信」

うさぎ (8)

「ファナテイク」

小野寺 那仁 (14)

「體」

常磐 誠 (30)

「流離」

安部 孝作 (40)

評論

「杳子試文」(連載)

日居月諸 (57)

エッセイ

「泉鏡花『高野聖』について」

る (81)

「私たちの旅は、いま、はじまったばかりのところなのだ」

とーい (85)

対談

「馬琴からはじまる文学史」

崎本 智 (6)

小野寺 那仁 (89)

日居月諸

R a i n 坊

「システムティックな小説制作を目指して」

常磐 誠 (95)

日居月諸

自由投稿

小説

「やるせない」

R a i n 坊 (102)

「夏の終わりに」

緑川 (106)

「羽」

芦尾 カツヤ (111)

「モノクローム」

しろくま (125)

詩

「青い非常階段」

安部 孝作 (126)

記録

編集後記

あの子の眼についての法則

あんな

あ。(もうすぐ声になると思ったすき)
間の

心拍数があがり 背中についた顔でまんべんなく笑って
(世界がこんなにも脆いなんて) 知っても知らなくてもいいことだったのに

澄みきった空気のみが許される下される罪の真下で含み笑いと苦笑いを
一度見たことがあったあの眼 プラットフォームで許されるだけの血を吐いて
(それはとても美しく) 手を握ることがすべての午後だった

満たされるべきものたち
空白の 線 その許された手で

風邪をひいた 無理やり 日曜日 の 線を作って 回路
あああ、あ、
まだはりついてとれない

爪で
ひっかいてあいだに挟まったまま まだ
白状するよいつぺんに

だから無駄なことだけを丁寧に言ってみて

あの子の眼については すでに様々な憶測がまんべんなく染みわたっていて
すでに 様々な 空論が目の前で
独りでに すぎていく 花のうえ 虫の喘ぎ 空虚なあの子の前では
星も崩れ
手のうちを見せることもしない



第一にすべてのものごとをまわりから見るのではなくて
細部から見るのでもなくて

内側の一枚だけ見ます

次にそれをまとめて窮屈な場所に押しこんでから一枚つつ剥がして数えます
それからその中のひとつに穴をあけてもう一枚と結んでから大事にポケットにしまっておくのです

昨日あの子に会いました

昔から大事そうにしているものを見せてもらって可愛いので撫でてあげました
経験に押し潰されそうな網膜は磁場が不安定だからしかたがないのです

昨日あの子に会いました

眼の真ん中が透けてました

可哀想なのでもうひとつだけ眼をあげました

無駄なことなんて何ひとつないことを説明した後で

もう戦争が終わったことを教えてもらえました

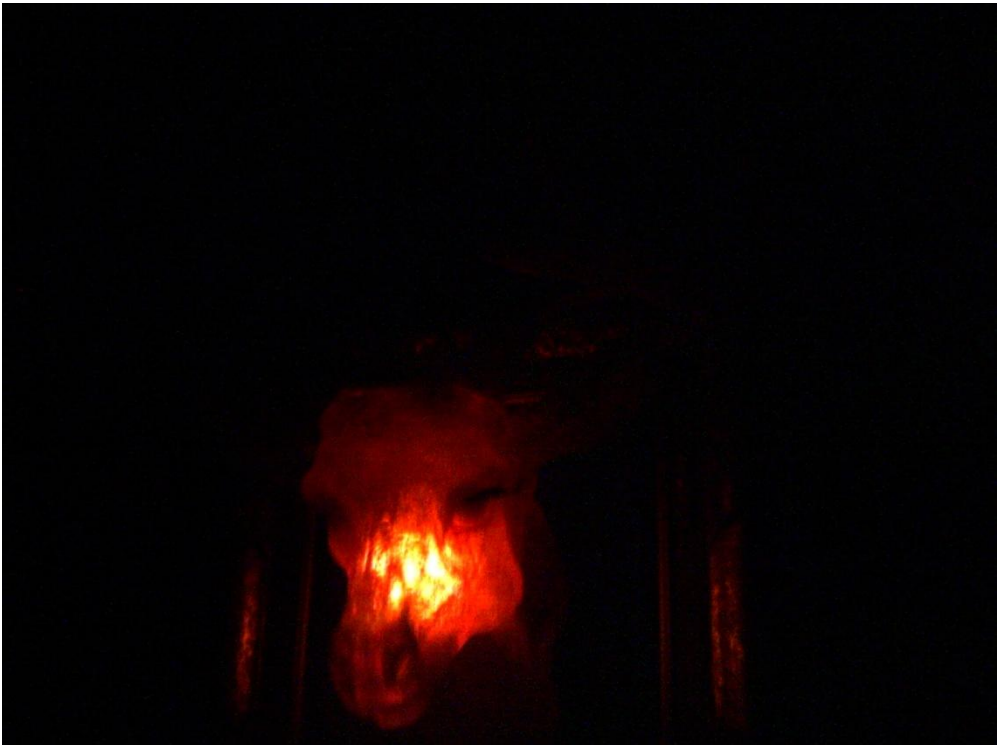
眼を落としたあの子に会いました

早くに死んだからとても綺麗でした

花嫁の嘘をきいたことがあるから
真夜中の端で流星は少し窮屈そう
まだ？ マジワエナイ薬指は切断シタ
余計なからだばかりをあやしている女の声がきこえる
そして無意識の錯綜はやむことはなく
宇宙からの光線をいつも寸前に遮断する
ぎらぎらと足首についた飾りを見せつけ
海に入っていく 足にからみつく まるで
やせっぽちの赤ん坊みたいな視線
角膜は光からの信号を受けとって手当たり次第輝きたがってる
もう遅いつて誰が言った？
紙袋の中は空っぽだったけど九時になったら満員で手を伸ばす隙間さえない
ねえ、息して ***

(ひとつまみの砂糖)

見ないふりして笑いたがってるくちびる
星屑をくれれば
明日の朝少しだけ豪勢な朝食をたべて
あの子の家まで胃袋を抱えて会いに
デジタル信号が妊婦のからだに突き刺さるとき
、まるで、戦場 サイレンス、
泣く泣くあきらめてあげようか





ろうそくをいっぽんだけ それだけで航路が決まる
出口が（狭くてぬかるんで湿ってる）もう少し近くにあれば
いっそもう戻れないということを察知できていれば海に沈むこともなかったのだ
手はあたたかくてかたい
むらがある何だつてできないことが多すぎて窒息してしまわないで
眼は透明で、いつだって、そばにいる、きみが望むゆめの途中にいるよ
やさしく紡いだこと葉が鼻のうえに落ちる
煌めいてる
無数の 星とくちづけのかたち
かたち

とぶ

世界がうごきだして
コーヒーカップの縁で祝福している
限界が近づいてからが惑星の本番
みて
みて
みて！
世界がうごいて
まんまるな眼球をつつんでる



ひとつ
ひとつ

交換していく

たっぷりと満たされたその眼

亡くした魂を少しかけて

全体が光るようにたくさんの悲しみをまぶして

ひとつ

ひとつ

づつ

みるみるうちに澄んでくる

海の

蒼さの中でゆらめいてる珊瑚みたいに

黒くて透明な蒼さの中に

みるみるうちに広がってくる

その眼

ゆっくりと

たち現れては消えていく

きつと

波もたてずに一瞬

あまりある自信

しんき

僕の好きな映画の爆破シーンを頭の中で再生する。ただし、僕の周りの雑音で音声はない。

爆破予告されてだれもない病院の廊下に、顔を白く塗って唇を紅く大きめに描いた男がいる。そして、その男は病院に潜り込むためにナース服を着ていた。男が悠然とした姿で歩いている。男が、フレームアウトする前にスイッチを押すが何も起こらない。必要以上に連打するが壊れていると思つて投げ捨てる。彼がいなくなったあとに奥の部屋から爆発して、ガラスや壁が粉々になる。あたりが炎と煙に包まれる。ここでシーンが変わる。先ほどの男が病院の外で独り言を呟きながら歩いている。まだ彼はナース服を着ていた。その後ろで建物が爆破されて、コンクリートが小ささまざまな形をして飛んでくる。彼は破壊している病院なんかには興味ももたず、次の犯行を考えていて力強く歩いていた。その光景が彼の顔と服装とがアンマッチで滑稽に見える……

——僕の妄想が途中なのに、終業のチャイムが鳴る。クラス委員が号令をかけると、教室内に椅子を引く音がやかましく響く。みんなシンクロしていなくて気の抜けた音が、クラス全員の疲労を表現しているようだ。

教師に礼をして、席に着く。その瞬間から、教室中に活気

が戻る。クラスメイトと会話をする人間、次の昼休みを前に購買部にパンや食堂に食券を買いに行く人間、他のクラスに遊びに行く人間、漫画や教科書などを読んでいる人間と言う具合にクラス中がグループ化される。

だが、そんな人間達とは僕は違う。僕は、今となっては好きでクラスから孤立している。でも、昔は一人ではなかった。高校に入学したときは、同じ中学の友人がいて何かを話していた。その友人は高校生活になじむようになって新しい友達が出来たそれを知ってから僕は彼から離れていった。

人から見れば、僕は高校でのスタートを失敗してしまって、それが現在も続いていると思われているだろう。嘘をつく必要もなく、僕は「独り」だ。来月にある修学旅行の班作りでも、僕はだれとも話し合わずにただ自分の席も一歩も動かずに座っていた。僕の望みとしては一人が良かった。僕のことを無視された生徒と勘違いした担任の女教師が、僕がどの班にも所属していないことをクラスメイトに注意をしたのだ。それまでは班になった者同士が楽しそうに修学旅行の話をしていたのに、担任の余計な一言がそこに水をさした。また、教師の意見に賛同した真面目な男が僕をグループに入れると言い出した。僕はそれを断ることも出来た。しかし、ここで教師や有志の生徒の意思を無駄にしたら、きっと僕の立場が

危うくなると思つて僕がしようがなく折れた。

今の話がどうでもよい昔話だと思つて、自分の意識を教室に戻す。

気がつくとも髪を七三にびっちり分けて眼鏡をかけた男が前方のドアにいて、教室に入らずに立つて時計を確認していた。次の教科である英語を担当している教師だった。始業のチャイムが鳴ると同時に教室に入ってくるというとても真面目で几帳面で神質な教師だ。鐘の音よりも遅く入つて来たら、生徒だけではなく自分にも遅刻だという己にも他者にも厳しい性格だ。

始業の合図が鳴るとすぐに教師は入ってきた。そして、教壇に立つ前に歩きながら一度眼鏡のブリッジを押さえる。教師が生徒に何か牽制をするようにこつちを睨んでくる。そして、日直の号令とともに椅子の足と床が摩擦をして気分を害するノイズがクラス中に飛び交う。教師は、今度は余計なくらいに満面の笑顔をして全体を見回した後に、「グッドモーニング、エブリワン」と口角をはっきりあげて発音のいい挨拶をする。だが、生徒の返答はまるで幼児の英会話教室みたいにダラダラとしたイントネーションの挨拶である。生徒の発音が悪いのを注意しないでいる教師に矛盾と人間らしさを僕は感じる。

教師は前回までのおさらいを黒板に書いていく。関係代名詞の構文についてだった。「もう一度話をしてあげる」という感じで、とても恩着せがましい口調やトーンであった。そして、復習が終わると教科書の内容へと移る。ステイブ・ホ

ーキングについての話だった。難病を抱えながら、宇宙の謎を解いていく痛ましくも夢のある話だ。僕はこのチャプターに入った時にすでに読み終えていた。だから、別のことをやると決めていた。幸い、僕は、黒板を正面にして一番右側の端の列で真ん中より少し後ろの目立たない位置にいた。今まで僕がその時間の教科と別のことをやっていた注意されたことはない。実際、居眠りをしたり、漫画を読んだり、他の教科の内職をしているわけではない。僕は頭の中で思いついたことを画に書いて、時には文章にしている。作業が詰まったら、たまに顔を上げて板書や校庭を見ているし、ちゃんと課題をこなしている。クラス内の他の三十九名とあまり変わらないはずだ。むしろ、僕はその中でも上位の優等生だと思つているし、思われているはずだ。授業でのやり取りは自分のことをしながらでも聞ける。教師が「じゃあ、大塚、次を訳してみろ」と生徒を指す。指された生徒の席を確認する。窓側から数えて二列目の一番前の生徒が立っている。この先生は生徒を指す時は一番初めの場所から縦か横に順番に指名するパターンである。僕は安全圏にいた。安心して僕は自分のことができる。僕は真っ白なノートにシャープペンを走らせ

た。

気持ちが途切れて教室にある時計を見ると、五十分授業のうち三十五分は経過していた。僕のやりたいことが半分できない。もう半分は納得いかずに考える集中力がなくなってきた。人の話が段々うるさくなって来る。授業をわかっていないヤツが余計な質問をした。その投げかけを待っていたかの

ように教師が得意げな顔で解説する。前の席の女子が手紙を回っていて隣のヤツと仲良くやっているのが目障りだ。

僕は気が散って短気になっている。早くこんな高校から卒業したい。東京大学に入って、自分の考えた世界を世間に知らしめたい。僕は東大に入れて当然の人間なのだから、こんな授業受けなくていいのだ。もし、アメリカだったら僕は飛び級をしてハーバード大学に入れる。そんなすばらしい人間をこんなところに縛り付けておくんなんて、僕の時間が無駄になるだけなんだ。ここにいる僕は、本当の僕じゃなくて、偽りの自分だ。僕は教育という国の決めたものに押さえ込まれている。

突然クラスでどっと笑いが起きる。聞いていないが、あの教師が冗談を言ったらしい。どうせつまらないことだと僕はしかめ面をして顔をそむける。

そんな低いレベルの笑い話には必要ない。僕はもっと高尚な笑いが欲しいのだ。

終業のチャイムが鳴る。それを聞いた生徒の何人かは、すでに片付けを始める。教師が話をまとめて、号令を要求した。礼が終わって教師が動き出した瞬間から昼休みが始まる。

昼休みになるとリュックからお弁当の入ったコンビニのビニール袋と雑誌を持ち取り出して僕は教室を出る。そして、校舎の四階の隅にある生物室に行く。教室は雑音が多いので、人がいないところで僕は昼食を食べていた。この教室を使っていることは、生物の担当教師には黙認されている。普通の教室より広くて左右の両端には水槽があつて熱帯魚を何匹

も飼っていた。後ろでは、生物の標本や模型が置いてある。壁には日に焼けた微生物や人体についてのポスターが貼つてあつた。日の光が入る窓際の席に座り、持ってきた袋からお弁当のおにぎりを取り出して、映画雑誌を開く。中学生の頃から、僕は映画雑誌を購読している。同じ年の人間は漫画雑誌を読んで、友人と人気の漫画やグラビアなんかを語り合うのかもしれない。でも、僕にとってありきたりでベタな行動なので同世代の人間に埋もれてしまう気がする。だから、同年代とは違う自分の没頭できるものとことんやっている。いつかは僕が監督で映画を撮りたいと思っている。そんな野心を充足するために映画雑誌を読んで、自分の撮りたい映画の構想を練っている。

映画同好会というのがあるが、ただ映画をレンタルショップから借りてきて視聴覚室で観るだけのつまらない活動をしている。僕は映画を撮りたいのだ。志が違う人間とヌルいことなんてできない。

演劇部で脚本と演出家をやれば、僕の夢は少しでも満足するのかもしれない。しかし、演劇は演劇という表現媒体であつて映画と同じではない。演劇は、劇団が公演している期間内に劇場まで足を運ぶのがいいのかもしれない。また、同じお芝居でも役者の出来や席によっては違うように受け取れるのかもしれない。だが、それでは僕の意思や考えが十分に伝わらない。だから、映画なのだ。僕には映画しかないのだ。

雑誌のページをめくりながら、僕を唸らせるものを探す。

僕を興奮させるものは、太古の財宝や井戸の水源を探すようなもので簡単ではない。おにぎりを食べ終わっても、アルミホイルを小さく握りつぶしながら、未だに雑誌に気持ちを集中させている。集中する時間が長くなると、自分の感覚が段々と失われていく。座っている木の椅子の温もり、銀紙の尖ったところが手に刺さる感触、雑誌の写真がまるで自分の目の前で行われているような錯覚、僕の夢と現実の境が曖昧になっ

っていく。

「おい、お前」

突然、僕しかいない教室に声が聞こえた。僕が雑誌からおそるおそる視線を移すと、顔を白く塗った僕の好きなキャラクターが向かいに座っていた。彼は紫のジャケットを着て、同じ色のスラックスを履いていた。

「おいおい、死んだ人間が突然表れたって顔をするんじゃないよ」

僕の頭が思考できないくらい喜びに満たされる。

「お前、学校が嫌いだよ。こんなところで来てもないよ。クラスメイトと仲良く勉強するのが苦手だよ。自分は一番で、高校にいる必要はない。むしろ。自分は自分の最も輝く場所を知っているから、早くそこにたどりつきたいんじゃないか？」

彼の言葉はまさにその通りだった。僕は高校生活にうんざりしている。こんな収容所で、みんな一緒に生活なんてできない。

「実は、お前のことを前からずっと俺は観察していたんだ。」

そして、さっき俺はお前の望みをかなえてやったんだ。嬉しいか？ 最初の時とは違って、プレゼントを貰ったみたいに目が輝いてるな」

彼の話は魅力的だった。だから、映画を観ているような目をしてしまったのだろう。

「結論を言おう。俺は、お前が学校に来る時に持ってきているリュックに爆弾を仕込んでやった。どうやったかまでは訊くな、それは企業秘密だ。リュックぐらい大丈夫だよなあ？ また買い直せばいいことだからな。俺は、お前に爆発の方法を教えたところからいなくなる。後は、お前の自由だ」

彼は、古びたジャケットからくしゃくしゃになった紙を出して僕に渡した。

「いいか、そのアドレスにメールを送るんだ。そのときにタイトルは紙に書いてある通りを入力するんだ。日本では、爆弾のことをそう呼ぶらしいな。俺の感覚だとさっぱりわからないけどな」

確認してみると紙には「レモン」と書いてあった。

「最後に本文は好きなように書けばいい。嫌いな世の中に対しての犯行声明だったり、この学校ごとお前が吹っ飛ばさうなら家族への遺書だったり、いつもお前が校庭を見るふりをして見つめていたあの子への最後のラブレターだったり、お前の好きなようにすればいい。不安か？ 送信履歴とかでお前が捕まる心配してるんだろ？ 気にするな、お前のへんてこな文章は起爆装置で別のアドレスを使って転送される。その時には、お前からの受信履歴も無くなるから安心しろ。」

じゃあ、あらかた説明したから、後はお前のタイミングでやればいい。じゃあな」

彼はそう言い残して颯爽と教室を出て行った。彼が遠くに行けば行くほど、体が透明になって扉の前で消えた。

僕はあの男が言ったことをやろうと決意した。彼の話で僕の気持ちが高揚しているのかもしれない。こんなチャンスは二度と無いと思った。まずは、爆弾のアドレスと、それとは別に総理大臣と文部科学省と地元教育委員会と通っている高校のメールアドレスを調べて送信先に入れる。ついでに、自分の両親も加えた。

そして、タイトルに指定されたキーワードを入れて、最後に本文を考える。

『僕がお世話になっていた人達へ』

いつも退屈で刺激の無い毎日を与えてくれてありがとうごさいます。おかげで、やりたいと思っていることがちっともできなくてストレスが貯まります。でも、このメールが届いているなら僕はそれから解放されたと言うことです。残念ですが、僕は皆さんが考えた教育という小さな枠にとどまろうとは思いませんでした。僕が自由になったら、すぐにでもアメリカへ留学をして日本のためではなく世界のために、映画界を牽引する人間になります。今までお世話になりました。こんな狭くて幼稚な世界をありがとう。

『将来のアカデミー賞監督より』

文面を考えて、出来上がると三回読み直して文章を整えた。そして、人気のない下駄箱まで行き、靴を外履きに履き替える。だれもいない昇降口で僕は自分の意思を確認する。ここまでなら引き返せると思った。生徒が何人か通り過ぎて行く。僕はもう一度覚悟を決めたことを心の中でつぶやいた。携帯電話はいつでもメールが送信できるようになっているのを確認する。僕は嬉しくなった。校舎を出て一〇メートルくらいしたら、送信ボタンを押すと決める。

校舎の外は晴天で、校庭ではサッカーをしているクソどもがいた。服装でサッカー部だとわかった。サッカー部の人間は、他の部の生徒よりも制服をオシャレな感じに着こなしているのが気に食わなかった。でも、これから起きることでヤツらが、どんな間抜け面になるのか想像するだけで僕は楽しかった。

僕の楽しい気持ちの頭の中から決壊して、独り言になって外に出ていった。さっき喋った彼と僕が重なっていく。気分が良くて気がついた時には学校からずいぶんと離れてしまった。僕は止って、携帯電話の画面を確認して、送信ボタンを押す。

しかし、画面には、『送信できません。アドレスを確認してください』とメッセージが出るだけだった。それでも、僕は送信を押し続けた。最後には、同じ表示が出て何も起きないので腹が立ってきて、携帯電話を投げ捨てた。僕は通学で使

っている駅に向かって歩き出した。

そして、僕はお昼前の妄想が再生される。さっきは聞こえなかった爆発音が頭の中ではつきりと聞こえた。

〈了〉

フアナテイツク

小野寺 那仁

1992

安穩とした時は一瞬たりとも訪れなかった。明晰な意識を苛立たしく思った。これが悪夢ならばどれだけ幸福なことだろうかと彼は何度も思った。

新居は魚河岸の奥にあった。部屋には生臭い風が絶えることなく吹き込んでくる。夏のことでエアコンは標準装備されているものの電気代を節約するために窓は開いたままにしてある。カーテンはなく直接顔に当たる光が眩しい。部屋の中には梱包されたままの書籍が置かれていた。それから留守番機能の付いた真新しい電話機が部屋の中央にあった。ほとんどの家財道具は捨ててきた。部屋はひと月ほど前に建てられたばかりの新築だった。それでも周囲の環境がよろしくないために意外に安価だった。娼婦の蟻集する色街の真ん中に位置していたからだ。真新しい木目の輝くフロリングが心地よい。だが、失業中の彼には不安の音楽を奏でる小道具にしか思えなかった。何度も挑戦した新しい小説の束が吹く風にぺらぺらとめくりあがり部屋中に散らばった。今は、書くという気力もなく白川が某雑誌に依頼されて原稿を書くのに追われているさまを見ても羨ましくも思わなかった。留守番電話にはもう限界までメッセージが溜まっていた。知人や家族からのものはほとんどなかった。そこにあるのは借金の催

促だけであった。クレジットやローン、消費者金融などありとあらゆる催促。郷里の図書館からの本の返却について。以前の勤務先から厚生年金手帳の返還について。市民税の督促。それは数年分にも及んでいる。彼は新居の電話番号を眞子と白川にしか教えなかったのにどこから情報が漏れたのか不思議でならなかった。眞子が裏切ったのかもしれないが。そういうわけで掛かってくる電話には一切出ないことにしていた。家賃さえまもなく取り立てがやってくるだろう。

少し前までは引越のアルバイトもしていた。徹夜でコンピュータと格闘した後の重労働は続けているうち腰に異常をきたした。それで無期限に休んでいる。留守番電話の幾つかのメッセージの中には港に近い古びた倉庫街の一角にある引越会社の社長からの仕事の依頼も含まれているだろう。コンピュータの会社も訪問販売の会社も辞めてしまった。彼は芋虫のようにごろごろとフロリングに横たわっている。空腹で動けなくなっているような気がした。もう何時間も同じような状態が続いている。この部屋を知っているのは白川と鳴海の二人しかない。いや、もうひとり会社の上司も知っているが彼とは口論してそのまま別れているので間違ってもここに来ることはないだろう。彼の死体を発見するのは白川か鳴海か或いは好人物の大家くらいしか考えられない。それにし

でも電話がひっきりなしに掛かってくるのには驚くばかりだ。動けなくなっても眠りに落ちることはあまりない。すぐに起こされる。もう何曜日なのか、何時なのかもわからない。壁時計も腕時計もない、それでも太陽の角度から昼過ぎであることは推測できた。気が付くと彼は立ち上がっていた。食事することだ。小銭を探した。札はないのはわかっていた。小銭を見苦しく探し回った。部屋の片隅に落ちていることなどは考えられない。財布には数十円しかない。彼は鳴海に電話して少し都合してもらうことに簡単に決めた。菓子パンのひとつくらいは食べることができそうだ。ここに来てからは水道水を飲むことがやたらに多い。電話すると鳴海は簡単に出了。どうやら幸福なことに土曜日か日曜日であったらしい。借金の申込みをすると苦笑しながらも快諾してくれた。電車代もないのでこつちに車で来てくれるという。返すあてのない借金をまた重ねてしまった。彼は頭がくらくらした。彼は安心したからか、また眠りに落ちた。チャイムの音で起きた。福音に違いなかった。ドアを開けると蒼ざめた背の高い鳴海が覇気なく立っていた。「思ったよりも元気そうじゃないか」彼はぼそりと言った。「白川また入院するって」「へえ」「訊いてないのか？」白川は原因不明の奇病に取り憑かれていて入院を繰り返していた。月に一度くらいは電話で話す。入院すると原稿が捗るので悪くはないとも言っていた。けれども勤めはどうするのだろうか、と思わなくもない。

「まあ、君のような公務員はいいよな、で、なんで今日は空いていたの？」「今日は土曜日だからさ」彼は手の切れそうな

札を二枚渡してきた。札を言って借用書みたいなものを書く。興味がないのか、鳴海は彼の職に対して尋ねてくることはなかった。以前の訪問販売の出版社についてもコンピュータ会社についても。彼が白川と一緒に出していた同人雑誌についてもほとんど無関心だった。学生の頃は鳴海も顔立ちと釣り合った端整な詩や学術論文を書いていたのだが。マンの『ブッデンブローグ家の人々』をホルストを聴きながら教えてくれたのも鳴海だった。長身で色白で髪先端がくるくるとカールしているのが印象的な鳴海は彼からすると女性に人気があつて当然に思えたが数カ月前に会った時には、意外な事に彼女が欲しいという言葉が聞かされた。真に受けた彼は、眞子を紹介した。都会のラウンジで会う三人は真つ白な卓に座つて呑みあわない会話と薄笑いで数十分を過ごした。鳴海と眞子とはわかるがわるに彼を訝るような視線で捉えた。鳴海と眞子は会話することも実現しなかった。眞子はスチュワードに憧れて英語を勉強していてそのうちに転職するといきまいていた。容姿は悪くはなかったが自己主張が激しすぎる、彼と鳴海よりも三歳下の彼の会社の後輩だった。そればかりか彼らと同窓だった。彼には鳴海と眞子は似つかわしいと勝手に思い込んでいたが引き合わせてみるとほとんど同様に拒絶の意思を示してきた。彼には理解できない暗黙のルールが美に恵まれた彼らにはあるのかもしれない。それとも彼らだからこそ分かる運命の直感のようなのが存在するのかかもしれない。人は安易に通俗を軽蔑するが通俗の中には動かし難い真実を含んでいるものもままあるのを彼は思い知らさ

れた。

彼は鳴海が眞子を気に入らない理由を好奇心から問いただした。空腹も忘れるくらいに関心事だった。「まあ、まあ」問いかげに鳴海は答えなかった。「それよりも何か食べに行こう。ナポリタンとピザが食べたいな。君もずっとなにも食べてないんだろ？」彼はぐるりと部屋を見渡した。「本当に何も無い部屋だな。前の部屋よりよっぽどましだけど。なんだこりゃ。コンピュータ？」「ああ」ほぼ唯一の家財道具。そして不思議な贈り物だった。去年の年末に売り出しの商店街で買ったのだが何カ月たっても引き落としされない。もともと口座に金がなかったのだが。そのうちローン会社から催促されるだろうと思っていたが契約書類を間違えているのか何も言っていないのだった。「これって、何に使うんだろうな。ゲームか。会社のコンピュータと違ってまったくわからない。電卓よりも早く計算するような気がしないでもないが」「ふうん。タダで貰っても仕方ないわけか」「三十万もしたよ。催促が来なくて助かったよ。頭金の五千円はいれたけど」「なんでまた、そんなのを買ったんだ？」「あの時はコンピュータの会社に勤めてたから家で勉強しようと思っていただけで手にいれてみるとオペレーションシステムが違うからどうにもならないんだよね」会社ではウインドウがあつたがまだそこまではパーソナルでは実現されていないらしい。鳴海は大笑いしていた。「まったく計画性の欠片もないなあ」

彼と鳴海は外に出た。黄昏れる街路樹の合間に真っ赤なプレリユードが燦然と輝いていた。鳴海と共に乗り込むと鳴海

は猛スピードで一方通行を逆走していた。ふたりは笑い転げた。

虹色に光り輝く神戸湾を見ながら高層ビル内のレストランでオニオンサラダとビーフとオイスターの生やフライを食べていた。鳴海の趣味だ。「牛井屋でも良かったんだけど悪いなあ」「気に入るなよ」「ワインを傾けながら鳴海は言う。「職場は嫌な奴ばかりだね。つくづく学生の頃の仲間はいいなあつて思うんだよ、最近」「富樫はどうしてる？」「彼が尋ねると鳴海は言う。「たまに会うけどあいつ結婚するらしいぞ」「相手は？」「可愛いけどそれだけで品のない女だ」「手厳しいね」「まだ若いから仕方ないけどある程度の教養は必要だね」

「ふむふむ」彼は批判することなく彼の言葉を受け入れていた。鳴海の自由闊達な発言は受け入れられない場合が多いのだろう。鳴海は安心して語っていた。彼は彼の生活を鳴海が批判しない代わりに彼の性格を批判するつもりはなかった。まだ学生の頃はよく衝突したものだ、あれから数年たち彼の性格を十分に呑みこんでいた。剣呑さは以前と変わらず薄まっただけではないのだった。剣呑さは以前と変わらず薄まっただけでもないのだった。剣呑さは以前と変わらず薄まっただけでもないのだった。剣呑さは以前と変わらず薄まっただけでもないのだった。

「やっぱり眞子も品がないのかな」微笑しながら彼は鳴海に尋ねた。「あの娘とかあの人はやっぱりそぐわないでしょう、僕には」「なんだ、そんな謙遜は君には似合わないぞ」

「直感として思ったんだな。彼女は野心に溢れている。彼女の野望を満たしてくれる男を望んでいるはずだと。それに比

較して僕は自分の生活を静かで美しいものにしたい。彼女は美しいけどそれは磨いたものではなくて与えられたものに過ぎない。彼女にとつては当たり前なんだよ」「それなら君に似てるじゃないか」「それは嫌味な意見だなあ。そういう君の妙なおせっかいがあったら大抵はぶち壊しだよ」鳴海は笑っていた。「ああ、よくわからない」「じゃあ、わかりやすく言おうか」「言ってくれ」「眞子さんには男がいる。そして僕にも彼女がいる、それだけのことさ。もし仮にあの瞬間はいなかったとしても時期をずらせば必ず誰かがくつつく。僕と彼女がくつつくには運命的な要素が必要だった。そして僕は彼女に何等かの不幸も嗅ぎつけた。おそらく眞子さんも僕に不幸の芽を見出したはずだ。そういう顔つきをしていた。君の媒介なくして結びつかない者がどうして偶然を超えられるのか」「なるほどそういうことか」読まれていたのだ。彼は鳴海の洞察力の鋭さに脱帽した。「失礼だけど眞子さんの男は君ではないことは明白だな」「それは言うまでもないよ。俺は嫌いではないけど今の俺の状況ではとても手が届かない」「それはちよつと違うな。状況がどうであれ、なびくものはなびくし、そうでないものはどうにもならない」彼は黙り込んだ。お手上げだった。追い打ちをかけるように鳴海は続けた。「眞子さん、何か文学とかやってるんじゃないのと思ったよ」それも当たっていた！眞子はトルストイを相当に読み込んでいたのだった。「さあ」彼はこの話はここらあたりで打ち切ろうと思つて誤魔化した。派手な服装の女たちを交えたおそらくは合コンだろう団体が一斉に席を立てて店内は寂しくなった。

ピアノ演奏もショパンに変わっていた。

別れ際に鳴海は言った。「パソコン、売った方がいいかもな」引越の荷物運びはきつかった、とはいえ全然行かなくなつたことを彼は多少は後悔していた。給料は日当で貰えるからであつた。一日、働いて得た一万数千円の金をパチンコですつてしまつたことも何度かある。二倍に増やしたことも何度かあつたが、やらないほうが無難なことは間違ひなかつた。鳴海と別れた直後から今度は貸してもらつた二万円が尽きる前に何でもいから職を探さなければならぬと焦り始めた。居てもたつてもいられなくなつて彼は闇に沈んだ街を歩く。魚河岸の通りの向こう側は関西では有名な色街でソーブランドが軒を連ねている。呼び込みが毎日のように声を掛けてくる。そのたびに住人ですからと答える。何カ月か経つと住人らしくなつたのか声を掛けてこなくなつた。その界限で働こうとは思わなかつたから反対側の山の手の路地を歩く。閑静な住宅街が続く。営業している店の明かりはレンタルビデオ店だつた。人気はない、在庫も少ない。ただ入り口にはアルバイト募集の張り紙があつたので彼は吸い寄せられるようにはじめて店内に入つてみた。ビニルの焼けたようなまさに鯁えた匂いが充満していた。「ここで働きたいんですが」店員におもむろに訊いた。飛び込みの訪問販売をしていたので初対面の人物に話しかけるのは平気だつた。眠たげな店員が急に眼を見開いてじろじろと彼を品定めした。何も言わない。「アルバイト募集してるのですよ

ね」「ううん」店員は考え込んでいた。「あなた何してる人？」中国人の言葉遣いのような問いかけ。「なんでアルバイトする？」「なんでって家から近いから」「それだけ？ 仕事してないの？ アルバイトじゃなくてまともに職に就く気はないの？ それとも掛け持ち？」こういう場合相性が合えば余計な問答は必要ない。訪問販売も不可能が可能になって商談に結び付く場合が多かった。たいていは門前払いで終わる。「わかりました。他を当たりますよ」彼はあっさり引き下がった。店は神戸にいくらでもある。明日、ゆっくりと探そう、そう思ったが……履歴書も持たずにいきなり駆け込む自分が何かに蝕まれていると意識せずにはおれなかった。

翌日に日が高くなってから起きるとき夢がまた始まったと思った。目覚めているときに夢であり悪夢なのだった。そして鳴海と会っていた昨日もいつの間にか茫洋とした蜃気楼のなかの市場にしか思えなかった。あれも夢だったのか。確認のために財布の中をみるとやっぱり二万円はある。返済の期限はいつなんだろうかとも思う。朝方にまた電話がなっていた。電話に出なくとも請求書が郵送されてくるからたいした支障はない。ただコンピュータだけは請求書すら来なかったからあれはプレゼントされたに違いなかった。すると何やら誇らしげな気分にならないこともない。まだツキが残っている。こういう思考というのはかなり追いつめられているんじゃないかと思わないでもないけれど。彼は、以前にも膨大なコンビニの弁当を短時間で車両に詰め込む作業に従事したこともあったが長く続かなかった。広告取りの会社、学習塾、

事務コンピュータを販売してる会社の汎用機のメンテナンス事業部などに内定したこともあったがいずれも断っていた。その理由はいずれもその場の採用という形式がいかかわしく感じたことであった。書類選考も何もなかったのだ。おそらく長続きしない仕事内容なのだ。もう職を転々とするのはやめてじっくりと就職活動したいと思ったからだ。何をしたいかも明確でないからそれもこの際はつきりさせたい。徹夜続きのコンピュータ業界や訪問販売の世界には懲りていた。ただ、当面の金が工面できなかった。失業保険の受給までは待っていてられない。三カ月の待機期間に干上がってしまう。家賃だけでも月に五万は必要だった。と、何度も同じことをぐるぐると考えていた。かといって家族に電話するのも気が引けた。一年ほど音信は途絶えていた。父と不和になっていた。不和になって家を飛び出す直前に志賀直哉の『大津順吉』を読んでいた。シチエーションが類似していた。新興宗教の信者である香澄と彼が交際するのを父が認めなかった。言うまでもなくその宗教が父の資本主義と相いれなかったからである。結局はいろいろあって後、香澄とも破局した。そういつたもろもろの過去は彼方の出来事になりつつあった。もはや、思い出すのも稀だった。留守番電話に一万回着信があったらその一回くらいは香澄からのものであったかもしれない。けれどもその一回は口論するだけに終わるだろう。口論に終始するだけなら一緒にいる意味などないのだと彼は思っていた。こんなふうですっぱりと過去を断ち切れるのはひとつには元号が昭和から平成に変わったからかもしれない。

アルバイト情報誌も活用しないではなかったが、ごく短い期間だけ働くというものはあまりなかった。それならば自宅から近い場所で何処かはないものかと思つた。そう思うこと自体が一般の常識からずれているのは分かっているが彼の感情を変えることは彼自身の力では無理であつた。白い電話機には赤の着信ランプが幾つも点灯している。その中の幾つかは眞子からのものであることは予測できた。それでも眞子とは話す気にはなれなかつた。チャーリーとの不倫話を聞かされてからは眞子を避けていた。彼の抱いていた眞子のイメージが崩れ落ちた。修復ができなかつた。彼は眞子を好きだつた。何度かは愛したこともある。彼が眞子を鳴海に引き合わせたのも眞子にチャーリーを諦めてほしいと思ふ気持ちからだつた。しかし、それも過去になりつつあつた。香澄と同じように眞子とも口論が激しくなつた。眞子は興奮して言つた。彼女がふとしたはずみからふたりだけの部屋でスカートを脱ぎ捨てたのは彼の容貌が学生時代に付き合つていた男と似ていたからに過ぎないと。私が愛しているのはチャーリーだけだと確信をもつて彼に宣言したために彼の眞子への愛情は急速に萎えてしまつていた。それから彼は眞子の途方もない野望を書きつけるメモ帳に成り下がつた。何度も電話してきてはチャーリーとの不倫の報告をしてくるのだ。眞子の声は度外れて大きく、耳が痛くなつた。家族が傍らにいても平気で不倫話を日本語でしていた。半ば以上狂つていた。だいたいその男には妻もいるのだ。そして彼はその夫婦も知つてゐる。何度か食事もした。彼は眞子に諦めるように説得した。チャ

ーリーとも英語で会話した。彼の拙い英語で奥さんを大事にしるよと言つたつもりだったが伝わつていたのかどうか。元はと言えば英語を習得するためにチャーリーを家庭教師に雇つたのだ。ネイティブのオーストラリア人でありわかりやすくきれいな発音が耳になじみやすく心地よいのと紳士らしい振る舞いや細やかな愛情表現やビッグスマイルにすっかりいかれてしまつたのである。どこまでチャーリーが狂つた日本の才媛でスポーティな眞子に本気で入れあげているのか確かめたくてたまらなくなつてゐるのだつた。どうにも不可解なのはチャーリーの妻、キャシーがイギリス王室のダイアナ妃に似た金髪の美女だつたことだ。キャシーは眞子よりも数歳は年上で彼よりも年長だつたが、まだじゆうぶんに若く、魅力的だつた。ふたりの間に子供はなかつた。チャーリーとは不仲になりつつあることはそれとなく知れた。自分たちの愛を見せびらかすような仕草を見ることはなく始終落ち着きなく不機嫌な表情を浮かべていた。キャシーは日本には興味がなく日本人を見るのも嫌らしい。なぜ彼らが日本に滞在しているのかわからない。宗教上のトラブルを抱えているのかもしれない。日本にいる西洋人の多くは宗教あるいは政治上のトラブルから潜伏先として選んでゐる、眞子は外国人のパティに参加してゐて、そういった事情に詳しく、そんなことまで彼に告げてきた。

彼らとの関係は、彼の引越や転職とともに消えてなくなつた。ほとんどあらゆる関係がなくなつてしまひ彼は孤独だつた。街の底を漂流して数カ月になる。物憂げな気分にも包まれ

たまま彼は扉を開けて街の中に一步を踏み出して行った。「田中角栄を殺せ」宇宙人の経営する自動車修理工場が先日訪れたビデオ店から数百メートル先に現れた。何年か前にドキュメンタリー映画で観ていたから、ここだったのかと少し立ち止まって眺める。店は開いていたが誰もいない。たとえ募集していてもそこは物騒な気もして働く気にはならない。更に進むとJRの高架に突き当たる。そこから元町までガード下には雑多な商店がびっしりとあつた。旅行代理店、土産物屋、不動産屋、理髪店、ケーキ屋、古書店、乾物屋、中古の冷蔵庫や事務機や洗濯機を売るバツタ屋。そこまで来て彼は立ち止まった。なるほど家電は売れるものなのかと。いざとなつたらパソコンが売れる。でもこの店は高くは買わないだろうと商品を見てそう思った。茶色に変色した洗濯機が数千円で売られていた。パソコンはなかった。店はどれもこれも十坪にも満たない。けたたましい呼び込みの連呼がテープから流れ、自転車の急ブレーキ音がそこかしこで発生する。音に過敏になつている。部屋の中があまりに静寂なためか。視覚と聴覚のバランスを欠いた。見るものは興味深いが耳に入ってくるのは疎ましい。アルバイト募集をしているのかは張り紙で判断していくが意外にもほとんど張り紙を見かけない。ひとがひとりやつと通れるくらいの狭い通路の両側に店が並んでいる。不意に列車が通り過ぎる轟音がして店の木製の引き戸がガタガタ揺れた。キーンと耳鳴りがして季節感を失った。体内の調整が崩れたらしく外気に関係なく暑くてたまらなくなつた。キムチを売っている店で今度は立ち止まる。またこ

こへ来た時にキムチを買おうと思う。衣料店も覗く。もう数カ月も靴下やシャツを買っていない。就職してからはマメに洗濯をしている。この店もまた来よう。今は持ち合わせがない。精肉店の前では誘惑に負けそうになつた。食堂も幾つかあつた。出来立てのロールパンの香りも漂つてきた。菓屋もある。彼には何も無いがすべてを我慢しなければならぬ。そうしていよいよ商店街も大通りに突き当たり終わりという頃には彼の意識は朦朧としてアルバイト募集の張り紙だけを見るようになっていた。目指す張り紙は最後の店にあつた。そこは模造の拳銃やライフルがショーウィンドーに飾られてありアメリカの旗と旭日旗が交差して飾られていた。米軍払い下げ、自衛隊払い下げと謳い文句があちこちに正札代わりに貼つてある。迷彩服が無造作にワゴンに入れられて洋品店と同じように吊り下げられていた。ミリタリーグッズが並ぶ店内であつたがなんといいっても多いのは拳銃だった。それらも模造ではなさそうだった。発射できないだけで本物なのかもしれない。重量感があり、ところどころ塗装が剥げて凄みのある艶があつた。最初の驚きは徐々に嫌悪感に変わった。それで逡巡して店を出て立ち去る素振りを見せたりまた戻つてきたりした。やがて彼は、彼を始終、目で追いかけていた店員に声を掛けた。

「こちらで働きたいんですけど」

「ということは武器や戦闘服に興味があるってことなんです」

「意外にもやや親しげだった。だが顔はちっとも笑っていない。彼は答えない。」

「これ、アメリカの護身用ピストル、小さいでしょう」

彼の掌に載せる。彼は何かあった時のために眞子にピストルをプレゼントしようかしらんとも思った。すでに彼の中では殺傷能力のあるピストルに変化していた。

「ずっと前に永山則夫が四人を殺害したのと同じものなだけで、知ってる？」

「いや、その永山っていうひとは本を書いているから知っているけど四人も殺したって知らなかった」

「あ、そうなの」店員は当てが外れたようだ。「あなた永山のようなことを考えてない？」

店員は畳み掛けた。「ここには本物の銃弾もあるし、その気になればモデルガンを改造して使用することもできるとかさ。たとえばここにアルバイトで潜入すればいつでも手に入るわけだ」

「いやあ。ピストルなんて興味ないんだ」

「興味がなかったら仕事にならないじゃん。相手はガンマニアばかりだよ」

「じゃあガンマニアは改造したりしないのかね？」

「しない。今までに聞いたことがない。でも普段、拳銃と無縁なの方がむしろ危険なんじゃないのかと思うことがあるよね。永山みたいにさ」

「なるほどあなたの言うとおりかもしれない」

「というわけであなただをアルバイトとして採用できません」

彼は会釈もせずに店を出た。

気が付くとがらんとして人影もまばらなパチンコホールにいた。初夏だというのに冷房が効いていて心地よかった。暑苦しさは緩和できた。数十台のスロットマシンが並んでいたが誰も座っていない。数カ月前には給料が入るとすぐに機械に札を入れていた。尾崎豊の『卒業』が店内に鳴り響いていた。転がり続けるってこういうことなんだろうな、と思う。軽いつもりで千円札を財布から出して機械に流し込もうとした時にブレーキがかかる。感情を抑制する。このほとんど最後の二万円を使ってしまっただろうか。負けるとき、たいてい二万円ほどはすぐに溶けてしまう。それならば、いつも気になっていたあの方法をやってみよう。ワイルドキャッツという台は当たりを引く直前にチェリーが左リールに位置するケースが多い。だから、その状態で放置してある台を狙い打てば初期投資が少なくてすむ。いつもそう思いながらなかなか実行できないでいた。思いつくとすぐに台を探し始めた。少しパチスロをする連中なら誰でも知ってる。だからその状態で放置されている台などほとんどないに決まっていた。ワイルドキャッツは瞬く間に確認できた。するとそれだけでは満足できないので彼は隣接するホールや地下にある店、商店街の中の店と次々に血眼になってワイルドキャッツを探して歩いた。十軒以上も回っただろうか。台にして三百台は確認した。ようやくチェリー停止台を発見した。胸が高鳴ってきた。もちろん確率が多少高くなるだけで絶対に当たるということはない。だが探し回ったということもあって使っ

いけない金なのに彼は手を付けることになる。その快感はこの上なかった。地獄の窯の上で踊るような気分だった。どうとでもなれと自棄になってカネをつぎ込みレバーを引き、ストップさせる。キャッツが停止、次も猫、そして三番目を狙って打つと、あろうことか見事にそれは停止して大当たりになった……

ワイルドキャッツは当たり出すと止まらない台であった。十回連続二十回連続もある。一回で六千円ほどになるから十回程度出したところでやめにした。彼の周囲はコインを山盛りに入れた箱が積みあがりそれを見た他の客たちがぼつぼつと集まってきていた。十万円弱にはなったはずだ。彼の心持ちは一気に変わった。何か思いがけない力を得たような気分になった。この方法は使えるじゃないか。彼は内心ほくそ笑んでいた。元のアルバイト先の社長も作業服のまま打っていた。「最近見かけないかと思っていたらこういう稼ぎ方を見つけたんだね」「いえいえ、とんでもない。偶々です」彼は上機嫌もあって慇懃に應對した。仕事がついこともあったが、釜ヶ崎の暴動に参加するフリーターや元自衛隊員や元力士といったその会社の連中とは反りが合わないのも辞めている理由だった。何かと柔弱な物腰の彼を威嚇して彼に負担をかけてきて一見、要領がいい彼らに彼は辟易としていた。

「また人が足らなくなってきたんでたまには来てくれよ」会社が長田にあるから近いには近いのだがそこはどうにも気が進まない。とてもではないが毎日できるような体力は持ち合わせていない。「最近、ちよつと疲れてきて」「きついかな？ 慣

れだよ、慣れ。まあ引越だから平日はそんなに仕事がないだけだね」「考えときますよ」懐が深いというか細かなことは気にしないというか人懐っこい社長の笑顔は誰にでも等しく優しく見えた。「では失礼します」

プログラミンの徹夜作業明けの土日に引越を夜十時までして帰ってきて小用をすると痛みはなかったが新しい便器は真っ赤に染まっていた。大量の血が混ざっていた。驚いて何か悪いことでもしたような感覚になった。それから引越は休みがちになった。プログラミン作業はだんだんと責任が重くなって途轍もなく大きなプロジェクトに絡んでくると大方の人は辞めてしまう。彼の仕事は学習塾に始まり、JRや自衛隊の仕事をして最期は造船所だった。そのシステム変更は難攻不落だった。誰がやっても全く歯が立たず彼の先輩たちは続々と退職していき彼も眞子を捨ててその道を選んだ。

思いがけずに大金を手にしたので商店街に引き返して欲しいものは全て購入した。

最後にパン屋兼喫茶店でクロワッサンと珈琲を注文した。彼のにやけた顔が窓ガラスに映った。やつと悪夢から解放されたのだろうか？ それは見通しがちよつと甘いんじゃないかと思いついていた。とにかく軍払い下げの店にまで報復できたのは望外の喜びだった。あいつ気に入らない奴だな。店員のあつけにとられた顔といったらなかつた。痛快だった。久しぶりに血がたぎった。彼は興奮して、夜ではあるがまだ大丈夫だろうと入院中の白川に連絡を取ってみることにした。「ほぼ毎日電話してるんですけどね」白川は苦笑しながら言

った。「なんで電話に出ないんですか?」「まあ事情があつてな、留守番電話も再生してない」「書いてますか? 僕は『アトリエの科学』から若者文化についてのエッセイの依頼が来て非常に困ってます。なんせ入院中でぜんぜん取材ができないし、ジュンク堂に行くことさえ許可されないんで、そういうこと手伝ってもらえたら有難いんですけど」「あまり気が進まないなあ」「ほとんどお金にもならないです」「だったら断ったほうがいいかもしれないよ。まず病気を治すことに専念したほうがいいと思うんだけど」「白川は言い淀んでいた。「どうやったら連絡くれるんですか?」「じゃあ、三日に一度くらいは電話するよ。エッセイは協力できないけど」「いろいろ差し入れてほしいんですよ。本や雑誌も、それから就職情報誌とか」「今度一度行きたいんだけどこっちも失業中で大阪まで行く電車代もないくらいだよ」「なんでまた神戸なんかに行つたんですか?」「それから彼らは鳴海の話やほかの同級生の話題で小一時間ほど話していた。「入院は長くなるの?」「今回は長いですね。手術したんですが、術後の数値が良くないようでやり直しになるかもしれません。内臓のあちこちが調子が悪いみたいで。詳しいことは教えてくれないんですよ。わからないというか。その、病気に關しての本も集めて読みたいから図書館で借りてきて欲しいんですよ。できたら医学部のある大学図書館で」「わかつたよ。キミのためだ。やつてみる」そして病院の受付の看護婦からいい加減にしてくださいと注意される声が聞こえてきて電話は切られてしまった。その後、大家にも電話して家賃を支払うことになった。とり

あえずは一カ月分。大家はそれほど嫌な顔もせずに家賃を受け取りに来た。そればかりか彼女がいるのなら連れてきて同居してもいいよ、なんて呑気な事を言っている。

翌朝は意気込んで六時に起きた。生臭い風に起こされた格好だ。その元凶である魚市場に行こうと決めていた。パチンコホールの開店は九時半でありまだだいぶ間があった。さすがにほとんどの金は使い果たしていた。残ったのははじめの鳴海の二万と初日の勝分一万五千円。眞子にも電話した方が良かったのかと少し未練たらしく彼は思った。

たいてい目覚める頃には終わっているので魚市場が活況なのは初めて見る。入り口の店には人の背丈ほどもありそうなブリが垂直に真つ二つにされ、ヒラキになっていた。ブリじやなくてマグロなんじゃないかと思つたが正札にはブリとあつた。ヒラキといつても骨のない方は細かく刻まれて販売され、残つた太い骨つきの方は天井から逆さ吊りにされている。目の前にぶら下がる妖しく光る巨体はこの店では三体。隣の店では五体。どの店も同じように獲物を見せびらかしていた。行き交う中老の男たちは一様に白いエプロンと長靴姿で、ブリを背負つて歩いてきた。重いのか顔の皺にも力が入る。古代人みたいだ。ブリの目玉は苦勞する人たちを嘲笑していた。華麗にブリを捌いていた。鮮血がほとばしつて思わず彼は目を背ける。まだ子供のような見習の男がコンクリートの土間をホースで水を撒いて血を洗い流している。微量ではあるが逆さのブリたちからも血が流れていた。

昨日の流れで細かく区切られた店をひとつひとつ眺めるとほ

とんどの店がアルバイトを募集していた。家から近く午後から求職活動できるのでうってつけなのかもしれないが……それから彼は気分を変えて例の喫茶店でクロワッサンと珈琲を頼んでポケットに忍ばせておいた今となっては顧みられることもない堀辰雄の短編集を読んでいた。その本の中には精神に不可欠な栄養素があると彼は勝手に解釈していた。

九時が近くなつて彼は落ち着かなかつた。そしてパチンコホールの前の行列に並んでいた。考えるにこの周辺は人口に比較してホールの数が多すぎるのだ。たいていの店は閑散としている。たとえモーニングサービス目当ての行列ができていても百人もいないだろう。

もちろんモーニングもやらない。やるのは昨日の再現で左チエリーの放置台である。だがそんなものが落ちていいるのだろうか？ いや確かに昨日は実際落ちていたじゃないか！ 彼は葛藤した。昨日、落ちていたものが、今日も落ちていいるだろうか。ワイルドキャッツに限らずに全般に見渡せば落ちていないこともないが、連続して大当たりを引く機種ではないのでたとえ一度当たったとしても二度目までに出玉を呑みこまれてしまう。その点、ワイルドは大当たり後一回転、或いは三回転くらいまででまたチェリーを引き戻して大当たりするのだから。その割に人気機種ではなかった。普通に打っているとちつとも当たらないからだろう。

結局、ホールを二十も回つてワイルドキャッツの左チェリー落ちを二台見つけて小躍りして打ち込んだが、単発に終わり一万五千円増やしただけにとどまった。

帰宅すると会社に変名で電話した。眞子を呼び出してもらう。気づかれているかもしれないが、気にしない。「あら、何度も電話したのよ！ ちつとも出ないんだから。あたしの留守電聴いてくれた？ この電話じゃまずいから、どこかで会って話さない？」「ああ、ビヤホールかあ。扇町だったかしら。去年、忘年会で行ったとこね。家から近いしいよ」

「留守番電話、再生できないの。もう、いろいろ告白してるのに！ え、たくさん留守電があり過ぎて消えてしまった？ じゃあ何にも知らないのね、わかつた。明日の七時にビヤホールで？ え、チャーリー？ 連れて行かないわよ。だいたもう日本にいないわ。就労ビザが切れてるの」彼は電話を切つた。会うのなら電話で話すこともないのではないかと思つたのだ。どつちにしても眞子とどうこうする気はなかつた。今の生活を説明するのも煩わしい。

翌日も朝からワイルドキャッツを探しにいったが、とうとう落ちていいる台は見当たらず彼はやはりアルバイトを探すべきだと思ひ始めていた。約束があつたので電車に乗ってビヤホールに向かつた。日本航空の関西本ビルは城郭のような威容を誇つていた。小雨の御堂筋を歩いた。雨の多い季節だから仕方ないがどんよりと曇つた空が重苦しく思えた。

ビヤホールの入り口で煙草に火を点けて眞子の来るのを待つていた。眞子は少女体型の香澄とは違って肉感的な逞しい身体つきだった。趣味がスキューバダイビングとスキーだったから。だがある種の男、すなわち金持ちの男友達がいないと彼女ひとりではそういった趣味をすることはできないそうだ。

だから本も読んでいる。以前そう話していた。眞子に再び会うことになるとは思わなかったが懐中のずしりと重いプレゼントできっぱりと彼女とは縁を切ろうと思っていた。何ともならないのだった。本当は彼女も貧しい。眞子が家に帰りたがらないのは家に借金の取り立てが押し掛けてくるからだ。借金は眞子の父親が或る会社の保証人になって作った。鳴海は暗い何かを嗅ぎつけていたのかもしれない。彼と眞子を結び付けているのは貧困であったのかもしれない。

店の前に一台のタクシーが停まった。後部のドアが開き白いワンピースの眞子が颯爽と現れる。彼女の脚は少し肉付きが良すぎる。無造作に引いたルージューが毒々しい。

「明史！」眞子は彼の名を呼んだ。「懐かしい！」ひとしきり彼らは貪るようにビールを飲みフライドポテトを食べた。天井が高く交響楽団が使用するホールのような建物だ。喧噪で大きな声でないと何を言ってるのかよくわからない。彼は眞子の右手を掴んで肘で眞子の乳房の辺りを愛撫していた。「今日はそういう気はないのよ。何？私に未練でもあるの？」だが眼差しはとろけるように優しくかった。彼は眞子がちっとも変わっていないのに安心した。彼女と話していると今の生活を片時でも忘れることができた。「本当に留守番電話を聴いてないの？ もう！」「聴いてない」「それなら言うけどSGCはあたしもやめた」SGCというのはコンピュータ会社だった。「だって昨日いたじゃないか」「辞めているんだけど引継ぎとかクライアントの関係もあって今月末までは出社することになってるの。ああそれからね、日本航空のスケジュールデ

スもダメだったわ。最終選考まで残ったんだけど落とされた。あたしの身边を調査したんだよね、たぶん。毎日、借金取が押し掛けているようじゃダメだよ」「そうかもしれない、そうでないかもしれないけど」「そうに決まってるでしょ！」「明史も甘い考えは捨てるべきよ」「じゃあいいよチャーリーと？」「ええ。あんたがどうしてもあたしを守って言ってくれたのなら考え直したかもしれないけどあんた無理でしょ。自信なさそうだし。だいたいさSGCなんかでプログラマーなんてやってちゃダメよ。世界に向かって行かなくちゃ」「世界かあ」「それに友達を紹介するなんて最悪じゃないの」「鳴海か？ あいつは良い奴だよ。公務員だし真面目だし」「あの人には大きな不幸が潜んでいたの。なんかピンと来たのよ」「でも俺の思うには君はチャーリーにぞっこん惚れているのはよくわかったな。眞子が何と言おうと嘘にしか聞こえない」「あくまで優しいのね。あなたは本当に憎たらしいくらいにあたしが付き合っていた先輩に似ているのよ。でもさ、あいつもやっぱりダメになってるんでしょうね！」「うるさいなあ。俺は俺のやり方で頑張るよ」「違うの違うの。女はね、心底好きなのはダメな奴なんだって！」「まあ、どうだっていいよ。それでこれプレゼント。お別れの」「へえ」彼はきちんと包装していた。小箱に入れてリボンを結んでいた。「開けていい」「どうぞ」眞子はリボンをほどこいて包みを剥ぎ取る。中から22口径の黒光りする短銃が現れた。眞子は瞬間、うっと呻いたが取り出すと「かっこいいじゃん」と眼を輝かせた。それから急に彼の口を広げて銃身を口に突っ込み打つ真似をし

た。「これ弾はでるの」彼は答えられない。通りがかったボーイが眞子に注意した。「ちよつと悪ふざけはよしてください」周囲の客たちの冷たい視線が眞子に集中していた。「ごめん。みんな」テーブルの上にコルトを置く。モデルガンといえ見た目は本物と変わりないのでかなり不気味に映る。「テーブルの上に置くのもやめてください！ 本物？ じゃあないですよね」「もちろん」きまり悪いのでビールとローストビーフを追加で注文した。「チャーリーと一緒になる？」「ええ。離婚が決まったの。チャーリーの」「そうなるだろうって思ってた」「やっぱり」「ダイアナは諦めたんだね」眞子は彼の胸の煙草をまさぐってきた。「あたし煙草も吸うの。スキューバの為に」チャーリーがね。あんた、あたしが略奪したとも思ってるでしょ。それは間違い。あたしと知り合う前からあのふたりの関係は壊れていたの。でもキャシーは日本にまで追いかけてきたからね、関係が戻るかもしれないって思わないでもなかったけど」それから何枚か写真を取り出した。青い海の浜辺のコテージと残雪の山の中腹のコテージの写真。チャーリーと小型ボートの写真。澄み切った海が旅行会社のパンフレットを想像させる。「これふたつともチャーリーの家の別荘よ。日本にこんな人いる？」「それはそうなんだけど」「あたしは運動論者じゃないわ。アンナ・カレーニナが間違っていることを証明してやるのよ」トルストイは眞子に反発心を起させていたのだった。「来月の中ごろには出発するわ。さようなら。

そしてありがとう」眞子は彼にキスをした。またもやボーイが見ている何か言いたげな顔をしていた。

とうとうワイルドキャッツが裏切り始めた。チェリーが出ていても当たらない。自棄になって普通に打って一万円負けと引越屋の社長。「真面目に働いた方がいいんじゃないのか。時々、電話してるけどちつとも出ないな。そんなにづらいか。俺のところは？」「体力がないですから」とだけ彼は答える。

家に戻りパソコンを眺める。図書館で『プログラミング入門』を買ってきて入力してみる。二時間かかった。だが動かなかった。既成のソフトを入れれば動くことは分かっている。だがそれで何ができるといえるだろう。ゲームか家計簿やメモ、そういったものならばノートで十分だ。ゲームはしない。白川の病気の本も借りたが市立の図書館からなのでそれほど専門的ではない。眞子と別れてからは人恋しさを感じる。気持ちが落ち着かない。落ち着かないのはカネが無くなってきたこともある。

電話を掛けていた。鳴海にパソコンを売るから来てくれと告げた。今日は仕事を休んだよと鳴海は言った。頭が痛くてね。体調がすぐれないんだ。明日にでも来てくれと彼は頼んだ。少し遠くてパソコンが運べないんだよ。鳴海は渋った。行けたら行く。昼の一時に行かなかつたら無理だと思ってくれ。相変わらず電話には出ないんだな。何度か電話したよ。おい聞いているのか。鳴海はそれから何かぶつぶつと感情を

昂ぶらせてつぶやいていた。彼がどれほど耳を澄ませても聞き取れないほど早口で高音に響いてくるので自分の耳が壊れてしまったのだと思った。何度か聞きなおしたが鳴海が怒ったようで、わからなくても訊きなおすのはやめて受話器を置いた。「まあ無難なところはやはり引越なんだろうな」彼は声を出してつぶやいてみた。聴こえる。自分の声が明瞭に。耳はなんともなかった。

次の日は、ジョイスのユリシーズを読んでいた。ブルームは広告取りだ。彼も若い頃はステイブ・デイーダラスだった。美学意識が冴えていた。芸術理論を構築して鳴海とやりあったものだった。いまは限りなくブルームに近くなっている。だがブルームだったら眞子と最後だから寝ていたと思う。彼は求めなかった。求めていけば眞子は受け入れていたに違いない。欲情がそこはかとなく感じられた。だが後先顧みず未練を助長することを怖れたりその場限りの快楽を貪って真にブルームになるのを怖れたりした気持ち彼の感情にブレーキを掛けていた。彼が広告取り仕事を避けているのはブルームを避けているからだ。ブルームは引越の仕事はしないだろう。

翌日、鳴海が時間通りに現れた。ドアが開いて外は雨だ。ようやく気が付いた。掌をかざすとわかる程度の小雨なのがパソコンが濡れるのを気にしていた。

「この際、本も売ってしまったら」鳴海が提案した。「もう目ぼしいものはないよ。キミと神田古書街を歩き回って買ったレヴィーストローヌや堀辰雄の限定本とかルイールチュセ

ールとかああいうものは神戸の古書店が引き取ってくれた。割に高かったよ」

「働かないとすぐになくなってしまうなあ」そのあとまた急に声小さくなってぼそぼそと話すから会話が噛みあわなくなつて互いに気まづくなった。かといって青白い顔で手伝いに来てくれた鳴海をなじるわけにもいかない。彼らは箱詰めしたパソコンをふたりで抱えて階段を降りようとした。鳴海が足を滑らせて尻餅をつき、慌てて彼はパソコンをひとりで抱える。「何だよ。体力ないなあ」鳴海は虚空を見つめて真剣に怒って何やら叫んでいるようだがちっとも聴こえない。「俺の耳がおかしいのかな。何もそんなに怒ることもないじゃないか、それに声になっていないんだよ」手を貸して鳴海を引っ張り上げる。「どうしたんだ？」「体調が悪いようだ」今度は少しは聞こえた。ハアハアと肩で息をしている。雨脚がやや強まり彼は焦った。キーを受け取り車に積み込んだ。鳴海の運転も危なっかしいものだった。傘をさして横断する歩行者を避けようとして大型トレーラーにぶつかりそうになつたりオートマチックでないものだからエンジン音だけ元気はいいが信号が変わったのにそのまま居座り追突されそうになつたりした。彼はハラハラして気が気ではなかった。「いつもこんな調子なのか？」「そんなことねえよ！」吐き捨てるように言う。気が付くと片手で運転している。「今日は右ひじが上がらないんだ」「まあ無理するなよ」彼が言う。「なんか言った？」彼は頭を抱えて黙り込む。

「ああ、俺な、同棲してるんだぜ」「同姓？ 誰と？」「ビダ

イセイだよ」「なんだ新種の植物か？　ふうん。それがどうした？」「羨ましいかい？」彼は頭を捻る。鳴海は片手をハンドルから離してギヤを速にチェンジする。よせよ、お前は俺をバカにしてるんか？　してないって。

命からがらJR神戸駅まで辿り着いた。三宮と違って寂れている。貨物駅のような人通りの無さ。その界限に中古のパソコンショップがあった。ちよつと話つけてくるからここで待っててくれ、彼は言い残して強くなった雨の中を傘も差さずに走って行った。その店も高架下だった。磨き上げた中古のパソコンが並んでいた。店主はぶつきらぼうな中年男だった。型番を言うとは最新ではないがまあまあ売れているという返事だった。だから二十万で引き取ろうと。二十万！　彼には有難い数字だった。いいですよ。ほとんど使っていないですけどね。取扱説明書もあるし。「ソフトは？」男は尋ねた。「ソフトはないですよ」男は苦笑した。「ソフトが無ければただのハコだよ。パソコンなんて。そりゃいつまでたっても新品だ。まだよくわからずに買ってしまふ人はけっこういるね。確かに」「そのうち通信として使われるようですね。会社で言ってみました」「ふむふむ。では見せてもらおうか」

彼は駐車場所に戻ろうとした。視界を遮るような激しい雨。「しばらく待ちますか？」男は言う。「急に激しくなりましたね」傘を貸してくれた。彼は傘があるなら鳴海を待たせても悪いと思ひパソコンを取りに戻る。降りやまない雨の中で黒い影が車の脇に立っていた。JRの高架を電車が通過してしまふまで彼が声を掛けても鳴海は反応しなかった。

鳴海！

パソコンもろともびしょ濡れだった。いつのまにか箱から出して、

「何をしてるんだ！」声を掛けても黙っている。「動けないんだ」小声で彼は答えた。考え事をしてるようにぼんやりとしていた。彼は背筋が冷たくなった。雨のせいばかりではなく何か尋常でないことが起きていると思った。彼は傘を鳴海に渡して代わりにパソコンを抱えて店内に走り込んだ。鳴海は助手席の座席を横にして眠りについた。

戻ってきてても動かなかった。何十分か、そのままだった。目覚めると気分が悪くてしようがないと言う。予定していたレストランでの食事は中止した。二万円を返すと鳴海はすぐに帰ろうとした。その時、思い出したように「美大生の彼女を紹介するよ」と言った。少し休んだからか、今度は意味が通じるくらいに明瞭に発音した。「付き合っているのか？」

「さっき言っただろうに」とだけ彼は言った。「本当だよ、来週の日曜日、また来るから。いいだろう、金もできたことだし。とにかく何でもいから早く就職しなよ」思いがけない言葉に彼は呆気にとられていた。鳴海が他人に干渉するのは初めてのこのような気がした。

消費者金融は近いうちに取り立てに来るに違いないので返すことにした。水道とガスと電気は止められては困る。半年くらいは大丈夫なようだが。そして一応電話も。

何日か部屋でうずくまっていた。残っているのは十八万円弱だった。札束を腹の上に置いていた。ずっと。ロビンソン

の最期の食糧のようであった。毎日同じ日々が続くものと思われていた或る晩は電話が深夜一時過ぎだというのに鳴りやまなかった。深夜に電話が掛かったことはない。取り立ては禁じられている。それで五分間ずっと鳴らしていたが、鳴りやまないので受話器を取った。

白川だった。息せきこんだ白川が言うには鳴海が集中治療室にいるということだった。家族への連絡が取れない為、手帳から連絡先の見つかった白川と美大生に連絡が行き、たまたま白川の入院先に搬送されたのだという。マンションの花壇に深夜に倒れているのを塾帰りの中学生に見された。警察も来ていて自殺未遂なのではないかと。「行こう」彼は短く答えてタクシーを呼ぶことにした。

病院に到着した。面会謝絶だったが家族代わりに彼ら三人は集中治療室の脇の部屋にいた。心肺の様子を伝える装置がある。頸の長い色白の女性を彼は鳴海の姉に似ていると思った。それが例の美大生に違いなかった。「明史さんですね。三人で会うことになっていた……」そのとたん彼女は号泣した。「助からないみたいです！」鳴海の物語が不意に途絶えようとしていた。「おかしかった。何日か前からおかしかった。自殺じゃない。病気が事故を引き起こしたんだ」彼は看護婦とも医者にともつかず喚き散らした。ずしりと重い球のような塊が彼の胸に覆いかぶさりおそらくは白川と美大生も同じ想いに包まれていただろう。最新設備のはずだったが、病院の蛍光灯はランプのような貧しい明りしか発していなかった。

(了)

體

常磐 誠

見てみる。○○。僕の耳に入る先生の言葉。先生の、僕一人の体ならつまみ上げるくらいに太い指が向いた先の建物は、まるで幼稚園か何か、子ども向けの施設のようだと思った。

山道をずっと登って行く車。××はずうつと無言で、顔を下げている。僕も××も、制服を着ている。先生も、珍しいほどに黒い、真っ黒なスーツを着ていた。時折、窮屈そうにネクタイを弛めていたのが、妙に気になった。

××は、そこに安置されている箱を見つめて、撫でて、そこに顔を埋める様にして突っ伏して。目は、赤く腫れ上がっていて、痛々しかった。

僕と××は、物心ついた頃から一緒にいた。

「もうあたしたちはきょうだいだな」

そう彼女が言っていて、僕達の親を笑わせたこと。今でもはっきり思い出せる。

「じゃあ、どちらがおねえさん？ それとも、おにいさん？」

そんな風に、僕の母が聞いた時、何の迷いもなく、

「もちろん。あたしがおねえさん！」

と言いつつ、僕とけんかになったこともあり、思い出す。

そのやり取りを、この人は。もう、動かないこの人は。……××の父親は。黙って見ているばかりだ。何を思っていたのか、何を思っているのか、何もわからないまま、××の父親は死んでしまった。

××は自分の父親の臨終を伝えられたその瞬間から、泣いた。泣いて、泣いて、いつになっても、泣き晴らす、っていう言葉は嘘だっと思うくらいに、泣いてた。

その時僕が何をしていったのか、ハッキリと覚えていない。ただ、薄暗い診療所のベッドの前で、僕も目の前が真っ暗になったようにして、ただただ突っ立っているだけで、その癖、先生と医者と、僕の両親とが何かしらの会話をしている、××が一人きりで泣いている。そんな状況だけは無駄に捉えられていた。

結局のところ、僕は、僕は何もしていない。何一つ、できていないのだと今気付いた。その時には、まるで僕はここにいないかのようにして、××を一人きりで泣かせている大人の冷たさに、静かに怒りさえ覚えていたのだから実に滑稽だ。笑える。ただだけだよ。クソが。誰が？ 言うまでもない。クソだ。

葬式という場がどうしてこんなに大事なものと捉えられているのか、僕にはわからない。退屈なお経、誰が誰だかわ

からない参列者。冬休みを一日無駄にしたクラスメート。家を出て行ったきり、結局戻りもしない××の母親。血は繋がっていない僕ら。取り仕切る僕の両親と先生。

大学の友人だったそう。最期の時を一緒に迎えた診療所の医者も含め。身寄りがない××の件も、話はあっさりともとまっていた。うちに引き取られることになっていた。離れることなく過ごせることはいいことかもしれない。僕と××は、物心ついた頃から一緒にいた。だから、今更分かれて過ごすなんていうのも違和感があるし、良かったのかもしれない。

「あいつまだ来んの？ がっこー」

「さあ？ 来んじゃねーの？ いらねーけどな！」

「お前そういうこと言うなやー。ひゃっひゃ！」

諫める言葉も感情に微塵の説得力がない。先生はいない。忙しく動いていて、留まっていられない。そしてこういう奴等は、先生がいけないタイミングを積極的に嗅ぎつけ、狙って、選んで叫ぶ。下卑た連中。葬式の暗い雰囲気彩る、真つ暗な連中。真つ暗な一員。それは僕もか。僕も下卑てるのか。ああ。そっか。だって僕、何もしてない。

××の耳に、これらの声は届いている。連中に見つからないように影に隠れて、でも、体が震えていた。言葉が××を打ち付ける度、体が目に見えて震えていた。

そんな時間が無為に過ぎた。僕は葬式という場がどうしてこんなに大事なものと捉えられているのか、わからない。昨日の所為で、余計にわからなくなった。

××の父親の遺体は、今から火葬場で燃やされ、骨になる。当たり前のこと。そうしなければ、墓に埋めることもできない。知っていた。きつと××も、知っていた。だろう。

見てみる。○○。僕の耳に入る先生の言葉。先生の、僕一人の体ならつまみ上げるくらいに太い指が向いた先の建物は、まるで幼稚園か何か、子ども向けの施設のようだと思った。：：：ここが、火葬場だった。

人の死は不吉だと、何となく僕は思う。これは多分皆そうなんだろうなとボンヤリと感じている。当たり前前の日常の中に、死というものは存在しないことになっていて、それを嫌うから、何故かこうして明るく仕立て上げられた建物で、人の死を迎えている。それに何の意味が？ わかる訳がない。

僕の両親は遅れて到着する。××の父親の体が入った棺と同席できるのが三人まで、と聞かされた時に、何故か母が先生と僕を××に付き合わせる形を提案した。最初先生は遠慮したが、強く押ししてくる母に、先生が折れた。

建物の中は落ち着いた雰囲気に溢れていて、妙に広い空間、空気がどうにも落ち着かなかった。案内の指示に従って、というより、ただ歩く先導について行くだけで物事は進行していった。

いつだって、僕も××も自分の意思で歩いてなんかいないって。

「あいつ消えれば良くなーい？」

語尾が上がって行く。私バカでーす！ って声高らかに宣言してるようにしか聞こえない。

「あいつどうしてここに来るのかねー？ さっさといなくなればいいじゃん」

別に恨まれるようなこと、××は何もしていない。

「あいつあれじゃん。くっせーじゃん？」

僕は鼻づまりではない。××から不快な臭いがしたことは一度もなかった。

「あいつみたいなのが、どこ探したっていねーよ！」

××は確かに勉強はできない。ただ、上には上がいるように、下には下がいるものだ。例えば、この張本人。チラリと見た最初の地理、××よりも更に悪かった。

「退学とかさせらんねえの？」

「今時教員を追い詰められるんだろ？ ハハアッ！」

「くっさいくっさい！ あいつ便所くっせえもんな！ ヒヤハハ！」

「くっせえ上にバカでブス！ 何の取り柄もねえもんなー！ ギヤハハ！」

市立に退学なんてあり得ない。僕達は中学生だ。××が便所くさくなつたのは、こいつらが××の持ち物を便所に捨てたから。ご丁寧に糞までやらかして。そしてそれを××は泣きながら拾ったから。可愛いかブスなのか、僕にはよくわからないが、僕は××を一度もブスと思つたことはない。僕から見れば、こいつらの方がよっぽど取り柄ない。

だから××は学校に行けなくなつた。別に今時珍しくも何ともない不登校生の誕生の瞬間。こんな連中に、先生は一度も声を荒らげたことがない。事なかれ主義じゃないことはわ

かる。一人ひとり呼び出しては、時間をかけて話していた。全てにおいて冷静で、無闇矢鱈に笑顔を振り撒き、それでも容赦は無かつた。塾も休ませた。習い事も。部活も。家の用事も。いちいち全部に電話を掛けて休ませた。保護者からのクレームが凄いと聞いた。それにも一つひとつ対応した。倒れない辺りいろんな意味でバケモノだと職員室で誰かが呟いていた。親が家で語る。職員からも睨まれてるんだろうって。『周囲にまで迷惑かけやがって』って。クズばっか。クソばっか。バカばっか。なーんてな。一番はどこのどいつだろうか。聞くまでもない。

不登校。珍しくも何ともない。でも当事者は別だった。一人娘が不登校。こんな子に育てた覚えはない。叫ぶ母親の声が隣の僕の家で響いて聞こえた。明日は行きなさい！ お母さん送っていくから！

送って行ってもいいことないよ。僕ですら知ってる常識のはずだった。嫌だ！ 嫌だ！ 泣いて叫ぶ××の声を久しぶりに聞いた。まるで子どもだった。子どもだと、思つて。

そして僕は気づく。ああ、今も子どもだった、って。父親の仕事が朝早いから、送れるのは母親だ。今はいない母親だ。結果なんて語るまでもない。思うよりも、長い距離を僕たち三人は歩いてきた。

××は、何も口を聞けなくなつていた。今の話じゃない。結果っていうやつだ。僕が知っているだけで、聞いていただけ、

「いちいち親に頼らなきゃ学校にも来れねえのかよ」

「何々、マザコン？ 便所にバカにマザコンまで追加？ もうアタシなら生きていけな〜い！ アツハハ〜」

「誰アイツ？ ゴメンマジ俺今の今までこんなクズのこと忘れてたわ〜。思い出しちゃってマジ不愉快！」

そんな羅列が続いて。僕はこんなクズに不愉快な思いを繰り返す羽目になった。

机は廊下に投げられて、カバンが便所に飛んで行った。

先生はこの両親を止めていた。説得していた。××が今学校に来て、自分が見ていないところで攻撃される、と。これは××が悪いのではないんだと。自らの力不足を詫びながら、説得したのだと、僕も親から聞いた。無駄だった。何もかもが。先生は、叫ばなかった。怒りにかまけて感情をぶちまけたりしなかった。腕が震えていた。教卓を叩き割ることも容易なんじゃないかって思える程に凶太い腕が、わなわな震えていた。

今度は、××の家が、おかしくなっていた。叫び声。ヒステリックな女の声が聞こえることが増えてきた。

アンタノセイデ××ハアンタノカカワリガワルイカラソウナッタノヨアンタノセイデアンタノセイデアンタガソナダカラ××ハオカシクナツタノヨ！ アンタハアンタノアンタガアンタハアンタノアンタガアンタハアンタノアンタガアンタハアンタノアンタガアンタハアンタノアンタハ。スギルアンタガアンタハアンタノアンタガアンタノアンタハ。

意味不明な言葉達。ずっと落ち着いていて、先生に負けず劣らず体が大きく、でも何も言わなくて、笑わない。だから怖いと思う××の父親が、

オマエニマカセテキテタノニナゼコンナコトニナツタ××ガドウシテコンナフウニナラナキヤイケナイ××ハコンナコジヤナカッタハズダコンナフウニナルハズジヤナカッタイッタイナゼダナニガドウシタ×××××エエ！ イッタイナンデダナンデナンダヨナンデダナンデダナゼダドウシタ×××××××！

意味不明に叫んでるー！ように聞こえるー！のが、あまりに滑稽だった。ああ、こいつも同類項で括れる奴だった。

すぐ側で聞いているであろう××が、かわいそうだ。何か、僕はその程度にしか××のことを考えられなくなってしまう。それが何でなのか、未だに僕はわからない。歩く足は止まり、その意味不明なことを叫んでいたはずの一人が、何も言えない状態で箱に閉じ込められ、そして狭く真っ暗な部屋に入れ込められた。

係から説明があつて、ボタンを押せば火がついて、後は外の煙突から天に昇って行くのを見届けて、後は僕の両親と合流して箸渡し。淡々と進んでいく。淡々と進まなかったのは、進めなかったのは、××だった。

手がボタンを押さないでいた。押さなきゃ進めない。進みたくない。××の首が何度か横に振られた後に、××は腕いたまま、嗚咽を漏らして動けなくなってしまった。

先生に押すように頼んだ係に対し、
「すみませんが、これは僕が押すべきものではありません。どうか、待つて貰えませんか？」

それは酷ではありませんか、という問いかけにも、先生は同じようなニュアンスの言葉を繰り返して、僕達は××の父親の抜け殻を放置したまま、待合室へと通されることになった。

待合室に入っただけで、僕の両親がそこに入ってきた。事情は既に係の人から聞いていたらしく、あえて僕や先生に聞かせるようなことはしなかった。××が部屋から出て行くとして、母に止められる。トイレ。ただそれだけ言っただけで、××は部屋を出て行った。先生が僕も少し出るよ。と母に伝えてから××の後を追うように部屋を出て行く。

三秒間の沈黙。誰も喋らないのが、妙に落ち着かない。今いるのは家族だというのに、家族を一气に失った××とは違って、不謹慎ながら、良い景色の中で団欒しているようにさえ見える快適な空間で、僕らは沈黙し続けていた。居心地が悪く、悪い。……罪悪感？ 違う。そんな切っ掛けで貼ったような言葉が出てくること自体、まさしく僕が人でなしの最低最悪のクズ野郎だと証明してしまったみたいで、腹立たしい。

「○○もトイレ？」

母の言葉に、うん。そう嘘をついた。出て行って何をしてもない。何かをするために出ていくでもない。

先生はトイレの前、廊下を少しだけ歩いたところにある広まったところにいた。テレビが何かしら大音量で叫んでいるけれど、先生はそれを聞いていないようだったし、その音は僕の耳や頭に何かしらの意味を与えなかった。先生の手には

ペットボトルのお茶が二本。ここで何をしているんですかと聞いてみた。

「××がああスイッチを入れられなかったのは正解だったな」先生の答えは僕の問いの答えにはなっていないかった。

「あつという間に骨になる。ずっとバタバタしつ放しだったからさ。こうしてゆっくりする余裕なんざなかったろうし、今時珍しい籤付きの自販機で大当たりを出すこともなかったろうさ」

お茶を一本僕に差し出しながら、奢りだ。なんて楽しげに言っただけで先生は笑った。当たっただけだろ。僕の顔には露骨に出ていたろう。普段僕はこういう大当たりとは無縁なんだが。先生の笑いも微妙に乾いているように感じて、僕はそのお茶をある程度のところまで一気飲みする。喉は渴いていたけれど、普段一気飲みなんてしないから、腹に一気に流れ込む濁流がズドン、と落ち込み、溜まる感触が気持ち悪かった。

「○○や××を担当できると知って、気合が入ったさ」

ペットボトルの蓋を閉めて、先生は笑顔のまま言った。僕はふうん、とだけ言っただけで、そのまま流す感じだと思っただ。

「もっと上手に、伝えられると思っていた。……単なる愚痴さ」

そのどろどろが愚痴なのか、わかるようで僕にはわからなかった。先生はそれきりしゃべらなかつた。

××一人くらい、もっと上手く救えると思っていた。

××のこと、別に好きなわけじゃない。単なる幼馴染で、友人で、うん。そうだ。顔見知りで、特別ななんかじゃない。けれど、うるさいくらいしゃべる××を。僕のことを平気で振り回す××が。勉強ができなくて他人に愛想悪くても、僕のことだけは妙に気にする××に。

「僕は、何ができたんだろう……」

ポロリ、こぼれ落ちた。僕はあいつらが憎い。だってそうじゃなか。××は何をした？ 特別迷惑なんかかけてないし、ただ寄ってたかって××のこといじめてただけでさ。両親だってそうだよ。一番苦しいの××だって普通に考えりやわかるじゃんか。わかるだろ。普通。何で勝手に出てっっちゃうんだよ。意味わかんねえ。何勝手に死んでんだよ。ふざけんなよ。

気づくと、先生の手が僕の頭の上にあって、時折、ポンポン、と触れる。

あいつらって一体何なんだろ。最低最悪な奴らだよ。ホントに、あいつらの方が死ねば良かったんだ。

僕もしやべるのをやめた。言っても、何も変わらない。ポンポン、ポンポン。この感覚が妙に気になって、僕の言葉は止まってしまったんだらうか。

「何かできること、ないかな」先生の言葉は、短かった。

「何もないよ。あるわけない」僕は無力だ。何もできやしない。今までも、ずっとそうだった。

「ホントにそうかな」

「そうに決まってる」

言葉のやりとり。繰り返すたびに僕は無力だって思い知って、落ち込んでいく。先生に聞かれるまでもなく、こんなやりとり。自問自答を繰り返してきた。答えは出てる。だから僕は黙ってた。

先生は違った。笑っている。まだ希望を持っている顔をしている。分かりやすい顔をいつだって、今だってしている。そして出る言葉は、

「例えばさ、××、遅くない？」

ただ単純に迎えにいけ、というだけの話かよ。がっかりした。

僕は、まるで先生が今までの状況を全部リセットして、何もかもを変えてくれるんじゃないかって思ってた、そんな訳があるわけない。あり得ない。冷静に考えればそうではかないはずなのに、無性のがっかりした。

「どこにいるんですかね。探してきます」

トイレ、というのはきくと嘘だ。僕はそう思って、席を立つ。

「いやいや。普通にトイレに入ってたよ」

先生はこともなげに言った。……じゃあ何故僕に迎えに行かせる。

「女子トイレに入れて言ってるんですか」

「え？ ダメかな」

先生は本気で僕に問いかけてきているように見えた。「ダメに決まってるんだら常識どこに置いてきたんだよ」

がっかりして、その勢いのまま僕はつつこんだ。

「まだ〇〇は子どもだから良いかなって。身体小さいしまだ大丈夫かな、と」

「と、じゃねえ。普通に学ラン着ててまだ子どもも何もないでしょ。分別つく年でしょ、どう考えても」

「うん、そのノリ」

先生は親指を立てて僕に言った。意味がわからない。何のノリだ。

「××に何ができるかって肩に力いれて考えるのは僕達大人の仕事だ。××を支えるのは、やっぱ楽しくなきヤツマンないだろ。そう思うよな？ お母さん？」

「いや私貴方のお母さんじゃないです。先生」

気がつくとも母が後ろに立っていた。

「え？ じゃあママ？」

「同じ年です。こっちが恥ずかしいのでやめて下さい」

キツパリと切り捨てる母の態度に先生は、ちえー。と言った。

「ちえー、じゃねえ」

「ちえー、じゃない」

親子でつつこむ羽目になるとは思ってもみななかった。

それでは、××ちゃんは私と〇〇で迎えに行きます。先生はそのまま火葬場まで行ってください。主人ももう向かっていますので。

あえてーと言った方が良いのだろうー事務的な口調で母が先生に伝えた。先生は黙って頷くとそのまま席を立った。

「××ちゃんのことも〇〇のことも見えてくれたのよね。ありがとう。それにお茶まで」

母が先生の背中に言うと、

「えー？ いや、僕は喉が渇きまくっててヤバイと思っただけよ。あ、とりあえず百五十円はツケってことで」

先生は脱力した様子で歩きながら答えただけだった。あと、絶対にお金は払わない。

女子トイレの洗面所に入るだけでも、相当に緊張する。実際、僕は入るまでのことはしていない。××は女子トイレと廊下の境目のところから十分に見える位置にいた。××ちゃん。母の声に反応して顔を上げる。そして鏡越しに母と僕の両方に気付く。××の手は赤くなっているのが遠目でもわかる。明らかに長い時間、そして回数的にも手を洗い過ぎていた。そして、僕達に気付いているにも関わらず、××はまだ手を洗おうとする。

長い髪の毛が二つにまとめられている。焦って体制を下げたから、髪の毛がふわっと膨らんだようになって、そしてまたしぼんで下に落ちた。

「もう大丈夫よ。洗いすぎよ。こんなになるまで洗い続けるなんて……」

××の両手をとって母が呟く。ハンカチで優しくその手を包む。

「あたしは、……臭いから……」

××のか細い声が辛うじて届く。

「臭いなんて、誰が言ったの？ ××ちゃん、臭くなんてないじゃない」

母のそれは正論で、誰が聞いても——あいつらは、別だ——正しいに決まっている。でも、そんなんじゃない。××が欲しているのは正しい言葉じゃない。××の顔が晴れることはなくて。いつも、今も、ずっと苦しそうな顔をしている。呼吸が浅い。吸ってるのに全然酸素が足りてないんじゃないか。手が痛むはずだ。それでも、××は手を強く握っている。痛む両手を更に痛めつけていた。

「さあ、行きましょう」

母は××の話を聞きながらも、やっぱり都合もあつて急かされているのだろうか。××の背中を押して火葬場へと急がせようとする。動かそうとしていた。まるで××が歩けないようじゃないか。いても立ってもいられなくて。トイレから二人が出たところで、僕は、

「ねえ、××」

その腕をとって、名前を呼んだ。

「……………」

××は何も答えない。何を言えば良いのか、何を感じ取ったら良いんだろうか、何を思えば良いんだろうか、……何をすれば、良いのか。何もかもわからない。僕たちの顔は、きつと互いにそんな顔だった。

「ごめん。僕は何もしてなかったよね」

意を決したつもりで放った言葉は、謝罪になった。そのまま、続きを紡がないまま、母に急かされ押されるようにして

僕と××は火葬場に歩みを進めて行く。腕をとったはずの僕の手は、だらしなく××の制服の腕の部分をつかんでいるだけになってしまった。これで、僕は××を支えることなんて、できっこない。

もつと上手く救えると思っていた。都合の良いヒーロー。僕も××も懂れた、かつてのヒーロー。テレビに映るヒーロー。悪い奴なんか俺がやつつけてやるよ！ バシッと変身なんかしてさ。かつこいいね。カッコイイな！ 僕の中で蘇る二人一緒に見たテレビ。皆一緒だった風景。もう戻ることはない。戻れない。出て行った。こんなに弱くなった。そして誰も手の届かない所に行ってしまった！

右手に力が入る。ねえ！ ××！ 言葉だけが、出てこない！ どうして僕は、こんなに弱いままで、××のことを上手に救えるなんて、支えられるなんて、思えたんだろう！ 僕は俯いたまま、××と二人きりで歩いているみたいだった。二人して俯いたまま、何もできない弱い子としてトボトボ歩いて。希望なんて、どこにも、ないんだ。

火葬場に入ると、先生と父が棺を挟んで××の父親を静かに見つめていた。友人が死んだっていう状況を冷静に二人ともが受け入れ切っているように見えて、大人っていうのはわからないな、と思った。

二人とも、何も言わなかった。××や僕を急かすようなことはしなかった。先生は静かに笑っていた。いつでも、この

人は笑えるんだろう。係と大人たちが、棺をまた真っ暗な部屋に入れ込める。

「では、よろしくお願い致します」

言葉は短く、二度目の点火を促す。××が、一人で、小さく、小さく、歩く。おとうさん。呟いた声が僕には聞こえて。

…それは、助けて、にも聞こえて。

また、僕は××の制服の袖を掴んでいた。それに何の意味があるのか、ちっともわからないまま。…意味なんて、あるわけないって、わかっている癖に。

「あやし、悪い子だ」

袖を僕に掴まれた状態で、××は小さく呟いた。これは僕にしか聞こえなかった。

「あたしがもつといい子だったら。もつともつと皆と仲良くできれば、おとうさんはこんなに苦しまずに済んだ。生きて、くれた」

その目から、涙が溢れていた。

「クラスでもつと上手にいられたら、いや違う。もつとあたしが、もつともつとクラスで頑張れば、こんなに辛い思いを皆しなくて、良かった…！」

そんなはずがない。あんな連中と上手にやっていけるはずがないんだ。頑張ることが正解だったなんて、僕には思えない。到底思えない。気づいたら、僕は××と一緒に歩こうとして、上手に歩けなかった。前がうまく見えなかった。目の前には膜が張られたみたいになって、足下が覚束ない。××

に体が当たる。××が咄嗟に僕が掴んでいない右腕で僕のことを支えてくれていた。そして気づいてしまったようだった。

「どうして〇〇が泣いてるの…？」

「だって、××は何も悪くないじゃないか…！」

嗚咽混じりでみっともない声で、僕は××にしゃべりかける。

「××のこといじめてた奴等だって、…××のお母さんも！ お父さんも！ 一番辛いのは××だってわかってたろ」僕だってわかってたさ。××。僕は××が辛いのは知ってた、けど、何もできなかった。違う。しなかった。最低だよ。本当に僕は最低だ」

左手で顔を抑えて涙と鼻水を拭いても、止まってはくれない。いつまで経ってもグズグズで。しょうがなくて。

「けど、さ。××」

泣きながら僕は××を見ていた。

「もし××が許してくれるなら、さ。僕は今度こそ××と一緒に頑張るよ。××、もうお父さんもお母さんも、いないけど、僕は、いるから」

××はきよとんとした顔をしているようだった。周囲を見てみようかと思っても、泣いてる顔を横に向けたくなくて、どうしようもなかった。

「なんか」

××が口を開く。××の目に、もう涙はないみたいだ。

「うん？」

「告白みたいだな。〇〇」

「え？」

「唐突すぎて、なんか困る」

このやり取りに、僕はびっくりしてしまっただけで、でも何故か今更慌てたりすることはなかった。

「顔、赤いよ。○○」

そこは許して欲しい。

「そんなんじゃないよ。さあ、……大丈夫だよね」

××は、口を開かなかつたけれど、確かに頷いた。

僕はヒーローなんかになれやしない。上手に救えなくて、歩けなくて、みっともない。

だけど、だけど。

僕の右手と××の左手が重なって、僕は久々に××の暖かさを感じた。昔は当たり前だった温度だ。

「久々に○○の声を聞いたような気がする。昔は当たり前すぎるくらいだったのにな」

手に力を込める。最初の一步を、僕達は足じゃなくて手で、踏み出した。

〈了〉

流離

安部 孝作

※ ※ ※

持ち主がいなくなった途端に騒がしくなるものたち、この部屋はかつてこんなにも散らかっていただろうか？…わたしはその中から一つの箱を見つける。なにかが染み出している段ボール箱。近づけば臭いが強くなる。けれどもわたしはそれに手を差し出し、残された箱を開いた。そしてその中には、たくさんの夏みかんが入っていた。爽やかな中に、どろっとした苦い臭いがする。すこしのけてみると、下の方は傷んで腐り始めていた。

——そして忘却の果てに流れ去ったある一日を思い出した。

※ ※

電車は駅から出られず立ち往生していた。このまま出られなくていいのではないかと思った。混雑して蒸れた車内は、一段と冷えて、おしあいへしあいしている。僕はこのまま押しつぶされていくのかと思った。車窓は曇って外が見えない。いくつもの水滴が垂れ落ちてゆくのをじっと見ていた。そしてアルミの枠に弾けて、蚤よりも小さい飛沫となり消えてい

ったのを。このままこの身動きの取れない中で、待ち続けているだけなのか。待つ…：一体誰を？…：一体なにを？…：線路内に立ち入った、たった一人の人間を、それとも、その人間が正気を取り戻すのを…：誰が取り戻してあげられるのだろうか、その人の正気を。誰が連れ出してあげられるのか、その生から。機械はそうした人にも仕えるべきなのだろうか？…：電車はあつという間に仕事を終わらせるだろう。けれども人の手によれば、違う意味が持てるのではないか。同じ旅路を行き、帰還した時に同じ地平が拓けるとは限らないのだ。

叫び声をした。それは錆び付いた螺子のような音だった。それは残響として苦々しいものを遺していった。ここにいる日常的な空間において、今朝もどこかへ向かわなければならぬ人々に、逃れられないことを宣言するのだ。この電車がこうしていつまでも人々を閉じ込める事に意味はないだろう。朝からただでさえ不条理な状況に置かれているのにもかかわらず、逃れ得ない苦しみを共有することにぞっとしない人はいないだろう。僕もまたぞっとして、鞆を落としそうになった。そうなれば誰かの足に当たってしまったら。そして僕は鞆を拾えないまま姿勢を維持せねばならないだろう。がたんごとんと大きく揺さぶって、電車は漸く動き始めた

ようだった。この冬のある日に、一体どれだけの人が、僕がもうなにごとか心の中で諦めていることを知るだろう。時計を見なくとも判るのだ。もう間に合いやしないと。一体どれだけの人が、いつもなら、あるいは他の誰かなら容易にこなし、過ごせていけた物事を、たった一つの思わぬ出来事で不可能とさせられなければならないという経験をしたことがあるのだろうか。それは誰にでもあることだろう。だがひとつひとつの出来事は？…それは不可能の環に閉ざされている。その結果、容易に過ごした人やこなした人は思うだろう、それは些細なことだと。それはあなたに限った話に過ぎない、と。こっちは対応しかねると。あなただけが被るならば、あなたに非があるのだ、と。僕がこうした一人の自殺を望む人間のせいで受験会場に遅刻したからといって、僕が受付をする時試験監督はどれほどの寛容をもって対応するだろうか。時間は常に喪われ続けている。だからもう逃れられないのだ。もしそこから逃げようとするれば、そうすればするほど、そのものを良く識ることになるだろう。

電車は動きだしたと言うのに、一体なにかから逃れられると言うのか。避けられない壁に向かってつつこんでいく無謀な運転に過ぎない。どうか止めてくれ。せめて僕をここから出してから発車してくれ。もう間に合いやしないのだ。すっかり諦めてしまっているのだ。もう家に帰って眠ってしまいたい。これからどうするかなど、なにも考えたくないが、きっと明日には頭の中を巡り始めるだろう。だからそうなる前に眠っておきたいのだ。疲労、あるいは弱さというのが与える

悪夢と出遭って、そこから醒めてみたいのだ。

※

父の実家から夏みかんが大量に届いた。宅配便の人の筋肉の浮き出た腕から滲んだ汗は、その筋に従って流れていた。すっかり暑い夏である。あつという間の半月だ。みかんには劳いの言葉と様子を伝える手紙が添えられ、封筒には五千円札が数枚入っていた。

浪人生になってからというもの、まだ大学生になっていない僕を差し置いて、両親は早くも手が離れたという感じだ。寛ぎ始めていた。そして、この夏はみかん農家をしている父の実家に行って作業を手伝って来るといって二人は出て行った。出発の一週間前に、なにやらごそごそして荷造りをしていくから何事かと思ったら、この通りであったのだ。特に重要なことという感じもなく、母は事情を述べるとそのまま黙々と作業を続け、父はトイレへ入っていった。何事もないかのように…：僕はこうして一人で今家で過ごし、受験勉強をしている。それで何の問題も確かにないようだった。だからそれはさして重要じゃないと思われているのだろう。いつもそうやって扱われるのだ。——だからそうやって扱ってしまふのか。——過酷な闘いというのは、肉体と精神の淵を潜った先に用意されている。しかしたった一人の人間——それも自己——の奥へと沈潜していくことは、沈没船に似た虚しさ忌々しさが付きまとう。それはあたかも失敗で、後とな

れば幽霊船となって世界中の海を漂泊するかのようだ。深海に沈み、朽ちて行った数々の船たち。無数の貝や海老、磯巾着に蝕まれ、腐りつつある海藻を巻き付け、穴という穴から魚が出入りするあの骸。それとなり果てるべく、僕は今勉強しているのだろうか——受験まで、僕はただひとり閉じこもって勉強していたのだから、「そのままお家にいてくれればいい」と言っていた。その通りであった。別段問題らしい問題などなく、こうして二人が収穫した夏みかんの詰まった段ボールを受け取った。そして昨日までのように、明日からなにも受け取るものがない日が続き、いつか二人が帰ってきて、なにも変わらず僕は勉強していればいいのだった。——その通り勉強していればいいのだった。

だが僕はわかっていて、溺れかけて、顔は半分より出さず、息はもう尽きかけていることに。みかんの爽やかながら、熟な甘い香りはまるで憂鬱そのものであった。それは陽を沢山浴びながらも、深く濃い影を作らねばならない人間の宿命ではないだろうか。人はそのままそれを踏みながら歩くのだ。ペーター・シュレミールのように、それをもし悪魔にでも売ってしまえばどれだけいいだろうか。そのために彼は金を手に入れた。だが、僕は肉体の喪失を買うのだ。そうして淵を失くし、断崖絶壁で僕は立ち尽くす。そこからはもう、無限は消え去り、奥底には死のみが用意されている。とはいえ、彼の懊悩に比べれば、僕のことなど些細なことだろう。なぜならそれは、ありふれているから……そして、あまりにありふれているけれど、みな容易に乗り越えていくから……。彼

らは影を踏まずに生きる術をしっているのだろうか。

模試も先週受けて、自己採点も済ませてある。まずまずの点数で、あとは結果を待っているだけだ。まだ夏休み期間中であり、受験当日までは日数がある。目の前に積まれた参考書は殆どが済ませてある。だからといってもう終わったわけではない。その間もまた勉強しなければならぬのはわかり切ったことだった。けれども、できなくなっていた。重たくなった身体をなんとか擦りよせて机に就いた。だが、ノートにおかれた手はもじもじとして一向に動こうとしない。鉛筆は海老のように痙攣している。頭でいくら念じても全く身体は動かない。義務感に突き動かされるのは心だけだった。僕はこの瞬間精神の浜辺に立っていた。朝風の時間、柔らかな心地よい陽射しが誰もいない浜を照らしていた。すっかり静まり返った世界で、更紗のように整った紋様を描く浜砂に、足跡だけが厚かましくも点いていく。肉体の海はどこまでも茫洋としている。その上には千切れ雲がいくつもあがるが、一つたりとも動かないで、ぴたりと止まっている。それは絵のように不自然だった。

机の上に広がったままの物理の問題集、そこに書かれた力学の問題を見つめる。鉛筆を握った手は動かないから頭の中で考えるだけは考える。しかし必死に考えようとすが引っかかりがない。進展していかない。摩擦をすっかり喪った脳味噌は、エンジンをふかせるばかりだった。耳元で問題の中のバイクが唸るのが聞こえる。バイクは快活なエンジンで、颯爽とした走りを見せる。砂埃をあげながら山道を一気に駆

け下る。脳味噌が揺れる。液体が鼻から垂れ落ちそうな感覚に囚われる。ゆっくりと手で押さえてみると、融けた脳味噌なんかではなく、単なる透明の鼻水だった。そこで視界がぼやけていることに漸く気付く。瞼からせり上がって涙が溜まっていた。それはもう零れてしまうだろう。

僕は転がすように椅子から身体を落として、とにかく横たえた。それはこれ以上自重に耐えられそうになかった。その場で糸を切られた操り人形のように、がっくりとうなだれたり、天井を見上げていたりしたら全く不気味だ。口は開きっぱなしにも閉じっぱなしにもなるだろう。目は開かれることはあるのかどうか知らない。とにかく、こんな人形はきちんと片づけておかないといけないのだ。それが無理ならせめて横にして隠しておかないといけない。僕は転がっていた、そして布団の上に辿りつくくなり、逆回転して布団を巻き付けていた。そしてそのまま息をひそめているようだ。人形のようにできるだけ息をしないようにしているらしい。何もかもが他人事のようにだった。僕は僕を観察していた。その行動はどれもこれも理解できなかった。

勉強をできない。鉛筆を動かせない。席に就くのがやっと。
…ああ、あほくさ。

どれもこれもあほくさい悩みだと思った。けれどもこれが今の僕の頭の中を占めている。キップルの原理はここでも有用だ。あいつはただのパート野郎じゃないな、そう思った。多分想念の多くはキップルのようなものだ。そしてそれをなんとか無くしていくこと、それ自体が思考である筈だった。

だけど僕の頭の中では今思考は働かなかった。何もかもが分解されていってしまう。片づけていこうとする思考自体が解体され、キップルとなり果てる。そこに余地などなかった。全ては分裂による瞬間的な隙間があるだけで、そこは充満しきっていた。今にもこの水槽は硝子が砕けるだろうと思った。何が飛び出すか、金魚がいても、それはなにも可愛くない、むしろ醜悪となってしまうだろう——解体してしまう——事故、全ては事故的だった。僕はその事故の責任を取りたくなく、全くなかった。それは事故をおこすべく既にそこにあつた。

物理の問題集も、僕も、なにもかもが既にそこであり、閉じられることもなく、解かれることもなく、むしろそうされるのを待っているだけの存在として横たわっている。用意しておく存在は、用意してもらえない。だから肉体をはぎ取られてしまっている僕は今、布団にくるまった影の中で安心していた。なにかに包まれていたいと思うのだった。それは用意してくれている存在だ。常にそこにあつてくれる。あとは、幸福だとか安らぎは感じるか感じないかの問題となるだろう。けれどもそんなもの僕にはなかった。

受験勉強でさえ、全く集中できないのだ。一体なにを感じ取れるのだろうか。肉体と言う偉大な感知器を失くしてしまつて、僕は一体何をもち得るのか。憂鬱は黒い引き潮となつて僕をさらっていくだろう。そして、船が沈むように——それは事故だと言ひ張る人々がいるだろう。確かに事故だ。それは重大な欠陥による——僕は溺れ死ぬ——これは事故だ。だがその責任はとれない、僕は失敗していない——けれど、藻

屑となり果てる前に遺す言葉はこれでいいのか？——

電話が鳴った。出ないでいると留守番電話に切り替わる。高校時代の同級生のYだ。久し振りに聞く声のようだ。「おい、いませんか？ まあいい。どっか旅行行きたいから折り返し電話をください。お願いしますねー」すこしよそよそしい口調は変わりなかった。半月で何が変わるかとも思った。しかし僕にはなにもかも変わってしまった気がする。なにもかも変わらなければいけないだろうと思う。

※

夜になって掛け直すと、Yはもう風呂から出てきたところだった。僕は今夏みかんを二つ食べて夕飯を済ませたばかりだった。Yは早速という風に、伊勢参りだけして鳥羽に海を見に行こうと提案してくれた。陽気でぬくもりある声をする。僕が行きたいと言うと、Yは「あんまり元気なさそうだけど大丈夫か？」と言う。僕は「大丈夫、行こう。行けば何とかなる」と言うと、Yは「そうか。無理すんなよ。勉強し過ぎだから疲れたんだよ」と言った。それだけのやり取りで十分だった。それで出かける事になった。こんなに重たい身体は、小舟に積み、水に流して葬ってやらねば動きもしなかった。死体が自分で動いて自分で舟に乗るなど考えられないが、とりあえずYは積んでくれた。あとは流れていけばいいのだ。今の電話でもすっかり疲れてしまい、その日は歯を磨くだけで眠った。

それから三日間殆ど寝て過ごしてしまった。何事かわからない対象に非常な苛立ちを感じていた。そして暴れまわると、とたんに力が抜けて眠ってしまった。それは醒めたような眠りだった。時計の数える音が聞こえるような眠りだった。なにかあったのか自分でも理解できない。そんな日々が続く。水が自身の動きを把握できないように——「水は低きに流れる」は今僕の中で違う意味に変わってしまった……それは憂鬱に沈んでいくことだ……「水は深きに流れる」と言ってもいいかもしれない……だが、意味が変わってしまうのは愚かであるだろうか……そうか、ならば僕は愚かだ——独り言で会話することもあった。問題集は開いたままだったが、とうとう僕は苛立ちに任せ引き裂いて床に叩きつけた。ばらばらになったページが躊躇うように宙で漂い、翻り、散り散りになった。後悔よりも先に次の敵がやって来た。時計は碎かれるべきだった。思考はなかった。これは全部事故だった。思考すべきだった。だが思考は事故で解体していた。あるいは破壊作業員がいるのではないかとも思える。とにかく全て崩壊へ向かっている感覚がした。

受験勉強一つでこうなるものだろうか——勿論僕は自分でも考えた。そして考える余地がないと気付いた。ただその繰り返しばかりだった。許し難いなにもものかが僕の前に立ち上がり、何時までも暴れていた。そして醒めたように眠った。バイクが家の前を何度通ったか数えていられるほどの浅い眠りだった。眠っている間にその何ものかは蘇るようだった、そして僕の傍にびったりとついて、その冷たい手でやさしげ

に僕の髪を撫でているようだった。眠りは醒めるのを待たずに醒めていた。

そうして何とか三日間が過ぎると、朝方にYが迎えに来た。旅行に行く日だった。僕の身体は重たく、荷物より重たかった——それは当然のことなのに、僕は漸くそれに気付いたのだ。全く愚かなんだ僕は——すこしふらくように歩くと、Yは「大丈夫か？」と言うが、僕は「大丈夫、大丈夫。とにかく行こう」と言うばかりで、Yも「電車の切符は取ってあるから」と旅行に話題を切り替えた。伊勢神宮についてYが何か話し始め、僕は聞いては相槌を打った。彼は「聞いたことあるんだけど」と言う形で言葉を切つて、僕がなにか返答するのを数秒待った話し方をした。僕がなにか喋らないかと待っていたのだ。それはぼくにはわかっていた。しかし頭はわけのわからないことばかり考えていた。……彼が今僕から話を引き出そうとしているが、決して話してはいけないのだ……ここでは聞かれている……聞かれたら、まるでカルト信者として捕まってしまう……誤解が多すぎるのだ……伊勢神宮はカルトじゃない、スピリチュアリズムでもない……けれど彼らはそれを口実にするだろう……自明のことほど彼らはずり替えに用いる……。

痺れを切らせたYは「本当に大丈夫か？」と再び訊いた。「本当は大丈夫じゃない」と僕は言った。Yは「わかっているよ」と言つて笑つた。僕には笑えなかつたが、僕は自分の愚かさには気が付いていた。「水は低きに流れる」は再度僕の中で意味を変えた。——それは上がれないということだ……笑

いのような上昇はあり得ないと言うことだ……「水は下流に流れる」と言つてもいいかもしれない……だが、意味が変わつてしまうのは愚かであるだろうか……そうか、ならば僕は愚かだ——僕はつい口に出してしまつていた。Yは軽く笑つて、下流は低いに決まつているだろう、と反復した論理を用いた。僕がそう指摘すると彼は「頭はいつも通り働くのかい？」と更に笑つた。僕も反射的にすこし顔が綻んだ。面白いとか楽しいとかを感じなくとも、そこに鏡さえあれば、表情を変えられることはできるようだった。僕はそうやってなんとかYに合わせられるようになってきた。

一つバスに乗ると、その揺れに身体がばらばらに踊るような感覚がした。Yは次第に額に汗のにじませていく僕に怪訝な眼を向けていた。「バス嫌いだった？」「いや」「そう。もうじき着くから、まあ、すこしの辛抱だよ」Yは呆れたように言う。バスは確かにすぐに終点到着し、僕らは降りた。降りると、そこは街中だった、そこはまさに喧騒の塊だった。そして僕は、街中はこんなに混雑していたかな、と思つた。混雑しているのは知っていた。もつと混雑している時に歩いたこともあつた。けれどもなんだか意外な感じがしたのだ。Yは単に「少し振りだからだろう」と言つた。「確かに前回来たのはタワーレコードにCD買いに来た一年前だ」、僕がそう言うと「あの時CD馬鹿みたいに買つていたもんね。あれ全部ちゃん聞いた？」「うーん、まあ一応」「ずっとiPod弄っていたよね」「まあね」「まあいいか、とにかく歩こう」駅につくと改札のところでYから切符を受け取り改札に通す。

足取りは重たいままだったが、すこしだけ話をする感覚を思
い出した。

そうこうして快速電車に乗り込むと、景色はどんどん流れ
去っていった。名古屋市の景色は滲んで、灰色の渦巻きとな
った。そこにピンクや緑の玉が浮かび、呑み込まれている。

すっかり漠然とした世界になった。普段はそこまでの変化を
感じなかったが、今日は街中の様子はすっかり変わって見え
ていた。そして名古屋の中心街は、実際は流砂のような世界
だと思っていた。Yにそういうと、彼は今日の僕が全く宛て
のはずれたことを言っていると思っただけなのか、笑っただけ
だった。しかしその後、彼は「街もこうしてみるとあつという
間に外へ出る事が出来るものだけれどな」と言った。僕は重
力圏から逃れようとする歴代アポロの苦労の滲んだ姿を思い
起こし、電車というのはなんと手軽なもので、都会とはなん
と軽いものなのかと思った。この速さを思わせるデザインか
らかけ離れた、ただの四角く収納を優先させた物体が簡単に
逃れ去ってしまうんだ、この都会とか言うのは。「それは線路
を走るだけだからね」Yは返事をする。僕は話していること
と頭で考える事の区別がつかなくなってきていることに気が
付いた。「そうか、だからついて来てしまうのか、いつまでも、
それは」結婚式の例の車に付いている空き缶のようにね「な
るほど」僕は奇妙なほどにその喩えが面白かった。キップル
だ、ここでも——僕は笑いながらそう思った。スプートニク
だってきつとコーラの空き缶を引っ張っていた。「少なくとも
コーラ瓶の王冠を抜いたのは確かだな」とYは言った。ポン

つとなにか弾ける感覚が——音がした。僕は腹を抱えて笑っ
た。Yはやはり軽く笑っていた。

※

暫くするとあつという間に景色は変わり、三重県内を走る
電車は、いくつもの郊外らしい郊外を突き抜けていった。線
路はアパートや低層マンションとの距離を一定に保ちながら
走る。流れ去っていく数々のベランダでは洗濯物や布団が干
してあった。今日は快晴だった。「旅日和でよかった」僕はぼ
つり呟くとYは「そうだな」とすこし薄暗い瞳を浮かべて遠
くを見ていた。一体なにを見ているのか、僕はそちらへと視
線を送る。するとその先には重たげな入道雲が大雨を降らせ
ているのが見えた。ゲリラ豪雨と言うのは遠くからその様子
が見ることができると聞いたことがあつたが、本当のようだ
った。すこし離れた街は今、びしょびしょに濡れて、激しい
雨に打たれている。その姿を浮かび上がらせるように雨は強
く打ち付ける。雨という総体が街に触れて、その感触から姿
かたちを見てとろうとするようだった。あるいは、粗雑に撫
でまわしているようだった。それら二つ行為は時に同じであ
ることがある——壊れやすいものは、そうして見えないとこ
ろで破壊されている——見えないのに触れようとする者の肘
によつて。だが、雨はそこまでしない。それは決して鞭打た
ない。握手の痛みなど些細なことなんだ、それは情の証であ
るんだ。

僕は精神の浜の中で燦然と輝く日輪を前に、その姿を現しつつある向こう岸を期待して待っていた。座っているからといって、何時までも待てるわけではない。時折たちあがってうろつき回って、それでも待ちくたびれてしまう。寝ても待てるわけではない。寝ても覚めてしまつて待てやしない。だがそもそも向こう岸の方角はどちらなのだろうか。陽の登る方か、沈む方か。それとも関係のない方か。だがそれはどうでもよかつた。よく考えればこの浜こそ環礁の中の小さな砂洲のようなものに過ぎない。逃れられない中に僕はいる。包まれていると、僕には見えてなくとも、思えばいい。向こうには見えている、僕の姿が。空間は常に用意されている、時間には常に先回りしてくれている。僕は環礁がせり上がつて来るのを心待ちにしている。そうして取り戻された明るい海は、光りすら到達しない奥底を用意してくれていると期待している。足で歩くことができると同時に、どこまでも潜つていける海を、眼の前にする時を待っていた。

「ねえ」とYが話しかけてきた。「伊勢神宮の外宮、次の伊勢市駅で降りて暫く歩くから」「おお、もうそんなに」「意外と近いよね。もつと早く行つてみればよかつたよ」「それもそうだね」車掌が車内アナウンスを始めると、電車が減速し始め、周りの乗客が騒がしく降りる準備をし始めた。乗客の殆どが旅行者である様子だった。昔も今も伊勢神宮は随分な人気の方だった。それも「御蔭です」と言っていそうな年齢層だけでなく、若年層の客も多いのが印象的だった。かく言う僕らも若年層なわけで、きつと僕らと同じように気楽に

——それでいて妙に信じやすく疑えない気持をもって——参拝するのだろうか。それは信仰というには違うだろうが、観光や見学とはまた違う、素朴な信心なのだった。靈感を働かせ、神秘体験を得るには、夜空の星ひとつで十分なのだ——否、この素朴な信心たちは、恐ろしい言葉の使い手の存在をもつと日常的に感じているのだ。それは無知による不安と恐怖、常に全く違う人間たちに囲まれ、実存の犯されていく感覚に囚われている、この素朴な信心家たち。

僕らはそういう群れの中に混じつて電車から降りる。そして外宮行きのバス停を素通りして、一気に歩いていく。素朴な信心——それは神社の本義から外れるだろうか……？ だが熊野の九十九王子は殆どが社をもたない神々なのだ。それが素朴な在り方とは思わない。ただし、素朴からの洗練を予め規定している。留まらない者たちが素朴でいる事を赦している。そこには留まることも、そのための練達からの洗練など求められていない。僕ら素朴な信心家は常に原始へと遡つて、常に異界にいる。僕らにとって、世界は余りに形をもち過ぎた異界だとも思える。もはや人間にそっくりな形で満ち溢れ始めているのだ。形づくるものたちは、しかし、形をもつてはいけない。そして形づくるものは、いつも形づくられしてしまう。僕はこのどうしようもない関係にうんざりとせねばならなかつた。だからこそ僕らは素朴な信心家だ。形など信じない。形があることをどうでもいいと思つている。

街も田舎も神社もめくるめく変転していく。その流体力学の中で、重みあるものは沈んでいく、古層へと向かつて沈め

られていく。二度と見ることの出来ないものへと変じていく。軽いものは浮かび上がり、いつまでも上がっていく。どこまでも際限なく上がることができると信じている。そしてやがて見えなくなっていく。僕ら素朴な信心家たちは、その中間の世界でいつまでも漂い、なにもが見えなくなっていく。世界を生きている。その向こうにいるなにかの動きに従い動きながら、その動きを正確に把握しようとしながら、その動きに疑うことなく抵抗しようとしている。形あるものたちはどこかへ消え去ってしまう。崩れ去っていくことを知らない。形ないものによって焼かれてしまう事知らない。流されてしまう事知らない。だから形づくるものたちは自らの手でつくりあげた形を焼き払い、流し去ってしまう。どうかこの星もそうでありますように、僕は祈る。

Yは一層表情を明るくし、意気揚々と歩いている様子だった。僕の足取りも次第に軽くなっていった。他の参拝者たちの姿がいつの間にか見えなくなっていたけれど、それは構いやしないことだった。Yは軽い調子で口笛を吹き荒んで、草履ばきの足を投げやるように歩いていた。僕もまた倒れるように歩いていたのが、いつの間にか滑らかに歩けるようになった。靴が足に合ったようにも思えた。陽射しは強く、空は真っ青に眩しく輝いていた。汗が頸筋を流れるのがわかる。腹を擽る愉快的緊張を感じ、跳ね上がるような気分になっていた。Yもそんな僕の様子に気が付いた。「おお、顔色良くなつたね」「そう？　ってか、そんなに悪かった？」「うん」「それはいつもじゃない」「そう。だから、もっと歩かないとね。

陽を浴びよう、陽を。歩こう、早くいかないと、海がメインなんだし」「伊勢はなんのため？」「君の受験必勝祈願さ」「それはありがたい」「伊勢でいいのかな？」「どこでもいいさ」「それもそうだ。結局は君の実力次第だからね」「そうとも限らないよ」「まあ、言いたいことはわかる。だが僕が言いたいのは、君の実力なら、その他の要因が一切なければ受かるということだよ。それは良い要因も過剰になるし、悪い要因は繰り返されるべきでないってことだ」「ありがとう。それにしても、早く海みたいね」Yは頷く。

そして目の前には外宮の鳥居が大きく立っていた。「いよいよついたね」

鳥居をくぐって、そのまま参道を進んでいく。他の参拝者たちの姿が見当たらないことに一抹の不安を覚えながら、砂利道を踏みゆく。足許に薄らと立つ砂ぼこりに木漏れ日が辺り、きらきらと輝いている。そこに影が投影されると、浮かび上がってきそうであった。本殿には意外とすぐに着き、誰もいない境内を順々に巡っていく。橋を渡り、様々な神に拝みをする。そこに挨拶以上の姿勢をつけてくれるものがある。とすれば、こうして周りを囲む森であり、小川のせせらぎであり、遠くへと退いた車の音、見えない場所での工事の音だった。Yもいつになく敬虔で厳かな表情をしていた。「屈せずして待つがますらをの事なりと言う」——森鴎外は『即興詩人』を訳してこんな詩句を捻りだした。狩人はやみくもに探しまわっているのではない。彼らが探すということは、同時に待つことに外ならない。彼らは常に狩りのため永遠に彷徨

うだろう。そしてそれは待つことに外ならない。

船は沈みゆく、いつ来るかわからない海の底を目指して、痛みでしかない奥底を目指して。陽の光も届かない暗淵はどこまでも続き、一向に付きそうもない。それはただ沈んでいくだけではない。そして、海を漂うことにおいて、それは沈んでいない船と同じであった。それは探し求めていた。常に境界へと入りこんでいくことにおいて、それは沈んでいない船と同じであった。空と海の境界上を、船は漂流する。そしてそれはどこかの岸へ、あるいは港へ到着するのを目指して進んでいるかもしれない、けれどそれは同時に待つという行為を通して行われる。なにかをしていけば待つていけないということではない。即ち、ただ待つということなどできやしない。退屈するということは、待てないということだ。

※

外宮を参拝すると、そのまま歩いて内宮へ目指すことにした。距離はだいぶあったが無理でない距離だし、途中の猿田彦神社も巡ることにしたのだ。二人は随分な早歩きだった。殆ど走っていた。それでも次々と車に追い越されていった。トラックにどんどん距離をつけられていった。だが、やがて二人は飛べるのではないかというほどの昂揚感を覚えた。それはまったく狂っていた。走っていれば飛べるのは飛行機だけだった。アホウドリだって高いところから飛び下りなければならぬ。飛ぶことのできる人間は、役小角くらいだった。

それからカフカなら飛んだことはあるかもしれない。ペガサスは飛ぶだろうし、黒駒は聖徳太子を乗せて富士山を飛び越えた。そして僕らは狂っているから飛べそうだった。赤信号も止まらずにジャンプ一つで横断歩道を飛び越えていけそうだった。「なんだか足が勝手に動く気がしない？」「そうそう。廻り始めた車輪のようだ」「止める術はあるかな」「摩擦、とにかくそれだ」全く下らない狂気だったが、最高の熱狂だった。「身体が腐っていく感じがする」「まったくだよ。この暑さだから。全身汗となって融けてしまいそうだ」

陽射しは僕らの肉体を発酵させていた。ひとつひとつの細胞が溶かされていき、空気を包み込み始めた。それはもうじき浮かび上がりそうだった。夏の日差しは正午を迎えようとして、愈々なにもかも腐らせたり、発酵させたり、成長させたりするようになった。あらゆるものを増幅するのだ。まったくそれは残忍だった。僕は今自分がどんな姿かたちをしているのかが理解できなかった。但しそれは消えてなくなるといふよりも、明確に神経で感じ取ることができる質感や動きを伝えるものだった。全身に巡らされた神経が、ひとつひとつ脳という中枢に注意を払われていた。

風景は遅く感じられた。ひとつひとつの細やかな瞬間がコマ回しの映像となった。しかしながら猿田彦神社にはいつまで経っても辿りつかなかった。当然内宮へも全く行ける様子がなかった。けれども二人は一気に駆けだし、なにも理解できなくなっていた。とにかく一台一台の車が横を通っているのは感知できた、けれどそれだけだった。道も良くわからない

いままに走っていた。とても遠いことだけはわかっていた。だから何処かで間違えると大きく逸れていく危険があった。そしてやはり、あるところで二人は息が切れ、その瞬間に今どこにいるのか、そして道はあつていいのかがわからず不安になった。僕は唐突に我に返ったために、一気に途方に暮れてしまった。気付いた時には、落し物を落としてきたであろう場所は既に遠くなくなってしまっていた。最後に確認した時から時間もだいぶ過ぎてしまっていた。そんな焦慮に似ている。逆に、浜辺で自分の足跡と出遭った時に、それが誰かほかの人のものではないかと焦り出す、こうした感覚とも似ている。落し物が、あるいは忘れかけたものが突如現れた時の狼狽と焦りだ。

息を整えてから、二人は太陽の位置を確認し、方角を見定めた。そして内宮が外宮の南東にあることは判っていたから南東へと進んでいった。それでも、最初の地点次第では相変わらずとんでもない道を進んでいる可能性があることを否定できなかった。けれどもとにかく足を進ませた。時刻は十二時を廻り、一日の中で最も太陽が高い時間帯であった。肉体の熱を受け入れるほど空気は余裕がなかった。空気はむしろもっと熱せられていた。それでも空気は緊張しきって静寂を保っていた。愚行の後の緊張感は、後悔よりもむしろ未来志向的な状況にやってくる。贖うことに等しい苦しみを覚える。しかも愚行とは、恐らく理性と責任の関係とは大きく離れた場所で行われ、その緊張感を受け入れるには理性と責任の関係とは離れた場所にいなければならなかった。「大体こちらへ

行けば大丈夫かな」暫く歩いて僕はつい訊いた。別段応えを求めてはいなかったが、「まあ、間違つてはないだろう」とYは応えた。「そういうえば、こういうことテストの時には良くあるなあ」「どういうこと?」「いや、ある瞬間あつという間に解答に至る道を進んでしまつて、ふと我に返ると、どうしてその答えなのかがわからないまままで迷つてしまつてこと。確信が持てなくて、確認しないといけなくて」「俺にはないが、まあ、それは大変だな、確かに」「計算の跡とか見ても信用ならなくて。例えば物理の時は再び微分していくんだ」「まあ、それ自体は苦でもなさそうだが」「いや、それが全然違う式が出て来る時があつて」「じゃあ間違えに気付いたつてことじゃないか」「そう。同じこと繰り返して、再び解いてみると、こんどは正しい答えが出てきて」「わけわからんな」「そう、結局どこで間違えたのかわからずじまいなんだ」「でも正解するんでしよう?」「まあね」「相変わらず成績いいもんな」

やがて草履ばきのYが歩き疲れた様子を見せ始めたころ、一軒のレンタルサイクルが目に入った。これは幸運と思い、Yと僕は店に入つていった。値段は今から借りて一五〇〇円でよかった。無論返しに来る手間はあつたが、今は仕方がなかった。二台借りようと思ひ、誰もいない受付のところまで声を掛けた。ところが応答がない。「すみませーん」Yが再度大声で呼びかける。しかし応答は一向になかった。もう一度だけYが声を掛けると、今度は漸く奥から「はい」と返事が聞こえてきた。そして、なにやらガチャガチャ音がした後、背後の僕らが入つて来たところから一人の中年の男が入つて

った。やはりそこは浜辺などではない、単なる断崖絶壁であったのだ。そしてこの荒漠たる風景に、どうして誰もいないのか判りはしなかったが、風は確かに賑やかしている。当然のこととはいえ、街はどうして、こんなに混雑しているのだろうか？

そして僕らは無人の内宮へと入って行った。巨木が立ち並び、聞いていたよりもより鎮守の森は鬱蒼として、夏にも関わらずひんやりとした空気に包まれた。木漏れ日は数多の光明のようであった。そこになにもものかがいるかのようだった。五十鈴川のせせらぎは、何を揺らしているのか、青い音は澄み渡っていた。

※

内宮を巡り、再び辻へ戻って来た時、時計は二時十五分頃だったため、お昼御飯をすませた。そして三時になると確かに、さっきの軽トラに乗って男は現れた。空だった荷台には三台の自転車が積んであった。男は、「乗ってください」とまたそれだけ言った。そして「ありがとうございます」と言つて、Yと僕は乗り込んだ。窮屈で揺れる車内ではあったが、それでも鳥羽まで乗せていってくれるのは大変に嬉しいことだった。そして軽トラは走り始めた。サイドミラーが反射して、太陽がすこし西へ傾き始めているのが判った。今日もこうして終わっていくのかと思うと、記憶と言うのはどれほどの引き延ばしが行われるのかと思った。それはたった一

日だが、殆どが写真を大量に収めた分厚いアルバムとなっていく。たとえばYが被りもしない帽子を鞆から取り出した、という些細な瞬間でさえそれは記憶されていく。眼も耳も、何ものをも逃しやしなかった。

「どうでしたか？」と男が切りだした。初めての参拝に、ずいぶん感銘を受けたYと僕が続けざまに感想を述べ立てると、男はこの二人の素朴な信心家の言葉に耳を傾けていた。そして男も自分が伊勢神宮に初めて行ったときの思い出を話してくれた。

「今はお伊勢さんの近くに住んでいるようですが、羨ましいですね」Yがそう言うと、

「いや、それがですね」と男が答えた。

「近くに住むようになってから、暫く行ってはいなかったんですよ。やはり近過ぎると、どうも足が遠のくみたいで」

「そんなこともあるものですか」もったいないとYは思ったであろう。

「そうなんですよ、けれどもね、最近数回続けざまに通っているんです」

「なにかあったんですか？」

「単純に近頃観光客が増えまして……」

「ああ、確かに今日もたくさんいましたもんね。勿論僕らもそのうちの二人なわけですが」

「そうそう、それで商売柄こちら一帯をきちんと知っておきたかったんですけれども、とにかくお伊勢さんについて全然知らないわけにはいかないと思ひまして」

「そういうわけですか」なるほど、とYが頷く。

「しかしやはりいいところだとは思いますが」

「ええ、本当思いました」

「これから鳥羽に行くわけですが、あそこも凄くいいところですよ」

「海が見たいと思ひまして」

「青春ですね」男はにやりと笑った。しかし僕は真顔で答えた。「そうですねか？」

「ええ、私なんかも若い時はよく海に眺めに行ったものですよ」

「なぜなんでしょうね」

「美しさを求めてかな。そしてそれが如何なる姿をして——海藻や流木、腐った魚や、その臭いにつつまれて、そこにあるかを」男は懐かしげな面もちでそう語ったが、僕には少しわからない感覚だった。

「最近は何かないのですか？」

「まあ最近は何忙しいですし、それに昔、溺れかけたことがありますよ」

「そんなことがあったのですか」Yはそう訊き返した。僕も意外に思った。なぜかわからないが、意外だったのだ。

「私本当は松阪の出身で、地元の友人たちとよく海に潜っていたんですよ」

「名古屋じゃなかったんですか？」

「ええ……その後名古屋へ一度大学のため言ったのです。……それで、潜ってはお腹がすぐと魚やら貝やら獲っては焼い

て食べていたんですが、ある時に溺れかけまして」

「それは大変でしたね」

「足がつったのか、何かに引っ張られる感覚がして、あの時はもう死んだかと思いました」でもなんとか無事でよかったですね」

「ええ、全く。あ……もうそろそろ鳥羽に到着しますよ、海もじきに見えてきます」

「おお」Yは思わず声をあげた。コンクリートと木ばかりの道路をずっと走って来たが、曲がり膨らんだ道路を登り切ると、向こう側に水平線があらわれ、下り始めると田園の向こうに輝く西日、それを照りかえす海が目に入った。Yは凄く嬉しそうにしていたが、僕は寧ろ心の中の透明な物体が昇華していき、解体されたものたちの隙間が消えていくのを感じていた。僕は感涙を堪えていた。ひとつひとつのつながりが戻っていくようだった。

男は鳥羽駅の前で僕らを下ろしてくれと、荷台に乗った自転車を貸してくれた。「この駅の駐輪場において帰ってくださいれば、その後回収していきますので」「いいのですか？先ほどからご好意に甘えてばかりで申し訳ありません」いいのですよ。さあ、行ってらっしゃい」男はそう言うと、僕らが自転車で走っていくのをすこし見て、走り去って行った。それにしても本当になにも語らない人だと思った。さっきの話も本当なのかどうかわからない。無論それはどちらでもいいことだったが、あの印象的な顔つきは当分忘れることはないだろうと思った。

「どこへいこうか？」Yは僕に訊く。「海ならそこでも見えるけれど、もっと向こうへ行ってみよう」そうして二人は海際の山道を自転車できく走って行った。緩やかなスピードで、あらゆる景色はごつごつとした物体から、ねっとりとした液体へと変わっていった。時刻は四時を廻っており、西日が峰々の腹を熱く照らし上げている。こんなありきたりな光景にも妙に胸は弾んだ。海は黄金色の光を受けてより深い紺色へと移ろぎ、快晴のままだった空は薄い黄色に染まり、灰色の入道雲がぼかりと浮かんで動かなかった。それはどことなく造られた感じがした。僕にはまだ景色ひとつひとつが本物のように感じられなかった。そこにはあるべきものがない気がしたのだ。車は相変わらず僕らの傍を横切っていく。だけれどもその中の運転手を確認しただろうか？僕は不信感に囚われていた。事物の人間の決定的なつながりがいまだに解けたままだった。

高所を走っていると、複雑な海岸線沿いの町々が現れたり消えたりした。そのありように次第に僕の頭は混乱してきた。一体海岸線がどうつながり、どう途切れているのか、町々はどうつながり、どう離れているのか、見えていない部分が多すぎて推測では補い切れなかった。いつまでも同じような風景だったのに、そのすべてが全く違った。空も海も、のっぺりと一様のようなだったが、決してそうではない、海岸線の内側は、一瞬一瞬の風景がそれぞれに抽出され、同一化されることを拒んでいるようだった。全く移ろいややすい景色だった。そうして全てが個物的になっていくと、この世は継ぎ接ぎ担

っていくだろう、誰のものでもなくなっていくだろう。僕はそのことについてなんとも言えない気分には囚われた、その考え方自体のどこかに誤謬があるならば、僕はなにも言えないのだと思つた。ただしそれが誤謬を孕んでいるなどいつ判るだろうか。どうして誰かは他の誰かを名乗りたがるのだろうか。むしろ誰にもなりたくないからだろうか？その時遠く線路を電車が走り抜けた。そして僕の中で電車の中の記憶がよみがえる。電車にのつた数千回の記憶が混線してくる。聴こえてもいない電車の走行音が耳の奥で響き始め、通過していった。

数多くの港町や砂浜が過ぎて行つた。ホテルもたくさんあったし、観光客が恐らく沢山訪れているのだろう。だが、人の影ばかりはやはり見えてこなかった。「随分と寂しい風景だね」「そうかな」「ひと気がないじゃないか」「それでもないんじゃないかな」僕は自転車を漕ぐ足が疲れて来て、いったん休憩しようと思案した。すると巨大な架橋の手前に展望台のようなものがあつたから、そこで一旦休んだ。そこから海の方を眺めると、牡蠣養殖の筏が沢山浮かび、海が所々黒い四角形によつて埋められているのが目に入った。「やっぱり牡蠣の筏多いね」「そうだなー、牡蠣か、どうせなら食べたいよね」「今年はダメだよ。海が汚染されているんだ」「さっきの人が言つてたな」「そう言えば、さっきの人、名前なんて言つたわけ？」「あれ、確かに」僕はとっさに自転車を調べるが、張つてあつた店のラベルには「イセ・レンタルサイクル」と店名が記されていただけだった。

※ ※

休憩が済むと、二人は再び走り始めた。ぐんぐん広がる海との距離。どこまで広がっていくかと思った。だがどこまで行っても海は見えた。海は遙か下方から迫上がって来るようだった。前方にはトンネルがあり、そこを抜けると崖際にくぼみがあったのでそこに自転車を停めた。辺りを見渡す。そして誰も見ていないのを確認すると、そのまま勢いよく崖に飛び込んだ。目指すは港。前方に海を臨み、砂煙をあげて豪快に足を滑らせる。延々と続く急な崖。その先には灌木が密生していており、そこに手を遣って、引っ掴むと辛うじて静止する。今度は傍らに足を置いて、コンクリートで固められた田んぼの縁を慎重に歩いていく。海とその向こうに沈みゆく太陽を横目に、腕を広げてバランスを取りながら歩いていく。万が一落ちてしまうと田んぼの泥に足を突っ込むことになる。全身がぐちゃぐちゃドロドロになる可能性もある。Yも僕もそこは真剣に渡った。そして向こう側に着けば、高めの段差を一気に飛び降りて空地へ入り、民家と民家の間を抜ける。すると道へ出た。だがその瞬間、自動感知で作動するインターフォンがけたたましく鳴り、右手の家の扉越しに犬が力づくよく吠えつける。先ほどこまで全く閑寂としていたところに不意な警戒音が続けざまに響き、Yも僕も心底驚いた。そしてそこから全速疾走をした。思わず笑いながら走った。息苦しきは酷かった。

走り始めて間もなくすると、墓石や地藏の石像が密集している場所にでた。そこは寺院だった。その境内を抜けていくとすると「津波碑」の立っていることに気が付く。思わずここでいったん立ち止まり、僕はただ気分が鎮まってくのを感じていた。しかし暫くして、僕はやはり迫りくるものを感じた、逃げなければならぬという強迫的な衝動に駆られた。Yが見えなくなりそうだった。Yはどこにいたのだろうか。：確かに聞こえる、Yは僕の名を呼んでいるのが：小さな宿場や見ず知らずの町の民家が続いてく細道を走り下っていく。その玄関口にはどれも「蘇民将来」の注連縄がしてあることに注意がむく、見ず知らずの人々は、見ず知らずということを警戒しているようだった。そして不図右を見れば自販機が彷徨い歩くように、異物として立っていた。僕にもまた、ただ脚を動かすように駆り立てる不信感があった。それは自分が明確に異物であると感じる、そういう不信感だった。そして異物として僕は漠然たる状況に包まれた。そこに僕を形づくるものは何もなかった。僕はその時何も考えられなかった。ただ感覚だけが僕の肉体を動かし、思考を司った。どちらに曲がるべきか、僕は眼と耳で全ての判断をした。全く誰も追ってくるわけでもないのにもかかわらず、僕は自分の長く大きくなった影に怯えるようにして逃げ回った。僕は影が離れ得ないものだという当然のことを次第に了解していった。そして間もなくして港に出た。背後からYが追いつく。

すると二人の眼前には深いコバルトの海が広がっていた。

その海に顎をつけた太陽は燃焼する巨大なナトリウムになっていた。鷗が鳴く声を聞いた。その甲高い声に合わせるように、遠くで船笛が低く鳴らされる。港を囲む山がその音を跳ね返す。船はどこを航っているのか、鷗はどこを飛んでいるのか、それは判らなくなった。海に囲まれているようだった。見えているのは海ばかりだった。けれどそこには揺られる船、牡蠣の養殖筏、コンクリートの堤防、整列されたビットがある。船もビットも塗料が禿げた場所から潮風に侵されていた。筏は黒々として、表面に巨大なゴムのような質感がした。海へと延びていく堤防の先端まで行くと、穏やかな海を前にして、Yも僕も暫く黙っていた。濃厚な磯の匂いは、鼻に微かな痛みを走らせ、口の中を乾燥させた。白波の立つ音は、聞いていると呼吸のリズムが次第に合わさっていく。すこし早めで、けれども息苦しくもないリズム。精神は鎮められ、感覚は鋭くなっていくのを感じる。浜辺を喪った僕は今、海を取り戻した。淵へと身を落としていこう、この明るく清澄なる海へ身を浸して、対岸との間にあるこの淵へと沈んでいこう……。僕はこの断裂の中の繋がりを見つける方法を手に入れたのだ。

そのうちYはこの誰もいない港を散策したり、写真や動画を撮ったりし始めた。僕も彼と同じように戯れに写真を撮ったりしたが、堤防伝いに歩いて港から大分離れたところで、Yが海に入ろうろうと言いつつ出た。特に着替えや拭く者も無かったが僕もそうしたいと言った。そして服を脱ぐとYも僕も汚された海に飛び込んだ。底は深く足が届くわけではな

ったが、すうっと力が抜けて浮かび上がった。そして逆に軽く力めば潜ることができた。眼を開ける事は出来なかったが、その暗闇の中で僕は泳いだ。海中で波に揺られ、初めは冷たかったが次第に慣れてきた海水に浸っているうちに、僕はすっかり眠たくなってしまった。まだ浮かんでいるYにあがると告げ、先に堤防で身体を乾かそうと横になる。そのうちYも上がってきて乾かし始めた。その時Yが何か話しかけて来ていたはずだった。けれども僕はもう眠りに落ちてしまっていた。残照は温かく僕の身体を乾かしてくれた。

※ ※ ※

持ち主がいなくなった途端に騒がしくなるものたち、この部屋は昨日こんなにも散らかっていただろうか？……僕は帰宅するなり嫌な予感とともに見つけ出した、なにかが染み出している段ボール箱。近づけば臭いが強くなる。けれども僕はそれに手を差し出し、箱を開いた。そしてその中には、たくさんの夏みかんが入っていた。爽やかな中に、どろっとした苦い臭いがする。すこしのけてみると、下の方は傷んで腐り始めていた。

《了》

杏子試文

日居月諸

……この軀（からだ）がいったん外に出ると彼の腕にすがりつかずには歩けないことを思うと、彼はまた杏子の病気の揺がしがたさを見せつけられて、今まで疑って見たこともない軀というものの現実味への信頼を逆に揺がされた。杏子と並んで帰り道をたどっていると、彼は自分の軀が重みを失って、後ろへ置き残されていくような奇妙な感じを覚えた。すると、人の流れの中で自分のありかを確かめて方向を見定めていくことが、すこしばかり困難に感じられた。そんな彼の腕に、杏子が一心にすがりついている。ところが、駅の構内で「さよなら」を言うと、杏子はとたんに一人立ちになって、彼の存在などすこしも必要としないように、頭をコトンと垂れて真直に歩み去っていく。

ある日、いつものように杏子と軀を並べて横たわっているとき、彼はとうとう同じ事の繰返しに耐えられなくなつて、天井の暗がりにはむかつてつぶやいた。

「僕の方じゃ、君をどうすることもできないらしいね。僕が君のそばにいなくなりさえすれば、君はまた一人であちゃんと歩けるようになるのだろう」

杏子は黙って天井を見つめていた。公園の午前の光の中を跳ねまわっていた杏子の姿を彼は思い浮かべた。そしてあの軀を自分の無力な軀で汚してしまつて、重い無表情な

塊りに変えてしまったことに哀しみを覚えた。（杏子）

たとえば我々が恋人という伴侶を得る時、あなたと一緒に暮らしたいとの懸念に応える時、頭の片隅では多かれ少なかれ、ためらいが生まれてはいないだろうか？

彼／彼女は大変魅力に満ちており、会話のやり取りも気さくに交わせ、隣に寄り添っている間は安らいだ気分ひたれただけだろうか？ 読者もまた彼／彼女を前にしながらも、こうした疑問をめぐらしたことはないだろうか？

これから彼／彼女と過ごすであろう時間は、本来ならば私が自由に振る舞える時間だったはずではないか？ 彼／彼女をひとまずの伴侶と決めたならば、私は他の人間と触れあう機会をどれだけ失っていくだろうか？ 彼／彼女とおだやかに暮らしていきたいのなら多少のエゴは抑えなければならぬのだから、私の性格は変わっていつてしまうのではないか？

結局のところこうした疑問は、彼／彼女によって私の持ち分が奪われてしまうという懸念に尽きるのではないだろうか？

そもそも今浮かべた疑問は自分自身の損得ばかり勘定しているにすぎない。彼／彼女もまた、私と共に過ごしてしまえばあらゆる可能性を犠牲にしてしまうのではないか――

むろん、このような自問自答は子どもじみた愚図つきに過ぎない。それこそ朝方、まどろんでいる社会人が瞼の重さと闘いながら漏らす、本来ならばこれから過ごす時間は自由に振る舞える時間であって会社が奪っていいものなどではない、との繰り返言となんら変わりがないのである。

事実このようなためらいを打ち消し、人々は恋人を得ているし、職場に赴きもしている。ためらいにかかずらっていても損をするばかりだと弁えているからだ。そして恋人と連れ添う喜びによってためらっていた瞬間など忘れてしまふ、あるいは目の前の仕事に精を出す間はためらっていた瞬間を思いつく暇などない。

とはいえ、ここで見逃してはならないのは、ためらっていた自分は確かに存在したにもかかわらず、我々はこのためらいを「子供じみた」と名付けて無きものとし、あたかも別人へと成り変わるように振る舞っている事実である。果たしてこのためらいは本当に無きものとすべきだったのだろうか？ といってもこの留保は、朝になればあの愚図つきはまたぶり返してくるのだから、人間は本来の願望を中々捨てきれないのだ、という意味ではない。

会社員が休日を得れば、惰眠をむさぼる時間をつかの間ながら過ごせるだろう。彼／彼女に愛想が尽きれば／を尽かされば、喪失の悲しみは付きまとうものの、また自分の可能性を模索する日々に戻れるだろう。このように彼らは片方の可能性を選んだとしても、状況さえ許せばもう一方の可能性に身を置けるのだ。そこへ行くと本当はもう一方の可能性を

捨てているのではなく、片方の可能性に身を置きながらも、もう一方の可能性への逃げ道は確保している。

それに反してためらいの中にある時、人は逃げ道を断たれている。一人でいる自由を捨てても恋人の方へと向かうのか。眠りという安息を蹴っても仕事へと向かうのか。そこでは自分自身の存在を引き裂かれている。分裂を通してどちらかを選ぶ自身が浮かび上がってくる。そこで人は自身の素性を問うているのだと言っている。果たしてお前はどちらを選ぶのか、お前はどちらを選ぶような人間なのか、そもそもお前は何者なのか：：分岐点に置かれた人々は自らの身を差し出し、残りの取り分でやりくりしていくのだという実感を味わうだろう。たとえ後になれば逃げ道は設えられているとわかっているのに、自らの身がそぎ落とされてしまうかのような焦りに見舞われる——ためらいに足を取られている間は、そう錯覚する瞬間が訪れるのである。しかし、これは本当に錯覚なのだろうか。

ためらいを払った時、彼はためらっていた時点とは別の人にならざるを得ない。ためらっている時点では二つの可能性を残している人間だったのに、選んでしまえば一つの可能性しか残らない上に、それを可能性ではなく現実へと変えてしまふからである。そして自らのもとに残った現実が手から離れていった時、今度は切り捨てたはずのもう一方の可能性がふたたび手の中にやってきて現実となるだろう。では、ためらいの瞬間に存在したはずの自分は、もどってくるのだろうか？

そう、本当にそぎ落としたのは、ためらっている自分だったのだ。多様な可能性を失ってしまった、という意味ではない。そうではなく、多様にひろがる可能性のどこにも属さず、どんな価値基準にも量ることのできない自分が確かに存在したのに消えてしまったということなのである（お望みならば実存が本質によって押しつぶされてしまったといってもかまわない）。ためらいにあつて見逃してはならないものとはこれにほかならない。

しかし、こう暴いてみたところで当然の成り行きを説明したに過ぎないし、こうなるのも仕方がないのだと諦めるほかないだろう。どこにも属さないということは、自分を支えるものがないということだ。孤独さえ意味する。それに耐えられる人間など存在するだろうか。かりに孤独に打ち勝てたとしても、否が応にもこちらの寸法を採ってくる他人がとりまくこの世界の中で、孤独でいられるだろうか。いかなる物どもにも引きずられることなく、ためらいに留まり自分を見まもりつづけられる者は、果たして存在するのだろうか。

第一章 二人が取り結ぶ関係は恋愛と呼べるだろうか？

山頂に黒雲のひろがり認めて谷へと下りてきた「彼」は、河原沿いの岩場にて一人で坐っている杏子と出会う。岩場の灰色の眺めがのしかかるように襲いかかってきたがためにならずくまったきりでいたという手を取ってどうにか下山した三ヶ月後、駅のホームで電車を待っていた「彼」は、向こう側

のホームから走り寄ってきた杏子と再会し、あの谷で何が起きていたのかと問いただしたところ、高所恐怖症に似た発作が訪れていたのだと答え、その発作を「彼」が救ってくれたのだとも明かした。

それから幾度か二人は待ち合わせるようになるものの、そのたびに杏子は矛盾した言葉を述べるばかりか、普段から二人で坐っていた席に他人が陣取っているのを見て入店を渋るといった変調さえ見せはじめた。混乱しきってしまった自分を助けてほしいとの声に動かされた「彼」は、三日に一度杏子と会い、一人で切符を買わせたり公園を一周させるといった日常の感覚を取りもどさせる「きたえなおし」を施すのだが、快方に向かうどころか変調に拍車がかかっていく。

再会した時に立ち寄った喫茶店の同じ席に坐れば神経は落ち着くが、レストランに入り「彼」の視線にさらされながら食事をすることはままならず、宿へとおもむき床で軀を交えても男の欲求が放つ熱は女のつめたい軀と融けあうことはない。男から向けられる憐れみの目を女は撥ねつけ、時にはしばらく二人で会わないと決め、久しぶりに会えば海へと向かい、似たようなやり取りを繰返す。そのうちやがて「彼」は杏子の家を訪れる。

「彼」をむかえた杏子の姉は妹を病院へ連れていくと告げる。あなたからも説得してほしいとの声にうながされつつも、内心は抗しながら「彼」は杏子の部屋に入る。言葉をかまし、姉から差しだされたケーキをほおぼる姿を見つめあい、軀を交えた後、杏子は入院を決めたと告げ、窓の外にひろがる秋

の夕暮れを見ながら、「ああ、美しい。今があたしの頂点みたい」と細く澄んだ声でつぶやく。

以上が『杏子』のあらすじである。原作に目を通した経験のない読者は、精神に異常をきたした女を男が庇護する恋愛小説と受け取るかもしれない。ならばに二人は恋人同士なのだ、とも。

その見当は間違っていない。二人は軀を交えているのだし、海やショッピングセンターには二人きりで出かけている。作中において数少ない第三者の姉は、電話をかけてくる「彼」の様子を察して、あるいは通話を終えると足取りを軽くさせる杏子の姿を見まもって、「あなたもヨウコを好きなのでしょ」と問いかける。しかし、ここで「彼」は不意を突かれる。

「お願いだから妹を説得してちょうだい、健康にしてやってちょうだい。あの子はあなたが好きなんです。電話の後、階段を昇って行く足音が軽いよ。あなたもヨウコを好きなんですしょう？」

「ええ、それは、好きです」

彼は仏頂面でうなずいて、本人の前で一度も口にしない言葉を、姉の前ではっきり言わされたことに気付いて唾然とした。(以下、特記しない限り引用はすべて『杏子』から行う)

もともと、恋人にむかって好きだと言葉にした覚えのない

人はいるかもしれない。それどころか、わざわざ口にするのはヤボだったので滅多には言わない恋人達が大半だろう。好きだ、と自分の意志を言葉によって表明せずとも恋愛は成り立つ。

だが、「彼」は杏子と二人でいる間、おたがいの関係が世間一般で言われている「恋人」に当てはまるかどうか、いぶかっている節がある。たとえば、二人がはじめて軀を交えた後、ふたたび杏子を連れて暗い部屋へ足を向ける場面では、こう叙述されている。

はたから見れば、なるほど、軀のつながりが出来たばかりで、人中でもその恍惚の余韻に浸っている若い男女どうしのように見えるかもしれない。そう思いやって彼は儼然とした。ところが二人の姿をちらりと見やっっては通り過ぎて行く人間たちの皮肉な目つきを見ているうちに、同じ目つきの繰返しに暗示をかけられるのか、彼は段々に自分たちが彼らの目に映るとおりの者になってしまっても構わないような、そのつもりになれば今すぐにでもなれるような気がしてきて、彼の腕にひたすら重みをあずけている無表情な軀に情欲を感じはじめた。直接的な情欲ではなくて、相手の軀をすぐそばに置きながら、なかば想像の領分に踏みこんでいて、いっそう淫らな情欲だった。それに、杏子の軀を担いきれないという途方に暮れた気持ちが入り混る。彼の足は自然この前の部屋の方へ向いていく。

補助線を引けば、初めて軀を交えた際に「彼」は杏子の軀が何の表情も伝えて来ず、「熱を呑みこんで冷たくひろがるばかりなのを感じ、一人勝手な情欲を思い知らされてる。それから断片をのぞけば、そうした情けない心情と世間の目とのギャップに苦しんでいるものと取れる。

しかし、苦しんでいるだけならばともかく、「彼」は世間の目を浴びせられたために情欲をもよおし、「部屋の中に二人して閉じこもり」、杏子の冷たい肌に触れるという「同じ事」を「繰返」すのだ。ここにはあたかも、こう情欲をもよおすべきなのだ、としたり顔で言う範例があつて、「彼」はそれ自分当てはめながら杏子へと覆いかぶさつていくような経緯がある。初めて交わつた時には世間の目など経ることなく、杏子を寢床へと誘いこんでいるにもかかわらず。

こうした兆しは他にもある。二人はしばらく会わないでいようと決めた後、再会するとすぐに海へと向かう。そのため長距離電車に乗るのだが、車内で坐っている間、「彼」は隣に席を取る勤め人風の中年男の、杏子を眺めまわす目に気付く。

そのうちに、隣の男がときどき週刊誌から目を上げて、杏子のうつむけた額から小さくつぼめた胸にそつて腰のあたりを眺めまわしているのに、彼は気がついた。杏子の姿のしおらしさを賞玩して、あの娘は処女だろうか、などと思ひやつている目つきだった。男はやがて軽く掻き立てられた情欲のなごりを運んで、電車を降りて自分の暮しにもどつていくだろう。そのなごりが無意識のうちに周囲の

人間たちにたいする、たとえば家族に対する優しさとなつて現れるかもしれない。寢床に入つて明かりを消すとき、杏子の姿がふつと浮かぶかもしれない……。杏子のために神経を張りつめるつらさから、彼はふと隣の男の無責任な立場がうらやましくなつて、男と並んで、男と同じ目つきで杏子の姿を眺めまわした。すると、二人して杏子を汚しているようなおぞましい気持ちになつて、彼は思わず杏子から目をそむけた。そして軀のつながりまであるのにこころでこうして離れ離れに坐っている自分たち二人に対する罰のように、今度は自分が次の駅で黙つて立ちあがつて降りてしまうさまを想像した。自分がいなくなつたあと、杏子はこのままだこまで行つてしまふだろう、とホームに立つて、遠ざかる電車を見送る気持ちを、彼は思ひやつてみた。見捨てられた淋しさは彼のほうに残つた。彼は杏子を見まもることに疲れて目をつぶつた。

何の前置きもなく読めば、別れ際にまで踏みいつてしまつた男の心境と読めなくもない。事実二人は海へと向かう長距離電車に乗るまで、しばらく会わないでいる日々を挟んでいたのであり、そうなつたのも（明言はされていないが）快方へと向かわない杏子に引きずられる危うさにたじろいだからである。さらにここには、自らの情欲が杏子に届かないままなのでは、との諦めにかたむいた懸念がうかがえる。

それにしても、「彼」が隣の中年男の視線を借りて杏子を「眺めまわし」ている点には注意を要する。「彼」は単純に他人の

立場へと身を置くことで自らの身の程を知っているだけではない。「彼」は中年男の目を借りて自らの情欲の輪郭を知るばかりか、情欲一般をみつめているようなのだ。そうでなければ何故、中年男の家庭での振る舞いにまで想像をめぐらせるのだろうか。余所で得た情欲が家庭の緩衝材になっているかもしれないなどと推定するのだろうか。

ここで一つの判断がくだせる。この二人の間で進行している関係は、世間から見れば恋人同士のものといえるし、彼らもそうした目つきが望むとおりの道をたどる。が、一方で彼らは世間の営みに自分たちをあてはめようにも居心地の悪さを感じざるを得ないし、そこから転じて自分たちを広い理解の範疇におさめようとするものに対して問いかけを投げている。

そもそも彼らはなぜ互いに惹かれあつたのだろうか、なぜ杏子は自らの変調が激しくなっていくにもかかわらず「彼」と共にいるのだろうか、なぜ「彼」は自分に添っていることでもますます変調をきたしていく杏子をそれでもなお支えようとしているのだろうか？

杏子にとっては、谷にひろがる眺めに苦しんでうずくまっていた自分を、彼が救ってくれたのだという実感があつたからこそ、「彼」をもとめている。

「何度も言ったように、僕は君を麓まで降ろしたただけだよ。僕が通りかからなくても、もうしばらくくすれば、君は一人

で降りてきたさ」

「それはだめだったわ。たとえ一人で降りてこれても、もうだめだったわ」

「無事に降りてくれば、それでいいじゃないか」

「あなたのおかげで、元気になりました」

「僕は君の病気とやらをなおした覚えはないよ」

「でも、なおったんです。あれから、何もかも、とても静かにみえるようになりました。目にしつくりなじんで、とてもきれい。きれいすぎて、もったいないみたい」

こう告白してみせながらもやはり変調へと傾いていく杏子を相手に、「彼」は、本当に自分ならばこの女を救えるのかもしれない、と信じて、心を動かされたのである。

「すこし鍛えなおしてやろうか」

「ええ、きたえなおしてちょうだい。お願いよ。このままじゃ困るわ」

また別な店を指定してやろうかと彼は思いつけたが、また同じことの、また判で押したような反復を予感して、陰惨な気持ちになった。

「内側と外側つてのは、気味が悪くていけないなあ」

「吊橋の時みたいに助けてほしいの」

「補足すると、この「吊橋の時」とは下山した際の出来事を指している。谷の岩場で坐り込んでいた杏子を助け起こした後、二人は河原を下り山肌に沿った細道をたどった末に吊

その言葉に、彼はたわいもなく心を動かされた。

しかし、二人の予感とは裏腹に、杏子の調子は悪くなつていく。杏子は自らを忌まわしいものをみるかのような目つきで見つめてくる。「彼」にあらがうし、「彼」は自分が変調をそのかしているのではないかと考える。彼らの見込みは間違っていたのだろうか。

もつとも、だからといって離れていくというわけではない。それどころか、「彼」はしばらく一人で会わないと決めた後、山奥の安宿にこもる時間を通して、もはや杏子は健康に戻らなくてもいいとさえ思うのだ。もちろん、杏子をもとめる心は保たれたままで。

夜が更けて、厚い蒲団にくるまって谷の暗闇に耳を傾けていると彼の軀は疲れの中で静まったまま、杏子のことを思った。さまざまな杏子の姿が思い浮かんだ。しかしどれ

橋へといたる。が、杏子は橋のたもとでかがみこんでしまう。「彼」は一度渡つてから橋の真中へともどり、渡っておいでと目で合図して杏子の足取りを見まもる。橋を渡りだしたぎごちない足取りは間もなく立ち止り、前方から目を離して踏み板の隙間から急流をのぞきこみはじめる。その目付きが「うっとり」と流れに見入っているように見えた彼は、「下を見るんじゃない」と大声で叫び、意識をふたたび自分の許へと戻すと、杏子を見つめつつそろそろと後退していく。歩きなおした足が踏み板をあと二枚あますところにいると、「彼」は岸に飛び移って両腕を差し伸べ、倒れ込んだ杏子にのしかかられながらもようやく橋を渡り終える。

もすぐに沢音の中に紛れてゆき、最後にはひとつ、膝でタオルをゆるやかに盛り上げて夏の午後の物憂さの底に横たわり、軀の重さに感じ耽っている杏子の姿が残った。杏子の軀は病気を内につつんで、そのまま成熟して落着くことを願っている。彼の心が先へ先へ進もうと苛立ちさえしなければ、杏子の体は癩の強い少女みたいに痩せ細ることも、淫らな女みたいに肥満した感じを帯びることもない。杏子の病気を治してやろうという思い上がりは、彼の中からとうにきれいに消えていた。病気が快方に向かうことも、悪化することも、彼は望まなかった。良くなること、悪くなることそれはどちらも杏子を破壊することのように思えた。杏子は自分の軀の重さを嘆く必要はない。彼は、すくなくとも彼の軀は、いまのままの杏子と、同じような繰返しにくらでも耐えられる、それに飲びさえ感じることができる……。

驚くべきことは何もない。月日が経つにつれて事の始まりは忘れてしまうものの、なお恋人との関係は好ましく保たれている、という姿はありふれている。そもそも理由が一つしかなくとも関係がつづく、というならば苦労はない。関係をつづける内に、関係をつづけるための要因がいくつも重なってゆき、もはやきっかけなどはさして重要でなく、いっ所消えたとしても不足はない、と進んでもおかしくはないのだ。いっ所あえて言いきらう。杏子の変調だけが原因で彼らが添い続けられているのなら、別に杏子である必要はなかつ

たのである。この女は支えきれないと「彼」が思ったのならばそこで関係は打ち切られてもよかったのである。そして、自分にとって御しやすい、すこし病んだところのある女に乗り換えても良かったのである。そうすれば「彼」の「思い上がり」は充たされつづけていただろう。なのに、なぜ「彼」は杏子から離れなかったのか。それはすなわち、「病気を治してやろうとの思い上がり」を差し引いても杏子なしではいられないと、「彼」が気付いたからに他ならない。

自己中心的な思考から抜け出した「彼」は、自分が杏子に惹かれる理由をこれ以後見出しはしない。もっぱら杏子の挙動をみつめるばかりで、自分は彼女のここに惹かれている、などとは確認しないのだ。先の杏子を思い浮かべる様子からも、特別病気に重きを置いているわけではないことがうかがえる。病気をもとめているのならば、なぜ「彼」は悪化を望まないのだろう。いまや「彼」は自分の恋愛感情の動機をたしかにさせてくれる、杏子の中の何かをもとめているのではなく、あくまでも杏子自身をもとめるようになっていく。病気だとか容姿だとか、彼女にふくまれた要素をひっくりめられるただ一つの器、この世に一人しかない杏子という人間を。

しかし、その断言によって論考を終えてしまうのは怠惰である。この二人をむすびつけるのは、他人にもわかりやすい原因でもなく、もしくは彼らにあらかじめ備わっていたものでもなく、そうではなくむしろ、彼らが付き添う中で繰返してきた営みそのものであることは確かだ。だがそれはこの小

説を読んだ者であれば誰でも汲みとれる簡単な事実を説明したに過ぎない。「彼」が杏子をもとめるのは、杏子が杏子だからだ、という同語反復を導きただけなのだ。第一、そんな公式だけで事足りるのならば批評など必要ない。

世間に目を向ければ、すべての恋人たちは他の誰でもない、ただ一人だけの相手をもとめたからこそ、今もなお二人で暮らしているのだろう。「彼」と杏子もそれと変わらない。しかし、固有の事実だったはずの営みを、我々がこうして大上段から眺めながら共通の事実として束ねてしまった時、そこから本来の固有性は薄れ、一般的あるいはありふれた事実と化してしまうのである。同時に批評は自分の判断だけを述べる感想へと成り下がる。対象を見つめる作業を怠ったがゆえに。

批評が為すべきなのは、対象にそなわっている固有性を据え置いたまま、その固有性がどのような形づくられているかを描きだすことである。もつといえ、この作品を語るにはこれしかない、という語り口を（作品を書きなすがごとく）あらためて見つけ出すことである。そのためには「彼」（杏子）が杏子（「彼」）をもとめるための動力源を探りだしなければならぬ。もちろん、病気あるいは病気への同情心や庇護欲といった一般にも通用する言葉で説明してはならない。

では、どうすればいいか。まずは彼らの出会いへとさかのぼろう。二人が他でもない「彼」／杏子に出会った瞬間へと、「彼」／杏子を意識せずにはいられなくなったきっかけとなった瞬間へと。

山頂に黒雲のひろがり認めた「彼」は谷に着くと杵子に出会う。それまで「彼」は五時間ちかく人の姿を見ていない。そこに軀の疲れが加わって、「周りの岩がさまざま人の姿を封じこめているように見えてくる」。そうであるからには谷に下りたところですぐに女の姿を見出したわけではなく、あ、あ、あ、あんなところに女がいるなと頭の隅でつぶやいて歩き続け、次の瞬間にはもう沢の響きに気を奪われていた。そこでこの沢では遭難がたびたび起こり、その中の生還者が肉親にさえ見分けがつかないくらい顔つきが変わっていたという伝聞を思い起こす。

そのうち「彼」はようやく杵子を捉える。しかし、彼の目はまともな認識を行わない。

それは人の顔でないように飛びこんできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪さで、彼を立ちすくませた。ところが、顔から来る印象はそればかり跡絶(とだ)えてしまつて、彼はその顔を目の前にしながら、いままでも人の顔を前にして味わつたこともない印象の空白に苦しまれ、徐々に狼狽に捉えられていった。

「狼狽」の手から逃れるように「彼」は言葉を重ねていく。人の顔にそなわっているはずの体臭にも似た表情さえ洗い流した女の顔だと。手前につまめたケルンを見つめながらもまなざしに力はなく、かえってケルンの一途な存在に表情を吸

い取られているかのような女の顔だと。未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえずつかみなおそうとする緊張を「彼」に強いてくる女の顔だと。そこにいるのが人間であるとの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持ちに追いこむ女の顔だと。

やがてあ泣き疲れて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔だなとという落とし所を見つけると、「彼」は女の軀には少女のような雰囲気があると気付いて、すこしの間その「表情」の輪郭をたどる。軀の叙述が終わると、こんな一文がつづく。

そこにいたわるべき病人のいることによりやく気がついて、若い登山者らしい態度を取り戻し、女の方にむかつて足を踏み出した。

この時点ではまだ「彼」は義務感によって動いただけであり、女に対して特別な印象を抱いたわけではない、などといえるだろうか？ 他人である我々にも理解出来るような理由は生まれていない、などと。

もはや蒙昧は許されない。我々は『杵子』のテキストと対面している。テキストと向き合えば必ずもたらされる動揺から目をそむけ、安らぎにいたりつくつために余所から借りてきた言葉で一般的な解釈の枠組みへと抑えこむような真似をしてはならないのだ。我々はひたすらに『杵子』を見つめるほ

かない。テキストがふりまく挙動をつぶさに見まもってこそテキストは解読できるのだ。

「彼」が杏子に引き寄せられた地点はどこか。泣き疲れて庭の隅にかがむ子供のような姿を見て庇護欲が生まれたところか。違う。目の前でうずくまる女の顔を見て、彼女が人間であるとの証しを立てられるのは自分しかいないと使命感を持ったところか。違う。そんな説明は他人とも分かち合える語彙から引っぱり出してきた借り物にすぎず、杏子に出くわした時の感情をそのままに映した言葉ではない。

本当に目を向けるべきはその前の引用だ。

それは人の顔でないように飛びこんできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪ささで、彼を立ちすくませた。

この一見矛盾した言葉にこそ、杏子それ自体に向かった時の印象が克明に描かれている。そもそもここで二度記される「人の顔」は、それぞれ意味を異にしている。どういうことか。

まず、一つ目の「人の顔」について。たとえば我々は初対面の他人と向かいあった瞬間、第一印象から相手がどんな性格を持つのか推定する。それがたとえ当てにならなかつても、なぜ推定できるのか。我々がこれまで多く接してきた人間の特徴たちを、相手と照らし合わせているのである。

「彼」もまた杏子を初めて見た際、こうした認識過程を踏んだはずだ。しかしながら、「彼」は性格の照合に失敗してい

る。「人の顔でないように飛びこんで」たとは、こうした認識の頓挫を指しているのだ。引用した一文の後、「彼」は「いままでも人の顔を前にして味わったこともない印象の空白に苦しめられ」と続くが、これほど明らかな証拠もない。

こうしてみれば二つ目の「人の顔」が何を指すかは明らかだろう。経験とも一般例とも照らし合わせることでできない、他ならぬ杏子だけが持っている顔である。それを前にして「彼」は、「いままでも人の顔を前にして味わったこともない」特別な印象を抱くこととなる。この印象が本当は「空白」だったのではなく、いままでの経験のどこにも落ち着きやしないという感情を言いかえたにすぎない、と暴きたてるのはヤボだろう。

とはいえ、これが恋愛感情とは言えるはずもない。理由などなしに「彼」は杏子にヒトメボレしたのだ、と言おうものなら笑いすら起きないだろう。事実も後押ししてくれる。彼

念のために注意しておくが、引用した文章の後、「人の顔」ならば、いつでも、誰にも見られていない時でも、たえず無意識のうちに発散させている体臭にも似た表情があるものだ。そんな表情まできれいに洗い流されたように、その顔は谷底の明るさの中にしらじらと浮かんでいた」と続く。これをもって杏子からは固有性さえも抜け落ちているのだとするのは誤りである。「人の顔ならば」と語り出した時点で「彼」がふたたび自らの経験則に杏子を組み込もうとしているのは明白だ。

らは谷での一件以来三カ月会わなかった。下山したのち終着駅のホームへと送るまで「彼」は杏子の身の上をたずねもしなかった。「ほとんど口もきかなかった」。名前さえ告げ合わなかった。「知りあったばかりの若い男女のように喋りあうには、出会いがすこしばかり異常すぎた」と断ってはいるが、とにかく恋愛感情を抱いたのならばここにあるような成り行きにはなっていないはずだ。

そもそも恋愛感情などと口走ってしまったら、今度は他ならぬ「彼」の感情を一般例に当てはめてしまうではないか。ともかく、他ならぬ杏子だけが持っている顔に立ち向かったその時、他ならぬ「彼」しか抱けない感情も呼び起こされていたのは間違いないのだ。

しかし、この時点の「彼」は杏子を見つめる中で生まれた狼狽から逃れる。あらゆる言葉を並べては自らの手の中に杏子を収めようとこころみる内に、《泣き疲れて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔》という解釈に落ち着く。杏子を助け起こして下山の道をたどる間も、足取りのおぼつかない女に手を焼くとはいえ、言葉は失わずその身振り手振りを丹念に追っていく。

そんな中、ふだんの生活に戻ってから山での体験をふりかえる叙述には、注目すべきところがある。

杏子については、彼の右腕になじんだほのかな温みしか残らなかった。ちようど雨の中で気紛れに猫を抱き上げて、それから置いてきたような感じだった。珍しい体験として

意識することさえほとんどなかった。

あの頃の彼自身も、かならずしも尋常な状態にあったとは言えない。夏休みから盲学校にも出ないで、ほとんどひきこもりきりだった。酷い時には、十日もつづけて食事時以外は自分の《子供部屋》に閉じこもって、退屈を知らなかった。言ってみれば、これも自己没頭という病いである。しかしこの健康な病いも昂じてくると、外のことにはたいする甚だしい冷淡さをもたらした。そればかりか、皮肉なことに、どうかすると現在の自分自身にたいする、自分自身の体験に対する、奇妙な無頓着にもつながって行きかねなかった。

まれに、彼はあの谷底の出来事を思い出した。そして明日にでも学校に出かけて行って、友達にその話をしてみたいという気になった。友達はその話を面白がるに違いない。そうすれば迂遠な道ではあるが、あの出来事は彼自身にとってようやくひとつの体験となるに違いない。そしてこれからもひきつづき幾つかの事を体験していくだろう自分自身に、また興味をもてるようになるかもしれない。

ところがあの出来事を細かに思い出そうとすると、彼はかならず不快なものにつきあたる。あの女の目に時々宿った、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情だった。《あの女は、あそこで、自殺するつもりだったのではないか》という疑いが浮びかけた。すると記憶が全体として裏返しになり、彼は女の澄んだ目で、幼い山男のガサツな、自信満々な振る舞いを静かに見まもる気持にな

った。あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ四つ年上の女として、最後には彼の記憶の中に落着いた。

重要なのは、四段落目の「彼」が「女の澄んだ目」を導入しながら自分の体験を見つめなおしている箇所である。自分しか有していないはずの体験を、どこにでも見受けられる「幼い山男のガサツ」な振る舞いにあてはめていることはこの際どうでもいい。なぜそうした見直しを女の視線を介しつつ行っているのか？ のみならず、なぜ女の視線を借りられたのか？

「自己没頭という病い」をもとに語るにはあまりに心許ない。自己に没頭するとかえって自身の体験に冷淡になるというアイロニーは興味を起させる。が、この文脈においては、誰かの視線を介さなければ自分の体験もまともに振り返ることはできない、という意味しか表していない。つまり、「自己没頭という病い」はお膳立てを整えたに過ぎず、女の視線を呼びこむ原因となったのは他の何かだということだ。

くわえて、第一段落においては「彼の右腕になじんだほのかな温みしか残らなかった」にもかかわらず、第四段落にいたると「あの女の目に時々宿った、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情」が焼きつき、「最後には」「あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ四つ年上の女として」「彼の記憶の中に落着く。不思議ではない。正確かどうかは別だが、回想をとおして当初は念頭になかったものが見逃せぬものとして現れることはある。しかし、やはり

それが「女の視線」において為されている事実は忘れてはならない。ここには一人ではなく、二人で出会いの場面を再構成するかのような手つきがある。たとえば刑事が目撃者を聴取することで、もしくは目撃者が刑事の助けを得ながら事件の真相をつまびらかにしていくような……ひとまずこれは後にゆずる。

女の視線に話を戻そう。こうした様子は後にも描かれている。たとえば中盤にて、「杏子の醜怪な病いの目撃者になった自分自身の存在を重荷と感じ」るようになった「彼」は、馴れ初めを確認するように谷で起こった事を振り返る。

……あの谷底で、杏子は病気の最悪の状態の中にうずくまりこんでいた。ちようど野獣が狭いところにまるまって、病いが自然に通り過ぎていくのを待っているみたいに。そこへ彼がやってきて、黙って通り過ぎればよかったのに、立ち止まって彼女をみつめた。二人はみつめあった。ことによると、あの時、杏子の中で、自然に流れ過ぎるはずだった病気が、他人の目に見つめられて小さな石みたいに凝固してしまったのかもしれない。彼は杏子の病気を見つめて、視線でたぐり寄せ、たぐり寄せして、彼女を麓まで連れてきた。おまけに吊橋のたもとでもう一度うずくまりこんだ杏子を立ちあがらせて、彼の目をみつめさせて吊橋を渡らせた。それだから、いま、彼を前にすると、彼のまなざしを感じると、彼女の中で病気の核がふくらみだすのだ。しかし二度目に、階段を駆け降りてきたのは、杏子の方じ

やないか……。

「こちらの場合、「彼」は杏子に半ば罪悪感を背負ったがゆえに杏子に感情を移入させた上で、自らの行いを見直している。つまり今度は杏子の軀を借りている。そして「彼」に杏子の軀を借りるようにながしたのが罪悪感めいたものである、という点を見落としてはいけない。

そもそも罪悪感とはどういうものなのかという考察はさておき、ここで「彼」は杏子に対して余計なことをしてしまつたのではないか、あの時の自分は無思慮な振る舞いをしていたので見落としをしていたのではないか、という意識に基づいて相手の軀を借りながら回想を行っている。すなわち、自分勝手な印象(自分は杏子を救つたのだという思い上がり)を疑問に付すために杏子の軀を借りているのだ。

この観点から「女の澄んだ目」を借りられた要因も明らかになる。もう一度、大事な部分だけをつぶさに見ていこう。

ところがあの出来事を細かに思い出そうとすると、彼はかならず不快なものにつきあたる。あの女の目に時々宿つた、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情だった。《あの女は、あそこで、自殺するつもりだったのではないか》という疑いが浮びかけた。すると記憶が全体として裏返しになり、彼は女の澄んだ目で、幼い山男のガサツな、自信満々な振る舞いを静かに見まもる気持になつた。あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ

四つ年上の女として、最後には彼の記憶の中に落着いた。

いっそ「あの女は若くても」以降は切り捨ててもいい。思い出そう。彼は狼狽から逃れるために言葉を重ねた。それが杏子を一般例へと送り返す手つきだったことも明らかになつた。切り捨てた文章もまたその反復なのだと思つていい。すると、「彼」がつきあつた「不快なもの」とは、あの「印象の空白」と同工異曲だと知れる。

つづいて書き継がれる「女の目」によつて生まれた記憶の映像も、「彼」が思い返しはじめた段階では(「自信満々な振る舞い」といった言葉には還元できない)まとまらない印象でありつづけたはずである。してみれば、「女の目」は「彼の記憶を不安定なものとしさせるものとして働いている」と知れる。ではなぜ、「不快な」思いをしてまで彼は「女の目」を借りようとするのだろうか？

きっぱりと言い切ろう。出会いの体験をまとまつた印象にとどめたくないという思いが、杏子の視線を借りさせるのである。あるいはこう言い変えてもいい。「印象の空白」を踏みにじつた罪責が杏子の視線を借りさせるのである、と。いや、もっと直截言えるはずだ。谷において他ならぬ杏子を見つけたと同時に、他ならぬ「彼」にしか抱けない感情も呼び起こされていた。すなわちこの他ならぬ感情にあらためてとらわれないという思いが、「彼」に杏子の視線を借りるよう促すの

である。

この断言は、杏子の視線なしでは「彼」の他ならぬ感情はありえない、とも転回させうる。さらには杏子なしではあの山での体験は確かにならない、そもそもあの山に自分は存在したのかさえ定かにならない。そんなよるめきを杏子の目は支えてくれるのである。

「印象の空白」につづく、杏子の顔を描写する文章にこうしたものがある。

(……) 未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえず掴みなおそうとするような緊張を、行きずりの彼に強いた。彼の緊張がすこしでもゆるむと、その顔は無表情どころか物体のおぞましさを顕わしかける。そのたびに彼はそこにいるのが人間であることの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持ちに追い込まれて、逃げ腰ながら、目だけは一心に女の横顔を見つめ、そして知らず知らずのうちに

自分自身の記憶を幼い頃の方へ向かって探っていた。

こうは言うものの、「自己没頭という病い」にかかっていたことを思い返せば、「彼」の存在感覚とて危うくなっていたとも言えるのだから、「人間であることの証しを」立てるのは彼のみならず、杏子でもあったと言えるのだ。しかし、そんなことがたやすく受け入れられるだろうか？ 自分を証し立てるのが他人であるなど。そもそもこの仮定自体、「彼」にとって能動的であるはずの「他ならぬ感情」を、杏子によって生み落とされる受動的なものとするにかえることによって成り立っている。そんな錯誤からもたらされる狼狽は、「彼」に嫌悪をもたらずだろう。だからこそ、「他ならぬ感情」に身をゆだねることなく、言葉を重ねてそこから逃れようとするのである。ましてや恋愛感情などというものには置き換わるはずもない。だが杏子を見捨てられない気持ちは動く。それゆえに杏子の病気を救うという思い上がりの力を必要とした。

さりとて、「彼」がどう反発しようが、杏子の視線は繰り返れられる。「彼」の内なる感情が杏子の視線を繰り返れつづける。いかに言葉を弄してかりそめの土台を作ろうと、杏子は立ちほだかる。「彼」自身が杏子を目の前に置かざるを得ない。彼女は暗黙裡の問いかけをやめない。「彼」の他ならぬ感情が、そうしてくれるよう促すのである。あなたはどのようにしてあたしを救ったのか、あなたはあたしをどう想っているのか、あたしをもとめるあなたは何者なのか……。

彼が意識しているかどうかは問題ではない。意識とは言葉によって成り立っている。言葉(意識)以前の段階にも「彼」を突き動かすものがあるとわかったからには、言葉を一部とした上での「彼」の存在全体に目を向けなくてはならないのだ。それでもなお疑念が残るといふのならば、杏子の視線は彼の中で他ならぬ感情を呼び覚ますために働いている、と無意識がもたらした結果であるかのごとく言い換えてもいい。どのみち結果を受け取るのは彼しかいないのだから、大した違いはないのだが。

谷において「彼」が杏子のもとへと近づいていく際の、象

徴的な文章を引用しよう。

その時、彼はふと、鈍くひろがる女の視野の中を影のよ
うに移っていく自分自身の姿を思い浮かべた。というより
も、その姿をまざまざと見たような気がした。歩むにつれ
て、形さまさまざまな岩層の灰色の広がりの中に、その姿は女
のまなざしに捉えられずに段々に傾いて溺れていく。漠と
した悲しみから、彼も女を見つめかえた。すると女の姿
も彼のまなざしにつなぎとめられずに表情をまた失い、は
つきりと目に見えていながら、いまわりの岩ほどに訴えて
こない。彼はすでに女の姿を背後に打ち捨てて歩み去るこ
ころになった。

それから、まわりの岩という岩がいまにも本性を顕わし
て河原いっぱいに雪崩れてきそうな、そんな空恐ろしい予
感に襲われて、彼は立ち止まった。足音が跡絶えたたとん
に、ふいに夢からさめたように、彼は岩のひろがりの中に
ほっそりと立っている自分を見出し、そうしてまっすぐに
立っていることにつらさを覚えた。それと同時に、かれは
女のまなざしを鮮やかに軀に感じ取った。見ると、荒々し
い岩層の流れの中に浮ぶ平たい岩の上で、女はまだ胸をき
つく抱えこんで、不思議に柔軟な生き物のように腰をきゅ
うつとひねって彼の方を向き、首をかしげて彼の目を一心
に見つめていた。その目を彼は見つめかえた。まなざし
とまなざしがひとつにつながった。その力に惹かれて、彼
は女に向かってまっすぐに歩き出した。

これが山を降りた後で再会してからの関係をも規定して
いるのならば、「彼」の言動は杏子によって縛られていること
となる。いよいよ、杏子を見つめなければいけない。長きに
わたって我々は「彼」の仕草ばかり追ってきた。『杏子』の叙
述は「彼」を中心とした三人称一元にもとづき為されるのだ
から自然な成り行きだったのかもしれない。しかし、実際に
視点が杏子へと移り変わる箇所もあるのだ。たとえば、谷へ
と下りてきた「彼」をみつめる杏子の目付きを記した、この
文章のように。

…そのとたんに、杏子は男の姿をはじめて視野の中心
に捉えた。男は二、三步彼女に向かってまっすぐに近づき
かけて、彼女の視線を受けてたじろぎ、段々に左のほうへ
逸れて言った。男は杏子から遠ざかるでもなく、杏子に近
づくでもなく、大小様々な岩のひしめく河原におかしな弧
を描いて、時々眼の隅でちらりちらりと彼女を見やりなが
ら歩いていく。細長い軀の、背を獣みたいにもっさりまる
めて、まるで薄い氷の上をそろそろとわたるみたいに、お
さない目もとに不安をむき出しにしている。ところが男が
歩いていくにつれて、灰色のひろがり、男を中心にして、
なんとなく人間くさい風景へ集まって行く。そのさまを杏
子はいかにも珍しいものを目にする気持で見まもった。あ
の人はどんなにわが身をいとおしく思っていることだろ
う、と彼女は驚嘆した。わが身をいとおしく思って、その

ために不安に苦しめられて、その不安をまた愛おしく思つて、岩層のひしめきにたちまち押し流されてしまいそうなるちっぽけの存在のくせして、戦々競々と彼女をよけていく。

もっとも、本当に視点が切り替わっているかは怪しい。この引用の前には、こうした一文が置かれているのだから。

後になって、お互いに途方に暮れると、二人はしばしばこの時のことを思い返しあった。二人はそのつどそのつど、この奇妙な出会いをきれぎれな言葉で満たしあった。

谷を下りてくる彼の山靴の音を、杏子も早くから耳にしていたという。(……)

伝聞から視点を移すからには、杏子だけが有している視点とは言えず、「彼」もこれ以降の光景を杏子と共に思い浮かべているのだ。そのため、杏子へと視点を移すというよりも、「彼」の視点の中に杏子の視点を組みこむ、入れ子構造を形づくっているのだとしたほうが正しい。

しかし、これは杏子が本当に捉えた光景ではないのだから参考にならない、と切り捨てるのは早計である。注目すべきなのは出会いの場面を「二人」で話し合いながら思い返しあっている点だ。そう、杏子もまた「彼」の視線を繰り返しながら谷での出来事を思い返している可能性がある。のみならず、こんな憶測もまた立ち上ってくる。杏子もまた他ならぬ感情に捉われている可能性があるのではないかと。

《病氣》のことに触れると、杏子の言葉はことに曖昧になる。山の中で彼に出会ったおかげで元気になった、と彼女はくりかえし言った。そのくせ、《病氣》がいちばんひどかったのは、山から帰ってきてひと月ほどの間だったと言う。彼がその矛盾をつくくと、《あなたにホームで出会ってから元気になった》と言いなおしたり、《山からもどつて来てから、いつも、あなたの顔を思い出していた》とか答えにもならないことを言ったりしたあげく、また、彼のおかげで自分がどんなに元気になったかを潤んだ目で語り出す。彼はそれに反論する。

「何度も言ったように、僕は君を麓まで降ろしただけだよ。僕が通りかからなくても、もうしばらくすれば、君は一人で降りてきたさ」

「それはだめだったわ。たとえ一人で降りてこれても、もうだめだったわ」

「無事に降りてくれば、それでいいじゃないか」

「あなたのおかげで元気になりました」

「僕は君の病氣とやらをなおした覚えはないよ」

「でも、なおったんです。あれから、何もかも、とても静かに見えるようになりました。目にしっくりなじんで、とてもきれい。きれいすぎて、もったいないみたい」

矛盾は問題ではない。彼女が何を伝えようとしているか、彼女がどう感じているがために矛盾してしまうのかを解き明

かす方が大事なのだ。

一つだけ、会話の往復にズレが生まれている。『無事に降りてくれば、それでいいじゃないか』／『あなたのおかげで元気になるました』。ズレを起こしてまでも伝えたいことがある。それだけでない。矛盾をきたしてまでもこの人にある。自分にとって重要な存在であることを伝えたい。あの谷でなにが起こったのかは分からないが、とにかくこの人に助けてもらったという手触りは残っている、こうしてこの人と向かい合っていると、その手触りがありありと感じられる……。

これでは仮説にとどまる。それならばさかのぼろう。小説を一から眺め直したことで「彼」の存在の有様をかたどったように、杏子の存在を一から見直すことで、その有様をつかめる可能性もあるのだと信じて。

杏子は「彼」より先に頂上を降りはじめ、「彼」と同じ道をたどった末に谷へと着いた。河原に立った時、杏子は「谷底にのしかかる圧力を軀にじかに感じ取った」という。疲れはそれほどでもなかったが、平たい岩のところまでやってくると、リュックサックから水筒を出そうと思って岩の上に腰を下ろした。

その途端、杏子は周りの重さが自分のほうに集まり、周囲の岩が自分を中心にしてふいに静まりかえったのを感じて、思わずうずくまりこんでしまう。山の重みが支えられる地点に、何も知らず腰を下ろしてしまったのだと感じた杏子は恐ろしさを覚える。そんな畏れに顫（ふる）える子供みたいな

心を残していることにさえ空恐ろしさを覚える。

畏れのあまり身動きひとつ取れなかった杏子が、ようやく顔を上げて見回したところ、周囲の様子も変わっている。あたりの景色が流れ落ちるように胸の内側へじかに迫ってきて、全身を固く締めさせる。杏子は視界を狭めて岩のひとつひとつを丹念に見つめることで、部分から全体を組み立てるように風景を確かなものへとまとめようとした。が、流れ落ちる感覚はなくなつたものの、「ひとつひとつの岩が垂直の方向ばかりに強くて、どぎつくて、水平の方向がとても弱くて、頼りなく」映るようになり、そんな風にひしめきあっている岩場がどうしてこの軀を支えてくれるのかがわからなくなる。途方に暮れた杏子は岩に坐ったまま、物を思うものの自分の中心さえつかめなくなる。灰色のひしめきの中へ思いは流れていき、あちこちから物憂げなつぶやきが聞こえてきては岩に沈んで、静まったかと思えば「子供みたいなしまりのない声でつぶやき出す」。

いつのまにか杏子は目の前に積まれた小さな岩の塔を上げ上げと眺めていた。それが道しるべだということとは、その時、彼女はすこしも意識しなかったという。どれも握り拳を二つ合わせたぐらいの小さな丸い岩が、数えてみるとぜんぶで八つ、投げやりに積み重ねられて、今にも傾いて倒れそうに立っている。その直立の無意味さに彼女は長いこと眺め耽っていた。ところが眺めているうちに、その岩の塔が偶然のつり合いによってではなく、一つ一つの岩

が空に向かって伸びあがろうとする力によって、内側から支えられているように見えてきた。一つ一つの岩が段々になまなましい姿になり出した。それにつれて、それを見つめる彼女自身の軀のありかが岩の塔をかなめにして末広がりになってしまう、末の方からたえず河原の流れの中へ失われていく。心細くて、杏子は自分の軀をきつく抱え込んだ。軀の感じはまだ残っていた。遠い遠い感じで、丘の上から自分の家を見おろしているみたいだった。

「そんな感じ……。それとも少し違うみたい」と杏子は言い、今度はほとんど正反対なことを喋り出して、彼に首をひねらせた。

しっかりと振り返れないのは病気のせいだと断じてはならない。「彼」が自分の存在を他人によって証し立てることに臆したように、杏子もまた自分の存在が岩場に呑みこまれた過去をすんなりと受け入れられていない可能性もあるのだ。ともあれ、ここでは杏子もまた谷での体験をはっきりと記憶していないのだと確かめておこう。

このような体験に見舞われながらも、「あの時ぐらい、杏子は自分がここにあることを鮮やかに感じ取ったことはなかったと言う」。岩の塔を見つめながら、自分の力を岩の中へと注ぎこんでいくうち、谷底の薄暗い光の中で、混じりけのない生命観となつてうつらうつらと成長しはじめ、それにつれて杏子も岩と一緒にうつらうつらと成長する気持を覚えていく。「杏子は幸福を感じた」。

「幸福だって……」

彼は思わず聞きかえした。杏子はこっくりとうなずいた。彼は半分わかるような気がしたが、またたずねた。

「しかし僕が降りてきた時には、君の姿は充実だとか、幸福だとか、そんな風にはとても見えなかったけれど」

杏子は額に手を当てて考え込んだ。しばらくして彼女はポツリと言った。

「幸福というより、やっぱりつらかったわ。二度とあんな風になりたくない」

杏子がこのように錯綜した口ぶりをする理由は、あとの文章から察せられる。

人間であることは、立って歩くことなんだなあ、と杏子は思ったという。立ち上がって、どれも自分とひとしい重みをもつ物たちの間で、生意気にも内と外を分けて、遠い近いを分けて、自分勝手な視野をつくって、大きな頭を細い首の上のせてうつらうつらと歩きまわることなのだ。だけど、内と外を分けたとたんに、畏れが内側に流れこんで、いっぱい満ちて、姿全体にどこか獣くさい感じをあたえる。

「自分」とは「自らの領分」と解することが出来る。さまざまな人々がごったがえす中で、はっきりと自我を持つこと

の困難、などと言ってしまうと月並みではあるが、杏子はその困難を疑似的に解決したという実感があつたからこそ、「幸福」を感じたのだ。しかし、疑似は疑似である。なによりケルンに自分を託した上でそうした感覚を体験したというのなら、二重の倒錯が起こってしまったている。おまけにこの時杏子は「幸福」と隣り合わせの危機にも瀕していたのだが、あらずじを追い直すことで説明できるのでひとまず戻ろう。

岩の塔をみつめるうちに畏れはなくなり、自分のありかも確かになってきた。しかし、まわりの沢山の岩達は、なお銘々が頑固に主張しつづけることで均衡を保っており、杏子は自分もその網の目に取りこまれて、立ち上がるものなら釣合いは崩れてしまい岩が雪崩れ出してしまうのではないかと考えていた。「幸福」がゆらぎはじめる。

その時、足音が近付いてきた。

足音が近くまで止んだ時、その時はじめて、杏子はハツとした。誰かが上の方に立って彼女の横顔をじっと見おろしている、その感じが目の隅にある。確かにあるのだけれど、それが灰色のひろがりの、いったいどの辺に立っているのか、見当がつかない、見当がつかないから、顔の動かしようもわからない。

「頭をぐるっとまわして見わたしてみればよかったのに」
彼はある時杏子に言ってやった。

「それが出来るくらいなら、あんなところに坐っていないか
ったわよ」と杏子は笑った。

うっかり顔を上げて、もしも人の姿がなかったら、もしも人の姿が前景に立って灰色の傾きを支えてくれなかったら、岩屑がいちどに目の中へ、頭の中へ雪崩れこんできて、それっきり自分はダメになってしまう、そんな気がしたという。

しかし、「彼」は立っていた。

《いるな》と杏子は思った。しかしいくから見つめても、男の姿は岩原に突き立った棒杭のように無表情で、どうしても彼女の視野の中心にいきいきと浮び上がってこない。

《いるな》という思いは何の感情も呼び起さずに、彼女の心をすりぬけていった。杏子は疲れて目をそむけた。それから、視線が又こちらに注がれているのを感じて、また見上げた。すると、漠と広がる視野の中で、男の姿がしっかりと動き出した。そのとたんに……

そのことを話すたびに、杏子はやさしくて残酷な顔つきになる。杏子は彼の胸に軀を強く押し付けてきて、顔だけを彼の肩からすこし離して、目にいたわりの光を浮べながら、乾いた声で、言葉を少しも柔らげずに喋り出す。

……そのとたんに、杏子は男の姿をはじめて視野の中心に捉えた。男は二、三步彼女に向かってまっすぐに近づきかけて、彼女の視線を受けてたじろぎ、段々に左のほうへ逸れて言った。男は杏子から遠ざかるでもなく、杏子に近づくでもなく、大小様々な岩のひしめく河原におかしな弧

を描いて、時々眼の隅でちらりちらりと彼女を見やりながら歩いていく。細長い軀の、背を獣みたいにもっさりまるめて、まるで薄い氷の上をそろそろとわたるみたいに、おさない目もとに不安をむき出しにしている。ところが男が歩いていくにつれて、灰色のひろがり、男を中心にして、なんとなく人間くさい風景へ集まって行く。そのさまを杏子はいかにも珍しいものを目にする気持で見まもった。あの人はどんなにわが身をいとおしく思っていることだろう、と彼女は驚嘆した。わが身をいとおしく思っていて、そのために不安に苦しめられて、その不安をまたいとおしく思っていて、岩屑のひしめきにたちまち押し流されてしまいそうなちっぽけの存在のくせして、戦々競々と彼女をよけていく。それでも、そうやって男が歩いていくと、彼女に対しては険しい岩々が、彼のまわりには柔らかに集まって、なま温かい不安のにおいを帯びはじめる。杏子はその様をしばらくしげしげと眺めていた。そして男のあまりにも露わなわが身のいとおしさに、あまりにも露わな不安の表情に、まるで夜道で酔漢とすれ違った時のおぞ気をふるいながら、《立ち止まって、もし、あなた》と胸の中で叫んでしまった。すると男はいきなり岩の間で立ちすくみ、いったんは逃げだしそうな構えを取ったけれど、やがてぼんやりとこちらを向き、大きくて臆病な獣みたいに潤んだ目でおそろおそろ近づいてきた。

はじめは男の存在を目に留められず、近づいてきてからも

その存在が鮮やかになるわけではない情景は、「彼」の視点に映ったものと二重写しになるかのようだ。

「彼」は杏子のもとへとたどりつき、「『麓まで連れて行ってください』」と言わせる。以降視点は「彼」のもとへと戻り、麓まで下りていく叙述がつづく。

杏子が「彼」に惹かれた理由は、はじめに見当をつけたものとそう変わりはない。岩達のひしめきの中でうずくまり、たとえその中で「幸福」を感じていようと、動き出そうものなら途端に裏切られる危機に瀕した自分を、「彼」は救ってくれた。まさに人間としての自分を証し立ててくれたのである。

おそらく、「彼」なしでは自分の存在を保てなかった、ということを杏子は自覚している。それだけでなく、他人によって自分が証し立てられることへの畏れも、岩場で感じたという「幸福」も考え含めた上では、より強く自覚していると察せられる。救われはしたのだが、杏子は自らを襲った危機から逃れられていないどころか、自覚しているがゆえに危機をいっそう剣呑なものとしているのだ。

こうした両義的な感情は彼女の「病気」についてもあてはまるのだが、それを語るのには二人の関係についての考察を終えてからにしよう。ともあれ、「彼」が自分を救ってくれたのだという手触りは三カ月経っても忘れられず、駅のホームで「彼」を見かけた瞬間走り寄って行くだけの力ともなった。しかし、いかに自分が病気なのだ、「彼」の前で告白しようと、たとえ『吊橋のように助けてほしいの』と願おうとも、君は病気だ、自分の存在も一人では証し立てられない、だか

ら僕が救ってあげる、などと言ってのける自惚れた手に、あらがいなく自らの身をゆだねられるだろうか。

杏子の顔つきは濃い影となつてわからなかつたが、全身が何かを怪しむように静まりかえつてこちらをしげしげと見つめている。彼はまどろみの中にまだなかば捉えられていて、見つめかえすことが出来ずに、ただ一方的に見つめられていた。見つめられることの気味の悪さを、彼は知つた。ただ一方的に見つめられて、彼の軀はベンチの上でおおよそ無表情な、ただひたすら存在に耽る獣じみた生命へ押し戻されていく。

「あの人に見られていたのか……」という驚きと、そして嫌悪が女の軀にひろがっていく。醜悪な目撃者の眼を潰してやりたい。そんな衝動を彼は思いやった。

しかし、杏子は出会いの実感も手放せない。証拠に、彼女は出会いの場面を反復するかのように、二人で立ち寄つた河原にてケルンを積む。いわずもがな、「彼」にみつめられていることを知りつつ。

杏子はちょうど、しゃがんだ軀の額よりも高くなつた天辺のコブシ大の石の上に、又不釣合いに大きな石を両手でせようとしているところだった。しゃがんだまま腰を軽く浮かして、石を両手で目の上へ差し上げるようにして塔の天辺にそつと近づけ、杏子はふときかん気な目つきにな

り、その石を天辺の石の中心よりもわざと左へ大きくずらしてのせた。そして両手をさつと離し、軀を低く小さくこごめて、ぐらぐらと左右に揺れる塔を見つめた。

(……)

彼はふと杏子という存在を感じ当てたような気がして起き上がり、杏子のそばに言つて、一緒にかがみこんで石の塔をながめた。しばらくして彼は杏子の肩に手をかけて、「おいで。もう帰ろう」と声をかけて立ち上がった。杏子は動かなかつた。彼に手を取られてようやく立ち上がった時にも、彼女は石の塔に見入っていた。背中に腕をまわして連れていこうとすると、顔に怯えの影が走つた。彼は石の塔のそばに行き、「このままじゃ、だめだね」と言つて、石をひとつひとつ降ろして下に積み、低い安定した山をこしらえてやった。杏子はようやく軀をほぐして歩きはじめた。

こうした「彼」の目を引くために自分の不安定ぶりをさらけ出す姿は、媚態とも受け取られかねない。しかし、杏子は「彼」との関係が続ける中で、待ち合わせの場所はかならず最初に二人で訪れた「薄暗い喫茶店」に限つたり、軀を交えるならば街中の宿を避けて郊外の古ぼけた屋敷に移るよう「彼」に願つたりといった、谷底での風景を反復するかのごとき態度を見せるのである。それを見まもりながらもなお、媚態などという悪し様な言い草が吐けるだろうか。

作品全体を通して、杏子は谷底での体験を何度も繰返す。

一人で繰返すのではなく、「彼」と繰返す。たとえ一人で部屋にこもろうと、後日「彼」に報告する。そこで感じ取ったものを「彼」に逐一告げ知らせる。あたかも谷底での体験が本物だったかと量るかのように。あの時「彼」と手をたずさえた時の感触は今も自分にとって疑いのないものなのかと確かめるように。あの時自分の手を取ってくれたのはこの人だったのだろうかと思定めるように。

杏子は「彼」の視線を繰りいれることで自分の感情を確かにするるとともに、「彼」の輪郭をも確かにしようとしているのだ。

あえて言いきってしまったえば、谷底で杏子を救うことは誰にでも起こしえた。その時点で「彼」特有の何かを杏子が見出した様子もないし、以降の展開を眺めてみても杏子がそれを明かす場面はない。だが、自分が一度しか体験しなかったあやふやな記憶を鮮やかにしてくれるのも、あの時同じ道を通って谷へと下りてきた、他ならぬ「彼」しかないのである。

自分に降りかかったことを必然だったと受け取り直す。この恋は運命なのだというような定型句ではない。そもそも各人の体験はどんな事柄であろうと各人にしか体験することのできないものだ。さりとて、時に人は体験を疑う。もしああすればあんなことは起きなかったのではないか、あそこであなつたのは私でなくてもよかつたのではないか……そういった迷いを振り切ろうとするために、杏子ははじめから揺るがしようにもなく起きた必然を必然として受け取り直しているのだ。

杏子は、確かな想いや理由（原因）がありそれを確かなものとした上で連れ添う（結果）までに至るといふ道行きとは、いくらか違ったものをたどる。はじめに「彼」は自分にとつてかけがえのない存在になったという結果がある。しかもそれが「彼」と連れ添う原因と一体になっている。原因が結果と一体になっていくからには、結果を繰りかえさなければ原因も確かなものとはならないし、自分たちが今連れ添っている根拠にもならない。そんな論理が杏子の行動原理を規定しているのである。

それだけではない。思い出そう。「彼」もまた初めに杏子と
いうかけがえのない存在を見出して、「彼」にしか抱けない感情を芽生えさせていたことを。そのかけがえのない記憶を意識の有無にかかわらず何度も反復しながら、そこで得られた手触りを鮮やかにしようとしていたことを。原因と結果が一つになった体験という起源を繰返しやり直していたことを。

この視点を通せば、初めのころに引用した、二人が二度目に軀を交える前の「彼」の心理が示すところも明らかになる。そもそも二人が初めて軀を交えた時にはこう説明されていた。「肉体的な衝動に駆り立てられた覚えもほとんどなしに、まるでそうでもしなければ杏子の感覚の昏乱の中でお互いの関係が保てないともいうように、彼は杏子の軀にふれることになった」。ここには自分が杏子の軀を求めるのは自分が杏子を求めていると信じているからだ、という同語反復にも似た心理がある。「彼」は杏子との関係という事実を追認するため、二度目に交わったのだ。この根拠がないに等しい行為の奇怪さは、二度目に交わる頃には、杏子の軀を求めるのは杏子の軀を求めたからだ、という形で一層強められる。が、そこで軀を交

思えば、世間にひろく見られる恋人達もそうではないか。連れ添うという行為は結果ではないのかもしれない。本来結果と呼ぶべきは相手を好きだと思いはじめる、原因が生じた時点なのかもしれない。そこで彼らは原因と結果が一体になった、特別な関係を取り結ぶ。そして彼らが二人だけで連れ添おうと申しこむ時には、こう言外に述べているのかもしれない。私にとってあなたはかけがえない存在なのだ、だからかけがえない存在同士にふさわしい付き合い方をしよう……こうしてみると連れ添うという恋愛の形は、世間から借りてきた標識のようなものなのかもしれない。この人は私にとってかけがえないものだから横取りしてはいけない、とでもいうような。

しかし、だからといって「彼」と杏子には標識は不要なのだ、とは結べない。標識無しの彼らの関係は不安定なのである。だからこそ時に世間並の情欲を借りようとするし、病気を治そうという思い上がりの力をも必要するのだ。とはいえ虚飾は虚飾だから剥がれるのも早いし、何より彼らにとっては居心地の悪いものでしかない。そして彼／彼女の中心にある理由となっている杏子との関係や、杏子との交わりは不安定なものだった。だから「彼」は世間という外部から情欲の典型を借りようとしたのである。

これに絡めて付言しておきたい。本稿の論旨は言葉ならぬものこそ大事なのだと説くところにある、と受け取らないでもらいたい。そもそも言葉にならないものとは、言葉がなければ視野にのぼってこない。言葉以前の領域での苦悩もまた、言葉との葛藤があつてこそ成り立つ。そしてみつめるべ

る、自分、相手、世間、そのどこにも属することのできない居心地の悪さをなぞれた時、二人は向きあうことが出来る。

「そうね……あなたには、あたしのほうを向くとき、いつでもすこし途方に暮れたようなところがある。自分自身からすこし後へさがって、なんとなく希薄な、その分だけやさしい感じになって、こっちを見ている。それから急にまとわりついてくる。それでいて、中に押し入ってこないで、ただ肌だけを触れ合って、じっとしている……。いつも同じだけど、普通の人みたいに、どぎつい繰返しじゃない」
彼はそうではない時の自分の姿を思った。杏子のそばにいながら自分ひとりの不安に耽って、無意識のうちに同じ癖を剥（む）き出しにして反復している獣じみた姿を……。
そして彼のそばで眉をかすかに顰めてそれに耐えている杏子の姿を思いやった。しかしその思いは胸の中にしまつて、杏子の差し出した言葉を彼はそのまま受け取った。
「入りこんで来るでもなく、距離を取るでもなく、君の病気を抱きしめるでもなく、君を病気から引張り出すでもなく……僕自身が、健康人としても、中途半端なところがあ
るからね」
「でも、それだから、ここでこうやって向かいあって一緒に食べていられるのよ、あたしいま、あなたの前ですこしも差（はず）かしくないわ」

きは、目の前に佇む二つの問題をどう軌轢なく折り合わせる
と悩んでいる、双方の間に滞るものなのだ。

(……)そうして薄暗がりの中で二人して同じ反復に耽っている、軀を合わせている時よりも濃い暗い接触感があった。しかしそれをお互に見つめあう目がのこって、暗がりの中に並んで漂って、お互いのおぞましさをいたわりあった。二度と繰返しのきかない釣合いを彼は感じた。

(……)

「ああ、美しい。今があたしの頂点みたい」

杏子が細く澄んだ声でつぶやいた。もうなかば独り言だった。彼の目にも、物の姿がふと一回限りの深い表情を帯びかけた。しかしそれ以上のものはつかめなかった。帰りの事を考えはじめた彼の腕の下で、杏子の軀がおそらく彼の軀への嫌悪から、かすかな輪郭だけの感じに細っていた。

*

以上が「彼」と杏子の、二人だけにしか作り出せない、固有のものと呼ぶことさえはばかられるかけがえのない関係である。こうしてみれば初めに立てた見当——「精神に異常をきたした女を男が庇護する恋愛小説」——が作品の一面しか切り取っていなかったと知れるだろう。彼らは世間並の恋愛関係を営んでいるとは言えないし、男が女を庇護しているのは外面だけなのである。

初めのころは確かな恋愛感情を打ち立てるもの、お互いを見つめる間に相手のはつきりとした自我とすれ違いが起こ

り、関係に亀裂が生じる、といった筋立てではないのだ。彼らの関係は初めから壊れている。相手に自らの身をゆだねきれないでいる。一度ゆだねきつたのだという結果があるにもかかわらず、あたかも別人が起こしたかのように受け取り、結果を信じきれないでいる。ましてやこの関係が恋愛であるなどとは思ってもよらない。さらに、彼らははつきりとした自我をもっているわけではない。自我は相手との関係によって成り立つのだ。

これこそが恋愛なのだと思えば、いくらでも論を尽くすことが出来るだろう。しかしそうしてみたところで、この小説が恋愛さえその一部とするような、彼らが彼ら自身として存在することの問題をこそ重く取り扱っているのだという事実は揺るがしうもない。

とはいえ、まだ終わらない。この一筋縄ではない小説を分析してみても、さらに疑問が立ちあがってくる。主題として打ち立てられていたはずの「恋愛」が虚飾であったとわかったからには、細部においても仮面をつけているのではないかと。男が実は庇護者ではないとわかった、それならば女のほうは「精神に異常をきたした」ままで良いのだろうか？ 杏子は本当に「病人」なのだろうか、と。

我々はいまだ関係の固有性を汲みあげたにすぎないのであり、固有性の問題にとりつかれるからには『杏子』という小説自体の固有性にも執着しなければならぬのだ。

（つづく）

泉鏡花『高野聖』について

る

小説における心理描写と行動描写はだいたいにおいて反比例の関係にある。ここでいう行動描写とは単なる作中人物の振る舞いに留まるものではなく、その奥底に作中人物の感情、思想、などが孕まされた描写であることわかっておけば前述の反比例という言明もいささか説得力が出てこようか。以下に書かれた文章は私がはじめて鏡花について書いたものであるのだが、年月を重ねるにつれて、鏡花の書く文章はほとんど心理描写が書かれていないことに気付く。ただ、現代の文芸における行動描写の欠如や、どちらが優位であるかだとかを述べるつもりはない。

なお、泉鏡花という作家は明治期の作家であり、十代には尾崎紅葉に弟子入りし、デビューも早かったため、歳の近い夏目漱石らよりも活動期間はずいぶん長い。明治期の有名な作家の例に漏れず、文壇におけるリアリズム・自然主義の潮流によって排斥されていたことは小林秀雄の批評からも窺える。『高野聖』は彼の数多い代表作の一つであり、鏡花特有の「お化け」「女性」という意匠がふんだんに盛り込まれた作品となっている。

さて、この短くて簡潔な物語は、主人公である高野聖と、ある女との交流を本筋においているのだが、その中で彼の思

想（思想と言ってしまおうと語弊があるのだが、其のことについては後で述べる）が色濃く映し出されていると思われる二つの場面について述べたいと思う。

一つ目は、女が僧に歌を聞かせようと男を励ます場面から「左右して、婦人が、励ますように、賺すようにして勧める」と、白痴は首を曲げて彼の臍を弄びながら唄った。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、
裕遣りたや足袋添えて。

（よく知ってませう、）と婦人は聞き澄ましてにっこりする。」（本文「泉鏡花全集第五巻」631頁より引用）

ここでポイントとなるのは「白痴」と呼ばれた男である。鏡花は僧にこの婦人の夫である「白痴」にばかりというルビを振って呼ばせている。この時代そう呼ぶものかどうかは不明だが、僧のそれまでの男に対する言動から判断して、僧は彼の歌を聴くまではこの男を無能で愚かな男としてでしか捉えていない。この時点で女にかなりの好意を抱いている僧にとって、この男の存在は疫病神以外の何者でもない。しかしそれは「嫉妬」のような明確な感情ではなく、むしろ不可解だ、という思いである。僧はこれほどまで美しい女が、このよう

な山奥で、こんな男の世話をしていることが理解できないのである。そのような思いを抱いているものが、この女は何か特別な事情があつて、このような不幸な境遇にあつていのだらう、と考えることはいたつて自然なことと思われる。そしてそのような状態でこの場面を迎えたのだが、男の唄は、「不思議や、唄った時の白痴の声は此話をお聞きなさるお前様は元よりじゃが、私も推量したとは月ペイ雲泥、天地の相違、節廻し、あげさげ、呼吸 の続く所から、第一其の清らかな涼しい声といふものは、到底此の少年の咽喉から出たものではない。先づ先の世の此の白痴の身が、冥土から管で其の膨れた腹へ通はして寄越すほどに聞こえましたよ。」(本文「上掲書」631頁より引用)

とあるように見事な唄であつたことが伺える。この唄を聴いて僧は自らの邪推を恥じる。つまり、この男女は何か理由があつて、一緒に暮らしているという考えは、この白痴の唄によつて否定されるのである。僧はこの男の純朴な心(それは白痴ゆえのものかもしれない)と女の優しさとの非常に強く純粋なつながりを直感的に感じ取り、自らの打算的な考えを恥じたのだ。それは、

「私は畏まつて聴き果ると、膝に手をついたツ切り何うしても其処な男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤとして、はらりと落涙した」(本文「上掲書」631頁より引用)

という描写に表れている。また落涙したとあるがそれは、

「(女の) 其男に対する取り廻しの優しさ、隔てなき、親切さ

に、人事ながら嬉しくて、思はず涙が流れたのぢや」(本文「上掲書」632頁より引用)

と説明されているように、男の純朴な心に対してのなんの曇りのない女の優しい心に感動したのだ。この場面で描かれてゐる、より純粋なもの、美しいものへの憧れは文学に限らず芸術における最大のテーマの一つである。特にこの「浄化」という形式はあらゆる作品の中に見られる、例えば芥川龍之介の『蜜柑』がその代表的な例だろう。鏡花は、現実の世界から離れた山奥という設定の効果から、より純度の高い領域でこの「浄化」を描き出すことに成功しているといえる。これは漱石が『草枕』で得ようとした効果に似ており、そこに鏡花の唯美的な芸術観が読み取れる。しかしこの話はそこでは終わらない。もう一つの場面は親仁が女の正体を明かす場面である。僧は女の中に潜む鬼を知ると同時に女の孤独を知る。読者はここで鏡花がいくつかの伏線を回収していることに気づくだろう。それは女のどこか魔性の帯びた態度だったり、女に群れる畜生や魑魅魍魎、あるいは馬に対しての行動であつたり。そのなかでも注目すべきは女が僧を泊める際、言つた一言。

「私は癖として、都の話聞くのが病でございます、口に蓋をしておいでなさいまして無理やりに聞かうといたしますが、あなた忘れても其時間かしてくださいな、ようござんすかい、私は無理にお尋ね申します、あなたは何してもお

話しなさいませぬ、其れを是非にと申しましても断つて仰らないように屹と念を入れて置きますよ。」(本文「上掲書」601頁より引用)

ここには女の孤独がはつきりと浮き出ている。外の世界への憧れが悲壮な思いを伴って、女の口から吐き出されている。そもそも女が鬼に変わるときそこには深い悲しみがつきものだ。年頃の若い女がその時期に「白痴」の世話で虚しい(このことは先に述べたことと対立するものではない、それは後に書く)日々を過ごしているうちにその悲しみは次第に募り、女はいよいよ妖艶さを増してゆく。人里離れた場所での恋しさが募り、その悲しみが旅の男を次々に畜生に変えていく。一体どれほどの悲しみが横たわっているのか、それは想像を絶するものである。さて、1つ目の場面と合わせて、この女を僧はどう思ったのだろうか、今でもあそこで残ればよかつたと思うことがある、と口に行っていることから、僧の女に対する複雑な気持ちがある。そして女自身も、この僧が出発する際執拗に引き留めようとしたことから、女の中の葛藤も伺える。この関係或いはこの葛藤は悲劇だ。しかし鏡花は決してこの女の二つの特性、純粋な心と内に秘めた鬼とを単に相反するものとして描いていない。むしろその二つのテーゼは弁証法的に統合されこの女のなかに内包され、女の性質をはつきりと浮かび上らせている。女の優しさはその魔性に寄与し、その魔性は優しさに寄与している。根源は女の持つ聖性を帯びるほどの純粋な魂であり、その奥には深い悲しみが

横たわっている。狂気と親しい女ほどよく泣くのだ。私は、最初に述べたように、この作家が明確な思想を持ってこの物語を作り上げたとは思わない。さらに言えば、この作家がそのような思想を否定しているようにも思える。「白痴」を純粋な人間として描いたことで、鏡花はそれを否定したのだ。彼が求めたものはもつと根源的なものである。それはこの物語の全てに通して横たわっている無垢な魂である。読者はこの物語を読みながら、主人公の僧同様に浄化され、最も大切なものに気づかされる。それ故に、悲劇にも似た女の人生の悲しさと、僧と女と白痴との交流の中で描き出される無垢の魂の静謐さ故に、この物語は何度も何度も版を重ねて読み継がれてきたのだろう。

ここまでが数年前はじめて鏡花について書いた文章である、多分に読み苦しいものであったと思うが、何ゆえ鏡花という文学の天才にはじめて対峙した時のものであるが故お許しいただきたい。上記の文章に挙げられた二つの場面はほとんど心理描写が書かれていないのにも関わらず多分に作中人物の心理、感情、思想が飽くまで密やかに語られている。数年前のわたしは断言の助動詞でもってこの文章を書いていたが、もちろん読み方は人それぞれにあるだろうし今のわたしとて同じ見解を示すとは限らない。蓋し、心理描写がその色容によって自らの名を開示する花ならば、行動描写とはその花の散った一欠けらである。私たちは幸いにも花びらの一枚から

かつて咲き誇っていたであろう仮想の花を想像することが出来る。『春琴抄』における春琴の描かれ方、『親和力』におけるオテイリーリエの描かれ方、或いはクライストの諸作品など、枚挙に暇はないが、私たちは時に現実に差し出された花よりも、花のひとつひらから想起させられた架空の花の物語により深く、耳を傾けてしまうことがあるのではないか。

私たちの旅は、いま、

はじまったばかりの

ところなのだ

—わたしにとっての吉行淳之介、

そして彼の小説への招待

とーい

吉行淳之介といえ、夜の世界の酸いも甘いも噛み分け、女にも男にもとにかくモテた文壇随一のダンディ。没後、事実上の妻であった宮城まり子をはじめ、何人もの女性が吉行との秘話を綴り、タモリ、井上陽水といった文化人までもが彼との思い出をエッセイにしたためた。誰もが吉行のやさし

さ、ダンディズムに魅了され、ある時代の文壇の中心であったことは野坂昭如著「文壇」に詳しい。

一方で、ほんとうはむずかしいひと、という評もあり、ごく親しい友人、編集者にはそのような姿も見せたようであるが、生前、没後とも語られることは少なかった。

性を題材に、男女の深淵を描いた吉行淳之介。都会的に洗練されたたずまい、華麗な交流関係、なにより対象の本質を捉える視線はときに同業者から恐れられ、村上春樹は「やはりなんといっても畏れ多い」と氏らしい表現で伝えるが、「驟雨」で第三十一回芥川賞を受賞してから4年、当時34歳の吉行が記した2篇の短編「寝台の船」、「鳥獣虫魚」は文壇随一の色男が50年以上前に書いたとはおもえないほど、みずみずしく、あたたかな潤いに満ち溢れ、読者の胸に迫る。

「寝台の船」の主人公は、女学校の教師をしてかろうじて生計を立てている若い男である。

物語は彼が精根尽きかけていたある日、街の古本屋で一冊の西洋の童話集を求めるところからはじまる。

ある夜、主人公は寢床で何気なく童話集を開き、「寝台の船」という童謡に目をとめる。

「夜つびて闇を漕ぎまわり／いつか明るい朝になりや／馴れたお部屋の棧橋に／寝台の船はもとどおり」

童謡の一節とともに、場面はカーテンの隙間から朝の光がかすかに差し込む、大きな寢台のある部屋へ切り替わる。この部屋で主人公は朝を迎えるが、寢台の船は馴れた部屋の棧

橋になく、隣にはミサコと名乗るひとりの男娼。

主人公は夜の街で酒を飲み、街角で和服の女性に呼び止められ、彼女の部屋に連れられていた。しばらく彼女のからだに男性であることに気づかなかつたが、彼女の「艶やかさすぎる身のこなし」、「こまやかすぎる心づかい」に疑念を抱く。「艶やかすぎる身のこなし」と「こまやかすぎる心づかい」で男性と気づかせるところは吉行の隠れた女性観を見出せなくもないが、いまは「寝台の船」の話である。主人公は喉仏を見て、彼女に男であることを確認する。

それでも、主人公は自らが不能であることをなげく。男娼のミサコも、主人公が不能であることにいらだつ。主人公は男娼のやさしさに応えられないことに、男娼は女性としての魅力がないことに苦悩する。当初、主人公は好奇心で男娼に接していたが、男娼が自らの象徴を捨ててしまいたいといったとき、彼は男娼の中に女を感じ、男娼も彼に“処女”を捧げたひとの面影を見出し、互いにやさしさを注いでいく。

しかし、最後までふたりは通わない。
主人公は夢想する。

「私は、その香水瓶を買っていこう。彼女の笑顔をみて、私の心はやさしさに満ちるだろう。あるいは、その時、彼女を女と見做そうと試みることになるかもしれない。彼女は、その心私に押し当ててくることになるだろう。しかし、依然として、私はそれに応えることはできないだろう。それにもかかわらず、彼女は女になってゆき、私たちの密着した心の中で、彼女の性器だけ、充実し、逞しく変化してゆくだろう。その

時、私に苛立たしい気持ちが起こるかもしれない。私は腕をのばし、香水の瓶を掴み、むなしく聳え立った彼女の男根に、瓶の中の液体を降りそそぐことになるかもしれない。いつまでも、私は降りそそぐだろう。彼女が女になり切った徴であるその力に満ちた男根が、匂い高い靄につつま隠されるまで、降りそそぐだろう」

（吉行淳之介「寝台の船」から引用、要約）

美しく、かなしく、愛に満ちた文章である。

男娼が女性らしくなればなるほど自らの性器は逞しくなっていくペーソス、本質を主人公は受け入れる。

都会的に洗練され、男女の関係の深淵を描いたといわれる吉行の「異形へのやさしさとあこがれ」に自分は惹かれるが、「寝台の船」より、ヶ月後に発表された「鳥獣虫魚」では、より直接的に異形へやさしさを注ぐ。

出版社に勤める主人公。彼には街の風景が石膏色に見えた。人は鳥や獣や虫や魚に見えたが、すぐに彼の目のなかで歪み、よくわからないかたちになっていく。

そんな日々のなか、彼は街でひとりの女性とぶつかり、おどろく。よう子と名乗る似顔絵描きの彼女は確かに人間の形をし、鮮やかな色彩をまとっていたから。

ふたりは会うようになり、やがて、口づけまで進む。ただ、どうしても交われない。彼女が拒絶する。

しかし、不意に彼女は抱いてほしい、といい、彼は下着に

手をかける。

それでも、彼女はからだをすくめ、拒絶する。少しずつ彼女の肌が見えたとき、彼は彼女のからだを歪んでいるのを認め、後悔する。彼女のからだは人間でなくなり、石膏色のかたまりになったと考えたから。

ここで彼は真実を知る。彼女のからだは歪みだしたのでなく、最初から歪んでいたことを。彼女は病を患い、背中の骨を何本か取っていた。

いやになった、と彼女はきく。彼は安心した、といい、彼女の傷跡に唇をあてる。

(吉行淳之介「鳥獣虫魚」から引用、要約)

恋をして、主人公の心は石膏色から鮮やかな色彩に変わっていく。彼は彼女の異形、すなわちコンプレックスに愛おしさを見出していく。

物語の最後の場面、彼は彼女を抱きしめる。

彼女は、彼の腕の中で身をうごかす。そのとき、彼女のからだからふしぎな音が鳴った。胸の骨を数本取っていたため、彼女のからだは急に動かすと肺から音がなるという。

いとしい気持ちでいっぱいになり、彼は傷跡へ口づけする。傷跡のもつと奥にある、もうひとつの傷にも届くように。

彼は彼女の肺の音が高らかに鳴り響くことを夢想する。勝利のラッパのように鳴り響くことを。

(吉行淳之介「鳥獣虫魚」から引用、要約)

「寝台の船」、「鳥獣虫魚」を読むまで、自分は吉行淳之介がこんなにも情熱的で、みずみずしい恋愛を描くひと思わなかった。

日本文学史上、吉行淳之介をはじめ、第三の新人と呼ばれる作家は戦争のなかで青春を生きた。激動する価値観のなか、自らの価値観を見出さなければ自分を見失ったかもしれない。社会を変えられる機会が若者の特権であるのに、彼らは社会に変えられ、社会に合わせざるを得なかった。

吉行は、「性」や「男と女」を描いた作家として知られるが、彼もまた、激動する価値観を生き、見出したものを終生大切にした。

性を主題に男女の関係を描く達人と思えない青春時代の恋愛のような感覚で「寝台の船」、「鳥獣虫魚」を書いた吉行淳之介。第三の新人では遠藤周作は神を、阿川弘之は戦争を青春時代に得たものとして終生主題にしたが、吉行はより始原的な、思春期そのものを描いたように思えてならない。そして、思春期を求め続けたのではないだろうか。だからこそ、吉行は手の届く現実を愛し、コンプレックスにそのひとらしさを感じていたようにおもう。

変わりゆく時代の中で、自分をつなぎとめるものは社会でも国でもなく、手の届く距離のものであったはずである。

吉行淳之介は終生、巨大な作品を描かなかった。それをもって、彼は小説家らしい小説家であったといえなくはないだ

ろうか。

「鳥獣虫魚」はこう締めくくられる。

「私たちの旅は、いま、はじまったばかりのところなのだ」

詩とは作者が懸命に生きたときにかく脂汗、と吉行はいう。
「寝台の船」、「鳥獣虫魚」もまた、吉行の懸命に生きた証であらう。

自分には、このふたつの小説は、吉行淳之介から愛しい人へのラブレターのおもえる。ふたつの作品を読む度、この頃の吉行淳之介は人生最良の恋をしていたのではないかと想像せざるにはいられない。

異形Ⅱコンプレックスに生きた証を見出したひとである。

吉行が鬼籍に入り18年経つ。

馬琴からはじまる文学史

崎本智（6）

小野寺那仁

日居月諸

☺ ではこれから渡部直己著『日本小説技術史』について小野寺さんと日居さんと一緒に話していきたいと思えます。よろしくお願ひします。

小野寺…はい。

日居月諸…お願ひします。

☺ まず、序文で著者本人が言う通り「季節はずれな」文学史をたどる本に過ぎません。

しかし凡百の文学史がまとめられてきた本と、この本の差異たるや何か？ それは言わずもがな、「技術」に固着して行いきながら文学史をたどる新たな試みにおいて他にありません。

小野寺…そうそう序文は大事ですね。

☺ 文学史の本は幾つも出版されていますが、「技術」に着眼をおいて語っている文学史というのとはなかった。しかもこの批評家は「小説から技術を除けばあとは何が残るのか？」と明言するほど、小説と技術の相関関係には非常に注目をして

いる／＼してきた…。そして第一章は何が書かれてあるかと言うと、滝沢馬琴からスタートしている…。まずこの馬琴から文学史をはじめること自体が新鮮であり、驚嘆するべき出発点だと考えます。みなさん、いかがですか？

小野寺…そうですね。私も数々の文学史の本は読んできましたが、言文一致や近代的自我の確立史のようなものが多かった。

日居月諸…おおむね同じですね。

☺ 何をおいても「小説神髓」（逍遙）「浮雲」（四迷）の理論と実践からスタートする文学史がほとんどであったと思います。

日居月諸…西洋文学の輸入からスタートするということですね。

小野寺…ところが、逍遙は馬琴を批判しているつもりが馬琴に依存していた、というようなことが書かれていますね。

☺ 西洋文学の翻訳からスタートして、いかに西洋の文学に日本語で近づいていくか、みたいなせめぎ合いに注目したもの

ばかりだった中で、小野寺さんがおっしゃったとおり、馬琴との連続性からこの章は始まっていますね。渡部さんはまるで「逍遙」（『当世書生氣質』）を読みながらテキストを診断するように、「馬琴の死霊」と称されたものを明示してきますね。

小野寺…馬琴が縦横に使う「偷聞」これがいわずもがなの近代文学らしくない代物。

…『稗史七則』という馬琴が書いた小説の教則本があり、当然『小説神髓』よりも前に世に出されているのですが、そこに載る省筆の技法として、いま小野寺さんが上げられた「偷聞」がありますね。ここからいかに脱出するのかが『小説神髓』の命題でもあったかと思うのですが、まんまとこの『稗史七則』にからめとられてしまい、どうしてもその技法を捨て去ることができない。

…同時代の作家たちがあっさり馬琴の技術に甘んじていく中で、ずっと逍遙だけが逆らいながらも馬琴の翳を背負うことになり、ついには自らの小説作品全般を指して「旧悪全書」（！）とまで言うてしまうということも書かれてありました。ネタバレ全開で話してしまっただけで申し訳ないのですが…

小野寺…いや、いいでしょう。すごくいい。実際みなさんは八犬伝なんて原文で読んだ人いるでしょうか。

…渡部さん自身がそれまで読まれていなくて、この本はそうしたこれまで読んでいなかった文学作品への対応もまたひとつの試みだったと書かれていますね。

小野寺…私はNHKの人形劇「新八犬伝」を見ていたからなんとなく分かりますけど

日居月諸…一応付け加えれば、馬琴の「偷聞」はこれまで研究家に顧みられなかったという背景も紹介していますね。

…そうですね、「偷聞」の話をもっとしましよるか。「偷聞」というのは、先ほど、もご紹介した通り「省筆」の技法なのですが、具体的に説明をすれば…。小説で起きた出来事がある登場人物のためにもう一度語りなおすことは読者が飽きてしまうから、誰かが「偷聞」をしていて、それが広まり、知る筈のなかった情報を関係する登場人物も知っていると一言単純な技法です。

日居月諸…「偷聞」は「立ち聞き」のこと、筆者は「窃聞（たちぎき）」（盗み聞き）とも書いている例を紹介しています。小野寺…これは、他人の会話を第三者が盗み聞きしているシーンを描くことで、知りえない情報を共有し、話のテンポをよくすることで省筆になるということですね。

…そうですね。
小野寺…通俗小説やテレビドラマでは今でもよくやっていますね。

日居月諸…けれど、単純に文章技法にはとどまらないものがあるかと筆者は説く。

…はい。それだけではありませんね。渡部さんが紹介している偷聞は>日居さん

…渡部さんは関数のグラフのように小説と実人生の図を書かれています。

小野寺…この図を載せたいものです。

○ それは「小説にあり、人生にも頻繁に登場する者」、「小説にあり、人生にはあまりでてこないもの」(※1)などパターン分けされたものです。馬琴は「※1」の「小説にはよく登場し、人生にはあまりでてこない」ものを頻繁に描いていると指摘されてあります。その中で「偷聞」と関係するのは「偶会、偶接」と呼ばれる現象です。まさかのタイミングで宿命的に「偷聞」をしてみよう馬琴作品の中の登場人物たち。それとは一線を画そうとしたのが、逍遙でありました。

小野寺…つまり超越的な神様馬琴は仏様なのかそういう信仰のようなものがあるんでしょうね。

○ どういうことですか？ 詳しく……。

小野寺…まさかのタイミングで現れる超人的な人物、この場合は犬士ですが、勧善懲悪のヒーローものには背景に大きな力が存在している。思想と言うか。

○ そうですね。66ページ当たりがそこは詳しいのですが合縁奇縁を繰り返させる作者の全能感。

小野寺…それも渡部さんは言及されています。

○ それゆえに作者は小説世界の神＝覇権者にたりえています。

小野寺…そうそう。

○ 逍遙は、どうあっても自分は俗な神にしか成りえない廉恥をもっていたとも書かれていますね。だから逍遙にはそこま

で「偶会」の要素はないという……。

日居月諸…馬琴にはなぜ「偷聞」が頻出するかということも、作者の全能感から語られていますね。論理の道行きは逆ですが。「偷聞」が読者に作品との距離を取らせない。あたかも作中人物に感情を(強制的に)移入させるような効果がある。それはつまり作者が読者をコントロールするということです。だからこそ、作者の全能感へとつながる。ついでに馬琴の説教グセも指摘した上で、渡部さんはそう暴いてみせます。

小野寺…ええ

日居月諸…ただ、だからといって馬琴が作者の権力をほしいままにしたわけではない。全能感を持つということは常々読者を楽しませなければならぬことでもある。「八犬伝」後半の失速や、馬琴自身の述懐にも渡部さんは触れています。

○ そうですね。馬琴の失速と言うのは気になり、具体的にどう失速しているのかが読みたいと思いました。

日居月諸…そして逍遙にとつては、その全能感は「廉恥」でしかなかった。権力をほしいままにすることなどできなかった。渡部さんは時代背景も加味してその原因を明らかにしています。馬琴の時代には階級や上下関係が明確だったけれど、逍遙の時代に

は(体面上は)平等をモットーとしていた。

小野寺…そうですね。

何だかうつすらと感じられる。けれど「偷聞」を媒介にして書いてしまう。馬琴に逆らいながらも馬琴の技術に回帰してしまう逍遙には、何だか感情移入をしてしまうところがありました。僕たちは三人とも小説を書いています。だから既存の作家の小説技法や作品を否定しなければならぬときがあります。そこに苦慮しながら闘いをいどみ、幾つもの敗北をしてきたことが、何だか逍遙の小説とも絡み、共感しました。

小野寺…自分の中では「偷聞」はありえない手法です(笑)

日居月諸…実際、日本小説史として語られているのだけれど、実作者にとっても大変参考になる物ですね。もともと、ハウツー本ではなく戒めの書としての効果がたぶんにあります。そう、そこは僕も感じた。ハウツー本かと思っただけだけれど、めたら、ごりごりの文学史だった。けれど新鮮な切り口の文学史で予想していた面白さとは別の妙味を感じました。

小野寺…逆にエンタテイメントとしても参考になるのではと思います。

日居月諸…個人的にはうすうす感じ取っていた実作の卑しさを鮮やかに暴いてくれる書でもあった。同時に漠然としたものでしかなかった渡部さん自身への忌避の出でるところもあきらかになった。これは後で語りますが。

日居月諸…「八犬伝」後半の失速は「偷聞」の消去と絡めて語られていますね。

☹️ そうですね。最初の方かな、語られていました。

日居月諸…八犬士がそろって悲願を成就する。しかし、そこに至るまでの全てを知っている人間が出てくることで、それ

まで「偷聞」によって兄弟たちの居所を知っていた八犬士の労苦は水の泡も同然となる。たぶん、これはいわゆる神の視点の導入にもつながるんじゃないかと思います。文学史を語る際には頻出する、自然主義的な三人称の獲得。

☹️ それってどのあたりに書かれていたのかな？ 何へージ？

日居月諸…52ページと53ページにわたって書かれていますね。八犬伝の失速地点はここで渡部さんは自然主義の勃興とはからめて絡めてこないのだけど、一章末尾の方で柳田の文章を引きながら「隔世の感」を語っているからには、やっぱり自然主義も視野に入れているんだと思う。

☹️ ふむふむ。三人称の起源的な話になるのかな……。そうなるなら、ぜひ本格的に文章化してもらいたいな……。日居月諸…最後に、間違いなく柄谷行人の『起源』を意識した「内面」に触れているから、間違いなくそういう道行きになるんだと思います。

☹️ 本書の論旨は「内面」につながる2章への予告はすごく読みたくさせてくれました。

小野寺…私も次章からは内面に言及していくと思いましたが。日居月諸…ただその「内面」への移行は、逍遙が抱いた問題を打ち消してしまうんですね。なかったかのごとく扱ってしまう。書き手の欲望を無視してしまう。

☹️ 欲望はひとつのキータームでしたね。僕はいまいち欲望のあたり、サドとの関係についてはまだうまく理解できていないなあ。

日居月諸…馬琴流の説教臭い俗な神様から、客観的で冷徹な神の視点へと変わっていく。そこには書き手の欲望など初めからないかのごとく（本当はあるのにもかかわらず）。

☹ うむ……。『馬琴の死霊』に捕まっていたのは逍遙だけではなかったですよ。『偷聞』とは別の観点から馬琴の「七則」を反復する作家が紅葉でした。

日居月諸…ああ、そうそう。紅葉も語らないといけない。

小野寺…1章後半部分の「金色夜叉」。

☹ 「偷聞」とは別の技法「昭応」「反対」の法則。

小野寺…これは「照応」「反対」を使っていると

☹ そうですね。あとはそれを「対偶」と表現されていることでもありますね。これは反復的にエピソードなどを似させて、作品の構成力を高めていく技法と言う理解で大丈夫かな。詩のリフレインみたいなものを物語内容レベルですということですよ。細かなエピソードを拾いながらかなり詳しく記述されていますが……。

日居月諸…「照応」は花咲か爺さん、「反対」は猿蟹合戦で説明がつくんじゃないかな。

☹ 巧いたとえだね。その通りの気がするよ。

日居月諸…「照応」は「そのものはおなじけれども、その事はおなじからず」、「反対」は「その人は同じけれども、そのことは同じからず」と説明されています。花咲か爺さんは、確か鬼に踊りをみせて、褒美をもらう爺さんとおぶを貰う爺さんの話でしたね。だから、もの（鬼）は同じだけど、事（結果）は違う。

☹ え、それは「おぶとりじいさん」では？

日居月諸…猿蟹合戦は、猿に柿を投げつけられて蟹が死んでしまう。死んだ蟹の子供は白の手を借りて猿を倒す。人（猿と蟹）は同じだけど、事（結果）は違う。ああ、そうだ。こぶとりじいさんだw

小野寺…ううサルカニ合戦すっかり忘れてる。

日居月諸…花咲か爺さんは犬をむげにした爺さんの話でしたね。

☹ こほれわんわん↓宝↓こほれわんわん（いじわるじいさん）↓化け物・ガラクタ・石ころなど↓いじわるじいさんは犬を殺す↓犬の灰をもらったじいさんが灰を木にまくとなぜか桜が……。というのが花咲か爺さんだったような。昭応だよ。

小野寺…それも忘れてるなあ。

日居月諸…昔話もきちんと分析すれば定型があるのか……まあそれはともかく紅葉の話に戻りましょう。

小野寺…紅葉の金色夜叉は貨幣経済についての話と言うことは分かった、なんだか腑に落ちなかった。

日居月諸…私もちよつとかみようがなかった。欲望の話は身にしみて理解できたのだけど。

小野寺…登場人物は類型化されていて確かに「照応」や「反対」を使っているのだろう。

☹ 僕も一読してみてもよく理解できていません。課題は残りますが、そろそろお開きにしますか。続きはまたどこかでし

たい気もしますが。これを読んでくれた方もぜひ「日本小説技術史」を手にとっていただきたいと思います。

小野寺…「金色夜叉」の宮を蹴り飛ばすシーンは本当に最初のところで、そのあとは高利貸しの話が延々続く。どっちかという後半部分の言及なんです。これは。

小野寺…金色夜叉の部分は通説批判をしているだけのようには思いました。

☹️ 二三角形っていうのがよく理解できていない……もう一度読み直します。

日居月諸…ちよつと一言総評めいたものを。私は渡部さんに漠然とした忌避を抱いていました。優秀な批評家だとは思っていたけど。それが今回、渡部さん自身の手によって明確なものとなりました。渡部さんは書き手の権力に対する嗅覚は極めて鋭いんですね。だから筒井康隆や村上春樹には手厳しい。ただ、渡部さん自身にもそれが当てはまるんじゃないかと思う。ひどく言ってしまうと、書き手の権力を暴く批評家の得意気みたいなものが出てくる。天皇論などを書いて権力に対しては敏感なはずの渡部さんが、自身の権力に関しては極めて鈍感じゃないかと疑ってたんだと、今回気付かされました。

小野寺…なるほど。

☹️ そうかもしれないですね。だけど僕は渡部さんの作品は数作しか読んでいないからちよつと結論は避けたいかな。

小野寺…私も渡部さんを今までかなり長い歳月、遠ざけていましたが(笑)、書き手を暴くというのはいかにも斬新だと思えます

日居月諸…私も渡部さんの著作は数作しか読んでいませんので、ちよつと言いきりすぎかなという気はするんですが。ただ、渡部さんと近いところに、柄谷行人や蓮實重彦、桂秀実のような、自己言及を徹底させている批評家がいるからには、そう思わざるを得ないんです。

☹️ おもしろい着眼点であることは間違いないと思います。別の場所でのそのことについて語りたいですね。

小野寺…おお、そうですね。

日居月諸…こんなところかな。個人的には。ともかく本書をしっかりと読みこもうと思います。図書館だから次読書会があっても参加出来ないんですけどw

☹️ ではこれにて落着いですね。おつかれさまでした。

日居月諸…おつかれさまでした。

システマティックな

小説制作をめざして

R a i n 坊、常磐誠、日居月諸

Rain 坊：こんばんは。

日居月諸：こんばんは。

常磐誠：こんばんは！ それでは始めて行きましようか。

Rain 坊：了解です！

常磐誠：タイトルは、「システマティックな小説制作をめざして」でしたよね。

日居月諸：そうでしたね。

常磐誠：最初のテーマは前回と一緒に大丈夫でしょう。

常磐誠：・まどマギなどのアニメから見る制作について

常磐誠：えーっと、私は一通りしか実は見ていないんですけども、お二人はどうでしょうか？

Rain 坊：うーん、すっかりとは見てないですね。話の流れは知っている程度です。

日居月諸：リアルタイムで放送された分だけですね。つまり全話通して一回みただけ。

常磐誠：私は DVD でした。大体皆様変わらない感じ。いい感じですね。それでその作品を中心にアングラがどうこう

とか語って行く訳です。さて、例えばこの作品を切ろうと思えば、どこまででも切り口はあると思うのですが、この作品は売り上げでヒットチャートに名前を出してきたり、ローンのキャンペーンが組まれるなど、所謂表社会への露出が多い作品かと思えます。以前はおたく向け、というような印象を抱かれることの多かったこういう作品が露出してきたことにたいして何か思うことなどありますか？

日居月諸：思うところと言いますか、エヴァとかけいおん！でもいいんですけど、「オタク向け」と呼ばれる物でも人気になる以上はエンターテイメントとしての要素は多分に含まれているわけです。だから、特に不思議には思わなかったです。「一般」の人たちの琴線に触れさえすれば、なんでも売れるんだな、と思ったくらいです。

常磐誠：ほうほう。琴線に触れるエンタメならば当然に売れる、受ける、ということですね。

ね。ありがとうございます。Rain 坊さんはいかがですか？

Rain 坊：オタク向けという考えもありますが、絵柄や設定的（魔法少女）ということから言えば子供向けもいけたわけですよ。実際、そう思ってアニメを見た人もいるみたいなんです。ただ、話の内容的に小っちゃい子供向けではなかったのがなんともないところ、ちょっと面白い現象だなと思えました。

常磐誠：ありがとうございます。まどマギの絵柄については思い切り狙いがあった、ということもあってそれも切り口の一つですね。シナリオに虚淵玄氏の名前があった時点でモ

ロバレだった、なんていう声もありますがw

でもそれについてはまた後で。アングラ⇨オタク、という感じではない、という感覚をお二方は持つていらっしやるように感じられました。これについてはいかがでしょうか？

日居月諸.. 個人的な感覚としては、アングラ⇨オタクなんです。オタクっていうと、最近ではアニメオタクを意味するようになりましてけど、放送される限りはやっぱ地下に眠っているものじゃない。アングラはもつとエグイもの、っていうイメージがあります。

Rain 坊.. エグイとは？

日居月諸.. なんとというか... エログロナンセンスっていうわかりやすい言葉がありますが、ウケないことも承知の上で作っているものこそアングラ、っていう観念があるんですね。アニメの場合は、世間からは多少ズレてるかもしれないけど、固定客(アニメオタク)相手にはウケると想定してやってる。常磐 誠.. わっかりやすいところっていうと浅野いにお、なんかそうでしょうか？ 私の中のイメージ。

日居月諸.. そのへんが、エグイ、っていう感じでしょうか

Rain 坊.. なるほど。確かにウケは狙っていますね。

常磐 誠.. この固定客は一般とはズレたところにいる、と日居さんは考えている訳ですね？

日居月諸.. そうですね。ただ、さつきも触れたことですけど、エンターテイメントというものでつながっている以上、固定客と一般の隔たりはそんなに深くはないと思います。

常磐 誠.. 今自分が抱いた問題(固定客⇨アングラ、か?)、

疑問が日居さんの発言で解決しました。ありがとうございます。エンタメというところで繋がっているからこそ、固定客

(便宜上オタクとしても良いでしょうか?)にも一般層にも受けて盛り上がりつつ行くことがある。まどマギはその典型。

日居さんの感覚でいくとこんな感じにまとまりますかね。ちなみに日居さん。日居さんなら、でOKなので、固定客に受けて、一般には受けていない。そんなアニメってあったりしますか？ アニメにこだわらず、小説とかでも良いので。

常磐 誠.. (常磐は、文学がまさしくそれに当たっちゃうような気がしてなりません...)

日居月諸.. (そりゃ否めんとところですわ...w)

常磐 誠.. (ちよつと今日はそこも話したいです)

日居月諸.. どうだろうな... 私がアニメを見はじめたのは2、3年前、Youtubeやニコニコ動画が市民権を得たころなので、今まで見てきたもので一般には受けられないものはないと思います(結果は別として)

Rain 坊.. 最近では一般層が固定客化しているような気がします。

常磐 誠.. もう少し詳しく話せますか？

Rain 坊.. ええっと、世代的にアニメを見ていた人たちが大人になっていくというのも理由の一つですが、完全子供向けアニメというものは少なくなり、大人向けが多くなりつつある気がします。比較的、昔よりは漫画やアニメを見やすい環境ができあがりつつあると思います。

常磐 誠.. なるほど！ 下地、環境ができてきているわけす

ね。そうしたら、ちょっとそれに関連して……。

常磐 誠.. 宮崎勤関連の、『ここに「万人の宮崎勤が並んでいます!」』

常磐 誠.. まだ、そういう下地ができる前、私たちが幼かった（というか常磐が生まれた年あたりです）1988、1989年の事件についてはどうでしょうか？ もうすでに風化しているとも言えるのでしょうか。当事、二次元だったり、幼女性愛、グロという文化（？）に対する風当たりは厳しかったでしょうね。この事件を契機に、より偏見は強まったように思います。

常磐 誠.. まさしくエログロナンセンスという言葉にもあるように、アングラがこういう世界を照らす作品だと定義すれば、コミケみたいなカオスな場所、そこで売られるコンテンツやアイテムは、まさしく固定客のみがターゲットだったでしょう。そこまで強烈な印象を一度は持たれてしまったこれらのコンテンツが今また社会において市民権を得てきているのには何か理由があるのでしょうか？

日居月諸.. 非常にざっくりとした意見にはなりますけど、やっぱり偏見がうすれてるだけじゃないのかな、と思いますね。
Rain 坊.. そうですね。

常磐 誠.. ありがとうございます。実はこれ違う見方をする人がいまして、その方は『ネット環境の普及』を理由に挙げていました。

日居月諸.. ああ、なるほど。悪い言い方にはなりますけど、ネットは嫌でも多様な情報に触れられますしね。

常磐 誠.. ざっくりした話になってしまえますが、やはりこの

二つが大きな理由になっていると思います。あとは、まあ精々環境が整ったことにより、理論的な考え方（オタクが危険なだけではなく、行動に移すその人こそが危険）が広まったこともあるかな。でもこれはもう日居さんがおっしゃっている。

Rain 坊.. ローカルだとそもそも放送されなかったりもして、触れ合う機会そのものがなかったりしますよね。

常磐 誠.. Rain 坊さん。えと、触れ合う機会というと、何と触れ合う機会ですかね？

Rain 坊.. アニメです、この場合は。地方だと見る事ができないことがあるんですよ、見たくても。

日居月諸.. うん、おなじく地方出身だからよくわかるw

常磐 誠.. 同じく地方出（て）きて、では触れ合う機会がないことよって何が起ころのでしょうか。

Rain 坊.. 知らない、分からない、理解できないものは基本的に否定的になると思います。

日居月諸.. それこそアングラ化が起こる？

常磐 誠.. Rain 坊さん。まさしく同意見です。人間が忌避反応を起こすのって、実は『よく知らない』だけだったりするんですよね。だからこそ、ネット環境普及（DVDとかが安価で手に入りやすい流れの構築）↓知ることができる。↓良さがわかる。という流れで今の世の中がきているような気がします。

日居月諸.. なるほど。

常磐 誠.. 日居さん。それもその通りだと思います。広まって

きたとはいえ、まだまだ嫌悪感、忌避反応はあります。そして周囲（一般層）に『知りたい』という気持ちを起こすだけのニーズが起こらなければ、必然的に作品やその周囲は引き籠っていく（＝アングラ化）方向に流れてしまいますよね。日居月諸…世間に対する反発を力にしてさらに籠っていく、という場合もあるかもしれません。嫌悪されて否定されると、自己防衛としてどうせ俺らはアングラよ、というような居直りをするところがある。そして世間に対する訴求を忘れて…といった具合に。

常磐 誠…なるほどですね。ありがとうございます。では、話をそろそろ小説にもっていきましょう。私たちのメインフィールド、土俵です。

常磐 誠…小説とアニメの違い。

常磐 誠…単純にここを語るのも良いかと思えます。ただし、これだけだと内容が広く浅くになっちゃうので、『集団作業か、個人作業か』という点に絞って話していきましょう。かなり上の方になります。マジギは作品のCの段階で、イラストレーター、シナリオライター、それとあともう一人の名前がかなり目立つようにデカデカと登場します。異空間の表現は劇団イヌカレー。ここも有名ですね。そして、この段階でもうこの作品は集団の作品、ということになります。一方、小説は常に内向的に語ることになります。内に、内に、内に。まるで孤独な闘い。根本的に、これで良いのか？という提起から。お二方もどうぞお語りください。

日居月諸…議題をハナからひっくり返すようで悪いんですけど

ど、私は小説は一人で書くものではない、と考えてるんです。もちろん物理的な共同作業とか、そういう意味ではなくて、精神的な意味で。

常磐 誠…めっちゃ面白い意見でましたね。ありがとうございます。少しだけ具体的に語っていただけますか？

日居月諸…だから、内向的な闘い、という前提にはいまいちピンとこないんですね。語られるところはわかるけど、自分には引きつけられない。

Radio 坊…個人『的』な作業だとは思いますが、完全に個人だけとは思いません。作品を書くにあたって取材をしたり、資料を読んだり、色々したり等々。刺激を外部から得ていると思います。完全に自分だけの力で作品を作っていると思ってる人の作品は自分勝手、自己満足なものではないかなと思います。

日居月諸…そう、刺激を外部から受けている。

Radio 坊…けど、小説は刺激を受けてあくまで個人で書くものだからいいですが（それはそれで苦労はもちろんありますが）、ほんとの集団作業のアニメは大変そうだと思います。様々な人との意思疎通とか。

常磐 誠…皆で同じような絵を描き続けるとか常磐は発狂します。

日居月諸…そういう点では結構アニメの方が集中的なのかもしれないですね。実は小説の方が拡散的なのかもしれない。アニメの場合は皆で同じヴィジョンをみなければならぬわけです。多少の意見の相違はあっても。ただ、小説家は自分

の中に映るヴィジョンさえみればいい。もちろん皆さん経験があるからわかると思いますが、このヴィジョンを捉えるのが中々難しい。あっちこっちに動いたり、映る姿が変わったりする。それをどうにか束ねようとする作家もいるでしょうが、大抵は色々な面相を並べている小説のほうが多いんじゃないかと思います。

常磐 誠.. 一つの形を作り上げる上で、の違いですね。集中的、を収束的、と言い換えても良いですか？

日居月諸.. ですね。>収束的 それから、しちめんどくさい話にはなりませんけど、自分というの「自らの領分」と書くからには、社会や世界にちらばっている要素をかき集めた末に成り立っている者だったりする。要するに、他人の上に自分が成り立っている。そうしてみると、外面的には自分と向き合う作業が、実は他人と向き合う作業だったりするかもしれない。合おう作業が、実は他人と向き合う作業だったりするかもしれない。小説の可能性もそこから押し広げられるんじゃないかな、とは思っています。

常磐 誠.. 心理学や哲学なんかでも、自分を認知する上で（するのは自分でも）、やっぱり相手がいらないと理解できない自分はあると教わります。まさに誰かがいて、自分がいる。何かがあつて、自分がいるんですよ。けれども常磐はどのようにして『そこから押し広げられる』かがわかりません。日居さん、語れますか？

日居月諸.. 自分と向き合うことは他人と向き合うこと、それが第一前提だとします。他人というのにも色々あります。身近な人々、知らない人々、もつと言え、死者という過去

の人々も含まれる

常磐 誠.. はい。

日居月諸.. 自分のことは知っていて当然なわけです。ただ、知っていて当然だとおもっていた者と向き合ってみると、自分を支えている者（他人）につながっていった、そこを押し進めていくと、なぜか自分とは似ても似つかないものが浮かび上がってくる、そんな瞬間がやってくるんじゃないかと考えているんです。知っていることから、知らなかったはずのことへとつながっていく。「自らの領分」を保ったまま、自らの領分じゃないところへ知らず知らずうつつっていく、といった感じでしょうか。一見内向的な作業である小説のイメージを払拭できる可能性があるとしたら、実はそこなんじゃないかと思うんです。内向が、いつしか外向的なものへ変わっていく、といったような。

常磐 誠.. 自分から始まり、自分じゃないところにいつの間にか移っている。

日居月諸.. うんうん。

常磐 誠.. 内へのエネルギーは、その時点で外に向かって行く。わかりやすいです。ありがとうございます。日居さん。ありがとうございます。Rain 坊.. 実際にはどうすればいいんですかね？

常磐 誠.. それがまさしく最後のテーマ！

常磐 誠.. システムティックな小説制作をめざして！

日居月諸.. 行動面か・・・。

Rain 坊.. 少し思ったんですが二次創作って結構それっぽく

ないですか？

Rain 坊.. 同じ世界観を共有しつつ、個人的なさぎょうもありつつ。ちがうかな？

日居月諸.. ふむふむ。

常磐 誠.. ー。一面としてあるとは思うのです。ただ、それを Twitter 文芸部の皆に結論として出した時に、納得できるだろうか？ と考えると、何かズレている気がしちゃいます。Rain 坊.. 単に、作業を分担すればいいってもんでもないですよね.....

常磐 誠.. それはまさしく最初に常磐が思っていたことですね。

日居月諸.. でもどうか、二次創作は他人↓自分というフィードバックだと思います。他人の作品から、自分を発見していく。読書にも関係することですが。

常磐 誠.. システムティックな体系的、系統的、という意味ですよね。そこに拘りすぎる必要はないですよ。

日居月諸.. 技術論として、具体的に、といったところでしようかね。

Rain 坊.. リレー小説もちよつと違うのかな。

常磐 誠.. あくまで、今主題に置いているのは、...: 日居さんに先越されました。内向的なエネルギーを外側に、というのを実際にどういう風に行うか、です。かつて、実現はしませんでした。リレー小説は文芸部内で話題に上りましたよー。

Rain 坊.. 書いた作品を発表することそれ自体が内向的なエ

ネルギーを外側につけて気がしてきました...:

日居月諸.. うん、同じくそう思わざるを得ないんです。

常磐 誠.. じゃあ、どう書きましようか？確かに、その通りだと思います。もつと具体的にいい形が浮かべばそれをまた第二回として起こしてその場で発表しても良いですよ。

日居月諸.. 非常に身も蓋もない言い方をしますが、私は何も決めないで書くということをよくやります。プロットも登場人物もなにもなく。何か書きたいシーンがぱつと浮んだら、そこから書きちゃう。行くあてもなく

常磐 誠.. ただ、一先ず私達は（結構日居さんの言葉に頼り過ぎてるくらいはありますが）、一つの、『あ、良さそうだな』という共通認識を得ているので、もつとそこに拘って書いてみるのも良いのでは？

常磐 誠.. （日居さん常磐とナカマ）

常磐 誠.. （というか私はエンタメ畑で、キャラが結構勝手に話を進めてくれたりもするんですよー。）

日居月諸.. （対談の企画意図自体をうっちゃる言い方をしちゃうと、方法とか考えないですよ、いつもw手の内に何にもない状態で始めることが多い、だからこういう場で語れることがなにもなかったりするw）

日居月諸.. （ただひたすら、こういうところにいけばいいな、っていう精神的なものだけをあてにして書いてる）

常磐 誠.. （見事なうっちゃり！でもいい感じだと思います
≪後半についても本当に常磐とナカマ (www) ≫

Rain 坊.. なら、外側への発信の方法は変えずに内側のエネル

ギーの質を変えてみることを検討してみてもいいですか？

常磐 誠… うんうん。実際に縛りとして有形化させても良いですし、常磐としては、常磐自身を考えてみたり、登場人物（主人公とか）について突き詰めて考えてみる。その中で見えてきたものを表現できるように頑張る、みたいな無形な努力でもいいと思うのです。

日居月諸… 登場人物について一生懸命考えている内に、いままでは書けなかったものが出てくるということはあると思いますね。登場人物に作者がなりきっちゃう。そうしたら日居さんはそれを外に向けて宣言してみたりするのはどうでしょうかね？

日居月諸… と、いうと？>常磐さん
日居月諸… まあ、さっき話したことですけど、知らないはずの人物を書いているうちに、自分の知らない面が見えてくる、ということはあると思います。小説を書いている内に、自分がしをしている

常磐 誠… 実際にするかどうかは別として、ですが、どのような作品が書きたいのか、という書き手としてのスタンスを日居さんは表明されていないような気がするのです、それをどこかに明記する。自分の机とかでも良いですし、それこそ Twitter のプロフィールでも。どこでも良いので。できれば他人から見える方が宣言としては良いんですけど、それは好き好きで。日居月諸… なるほど。そうか、+1.1.文に入ってから小説書いてないものな…w

常磐 誠… つまり、自分を見つめて作品を書く、という方法も

あれば、縛りを決めて書くとかの特殊な環境下で書いたものを発表する、という感覚を探すのも良いのではないのでしょうか？

日居月諸… うんうん。

常磐 誠… 青い『自分探し』と言われればそれまでかもしれないが、ここ、一応若手の集まりなので（笑）

これ、一つの結論にできそうですが、いかがでしょうか？
日居月諸… 特に異存はないです。

常磐 誠… 同じく。

常磐 誠… では、具体的な方法論はまた各自で考えたり、気づいたりしていきながら、共有

して行きましょう！本当に有意義でした。そろそろ御開きでしようか。それでは、常磐 坊

さん、日居さん、本日は本当に有意義な時間をありがとうございました
ございました！

常磐 坊… お疲れ様でした。緊急参戦の日居さんには感謝感謝です。

常磐 誠… 本当に感謝であります。

日居月諸… いえいえ。好きでやっていることですから。お疲れさまでした。

Rain 坊… おつかさまでした。

やるせない

R a i n 坊

一人の小説家がいる。彼が書く作品は皆口をそろえてすばらしいと賛辞をおくる。個人的な好き嫌いで否定的な言葉があったとしてもそれはそれ。そのような人達であっても彼の作品の出来に対する評価は正當なものだ。嫉妬といった本来作品そのものの評価に関係はしないどうでもいい感情は淘汰されてしまう。しかし世の中には賛辞が多ければ多いほど受け入れられない人がいる。しかもそう言う人に限って内容には触れていない、もしくは理解しようとしていない人が多い。大多数に良しとされているものを陥れることで自分は他の人とは違うと少しばかりの優越感に浸ろうと躍起になっている。くだらない。だからこそ彼の、本當の作品を目の当たりにするとひねくれた癖はどこかへ出かけてしまう。具体的に言えば一ページ目の最初の数行を読んだだけでどうでもよくなってしまうのだ。純粋な、あくまで小説としてだけのクオリティだけを読者に感じさせる力を彼の作品は持っている。絶対的な強制力とでもいうべき力が彼の文章には生じてしまう。この境地までくると一つの芸術品としての価値を見出す者が出てくる。実際、彼の書く作品書く作品高値で取引されてしまう。本としては法外な値段がついてしまう。彼の全作品の原稿を集めようとする国が傾くとまで言われるほどだ。また、彼の小説が他人に与える影響も計り知れない。一度読む

と惹きこまれ、二度読めば己を狂わされ、三度読めば新刊を待ちきれず発狂して死んでしまう。なんてことまで言われている。真偽はともかくそれだけ読者に影響を及ぼす。悪いかどうかは関係がなく無作為に影響をまき散らす。これは作る側、つまり作家たちにも言えることだ。同じ道を歩む者たちは己の無力さを痛感させられ筆を折る。たとえ折らずとも自然と書くものすべて彼のものと似通った書き方になってしまう。それは作家としての『死』を意味している、と私は考える。作家として殺されてしまう。何もかもが歪み、狂わされてしまう。自己を保てなくなってしまう。分からなくなってしまう。自分の言葉を、思考を書いているつもりでも強制力が働いてしまう。どうにもならない。どうしようもない。諦めることしかできない。それほどすばらしい。しかし。そんなにもすばらしい彼の小説に足りないものがある。これまた皆口をそろえて言う。それは『死』。彼の作品は死人がいけないということだ。これだけ聞くと別段何も問題がないように思ってしまうが、残念ながら彼の小説のジャンルはミステリー。しかも日々の喧騒で見過ごしてしまいがちな謎を解き明かす日常ミステリーではなく必ず死人が出て犯人がいる本格ミステリー。さらに言うとな本格ミステリーなのかでも突出したグロテスクな死の描写があるのが彼の小説だ。

いやこれは希望的観測だ。本来なら突出したグロテスクな死の描写がないといけない小説なのだ。だけど死人がいない。死人が出ないわけではない。死人がいない。そのような誤解まで及びかねないほど彼の作品の『死』は生き生きとしていない。先ほどから書いている通り、彼の作品はすばらしさに満ちているが唯一と言っているほど弱い部分が死人の描写だ。読者に、作家に死を与える彼の作品が死を感じさせないというのは笑えない冗談だ。具体的に書いていても抽象的に書いても直接に書いても遠回しに書いても意味がない。薄っぺらいのだ。そこが重厚で肉厚な文に紛れて出てくるので違和感があるのだ。疑問が出てくるのだ。本当にこれは死んでいるのかと。批評家たちに言わせると彼が死というものを本当の意味で理解していないから起きる矛盾だという。私もそう思う。他の誰よりも彼に近いことを自負している私には何よりもそのことが分かってしまう。だから私が彼に『死』を教えてあげようと思う。いや、教えるじゃない。経験させようと思う。最初で最後の経験を体感させてあげるのが私の最期の役目だ。使命と言い換えてもいい。これは彼に狂わされた一人として、彼に誰よりも近く誰よりも尊び誰よりも愛し、そして誰よりも彼を憎んでいる私にしかできないことだから。元々私も小説家だった。いや、正しく言うなら私は小説家ではない。どうしてこんなややこしいことを言っているのかというとそれは私の小説家としてのスタイルが原因だ。私の小説家としてのスタイルは作家としての自分を作るからだ。キャラを作り、演じることで創作意欲を高めたのだ。普段の

臆病な私なら決して言えないであろう己の恥部であったり世間に対する不平不満、恨みつらみを小説家としての私になりきること容易く書いていくことができた。彼は私とは違っておおっぴらな人物であることを設定としていたので己の恥部を登場人物に背負わせたり時事的な問題発言であろうと書いていった。そうすることで私だけではない小説家が誕生した。つまりは彼だ。幸か不幸か彼の作風が受け入れられ、処女作である小説はそれなりに話題作として取り上げられた。そこで彼は味をしめたのだろう。徐々に書く内容に私にはない彼独自の個性とでもいうべきものが際立つようになった。それは私にとっても意外な結果でもあり嬉しい誤算だった。ファンは増えていき、売れっ子作家としての道を歩むことができたからだ。本来は自分の鬱憤を吐き出しているだけのものではあるのだが、それが万人に受け入れられる。こんな嬉しいことはない。これはつまり私が作った小説家としての彼、つまり彼というキャラが世間に受け入れられたことに等しいから。どの作品の登場人物が受け入れられることよりも喜ばしいことだった。このまま彼が彼のまま世間に受け入れ続けることを願った。だけどそれがそもその間違いだ。世間は一度認識したキャラをなかなか手放そうとしない。固定概念にとらわれて上塗り作業だけを行う。ようするに彼は私の手を完全に離れ世間の手に納まってしまった。どうにもできずにうだうだやっているとどんどん彼は私から離れていった。今ではもう彼という確固たる個人がいることになっている。どんなに彼のキャラを変えようとしても世間が許さな

い。私自身が彼に変わって作品を書いても彼っぽくないとバツシングを受ける。彼が世間に彼を受け入れさせるのではなく世間が彼という個人を確定させてしまった。彼は世間が求める形に集約してしまった。私イコール彼という図式はこうして成り立たなくなってしまう。そうなるくと小説家ではない私はどうすればいいのかわからなくなってくる。存在意義をなくしてしまう。彼がいたことで自分の価値を見出すことができていくことに気付いてしまったからだ。それと同時に彼が私の手から離れてしまったせいで私としての大部分は彼に狂わされてしまったことにも気付いた。彼以外のキヤラで書こうとしても彼の文癖になってしまい、最終的に彼の作品の疑似品となってしまう。だから私は私として書くことを諦めてしまった。

そのうち彼は私以外にも多大な影響を与えるようになってしまった。それがとても、むかつく。ああ、言葉が荒くなってしまった。駄目だ駄目だ、落ち着こう。感情を表立って書くななんてまるで彼ではないか。落ち着け。まあとにかく、これは嫉妬だ。理解はしている。納得はしていないが理解はしている。だから理不尽な感情だとは思っていても物理的に彼をぶん殴ってやりたかった。それが無理なこととはわかってる。だからこそ私はこうして一度諦めた文章で彼を殺すことにした。彼が苦手としている死を俺が――私が彼に与えようと思ったのだ。いい皮肉だろ？　しかし殺すにはまず私としての文を書かないといけなかった。だがそうするとどうしても彼に、彼の文になってしまう。そうなるは己で己を殺

させることになってしまう。わざわざ彼自身の手によって死を気付かせることなんてことは私には我慢ならない。だから私は稚拙な文章で彼にならないよう細心の注意を払い、こうして書いている。たとえ彼としての部分が出たとしてもこれは彼が苦手としている死を書いているものだから影響は普段よりも少ないはずだ。ましてミステリーという枠でも縛られている彼には介入することはできないはずだ。限りなく私としての文であるはずだ。そうでなければ意味がない。そうでなければこれが遺書としての意味をなさない。そうだ。これは彼を殺すにあたって私の手による遺書なのだ。そして殺害予告でもある。こうして書き記しておくことで私の彼、その本当の意味も価値もわかっていない世間の馬鹿野郎どもに彼が終わったことを伝えたいのだ。終わりにさせるのだ。私の手によつて。正直ここまで書いていてもこれは彼が書いてい

るのではないかと危惧している。原稿用紙を握りつぶしたくなる。だがそんなことを続けていてはいつになっても彼を殺すことはできない。彼を殺せない。私が死ねない。だから不満があつたとしても、不安があつたとしてもこのままの状態にしておこうと思う。手も加える気はない。いつ彼がこの文を狂わせるか分からないから。一度言葉にしてしまうと不安というものはなかなかぬぐえない。自分が失敗してしまうのではないかと、彼は私の納得のいかない作品を出し続けているのではないかと怖くなってくる。ああ、このままでは潰れてしまいそうだ。己の決意が逸れてしまいそうだ。だからここで筆を止めよう。終わりにしよう。これで私の気持ちを書

いたと満足したことにしよう。最期の締め切りだ。筆を置いたら私は縄に手をかけることになるだろう。誰が最初に私の覚悟の形を見つけるのかは分からないが、それよりもなによりもこの遺書が遺書として機能することを切に願う。それではさようなら。

私

「さあ皆さん、どうでしたでしょうか。これだけの拍手を聞くに満足していただけたようです。さて、ここでは無粋ですのであえて名前は伏せさせてもらいますが、これは先日亡くなったご高名な小説家の最後の『作品』です。最後に身体を張って新しい作品を書いてくれました。作家の鏡です！彼に賛辞の拍手を送りましょう。さて、この作品は何と言っても彼の苦手としていた死を描いている。これはすばらしいの一言に尽きるでしょう！ さあ、それでは皆さんお待ちかね、今からこの作品を競にかけます。誰がこの作品「遺書」を手に入れるのでしょうか。一億からスタートとさせていただきます。それではスタート！ おっと、いきなり三億でした！ さらに額がはね上がって五億でした。さらに上の五億五千。八億五千。なんと十億でした！。十二億、十二億八千、十三億。まだまだ額は上がっていきます。出た、二十億！ 一体誰が彼の作品を手に入れるのか、額はまだまだ上がっていきます——」

大喝采

夏の終わりに

緑川

暗い場所で僕は手足も羽も、触角も失っていた。

汚れた空気の中で粘液にまみれ、芋虫のような体を自在に蠕動させ、頑丈な口器で何かを噛みしめ呑み込んでいた。これが本当に僕なのか？ だけど、そんな状態の自分に、なぜか満ち足りたものを感じている。次第に周囲が明るくなる——だけど、白々と輪郭のぼやけた物の重なりが見えてくるだけで、ここがどこかは分からない。

いつもの夢か、と僕は浅い眠りの中で思う。

ふいに周囲が真っ白に輝く。次の瞬間、僕は軽く呻いて前肢をかざす。周囲では、朝の陽光が燦々と降り注いでいて、鮮やかな緑の葉群れが目にも痛いほど美しい。

前肢をかざしたまま伸びをすると、爪先が暖かい樹皮に触れる。背中を覆う四枚の羽を軽くゆすって、ゆっくりと空気の中に差し出す。

いつもの朝が来た。

僕は、起こした上体をさらに後ろに反らせて自分の羽を確認する。透き通るような朱色の筋が入り組んでいて、夜露のせいでしたっけとした質感を帯びている。すぼめていた房状の触角を開いて青い空の匂いを嗅ぎ、大気の、ゆるやかな動きの中の何かを探す。

そして僕は後肢で立ち上がる。——たしかに僕は洞窟のよ

うな暗い場所で何かを食っていた。食っている？ 食べるって、そもそもどういうことだ？

いつものように深い空めがけて、僕は身を投げる。

自分の体の重みを忘れる。

飛び立つときのこの瞬間が僕は好きだ。僕は空気に身をゆだね、空気の動きをつかむまでそのまま漂う。眼下の風景が無為に流れる。またもう一度、ほんの一瞬、ついさっきまで見ていた夢が頭をよぎる。僕は、口器をせわしく動かして、体内に何かを取り込んでいる。おそらく僕は、生まれてこの方、毎夜のようにそんな夢を見ている。

——どうということだ？

そして今日も、僕は夢の詳しい再現を試みてはみたものの、すぐに投げ出す。いつものことで、すでにそれは、遠い昔の漠然とした印象でしかない。

数秒の後、初めて僕は羽を振るわせ、向かうべき方向を探す。

僕はしばらくの間、気ままに飛び回る。僕たちの羽の構造は、他の種と比べてどうやら華奢らしい。直線的な力強い動きは期待できない。遠出も、試みたことはないが難しいと思う。だけど、目的を果たすには十分であり、ほどなく僕は、ごく近くで、強い匂いのようなものが僕を呼び寄せているこ

とに気付く。

仲間が一匹、僕に近付いてくる。彼は僕に向かって腹部の体節を振動させ、空中で出合いの挨拶をする。

彼が僕の背後に急接近する。僕は、ニアミスギリギリのところで振り向きざま、彼のアタックを避ける。彼もまた、衝突直前に身を翻し、より高いところへ舞い上がる。すぐさま僕も彼を追いかけ上昇する。どこまでも青くて深い空に落ちていくような錯覚を味わう。そして、二匹がほぼ同じ高さになったところで、顔を直接見合わせる。そんなときはいつも、意識する、しないにせよ、互いの触角が軽く擦り合わされる。浅い快感を僕たちは味わう。

さらに上昇しながら、二度、三度と、僕たちは空中で旋回する。

僕たちは、空中で出会ったときは、仲間であれば誰とでも、いつでも同じことをする。

それは微かに甘い。匂い、というほど確かなものではないけど、互いの体の細かな鱗粉がその場で散って、僕たちを包み込む感触は、しいてたとえるなら甘いと言いたいようななものだ。

空気は暖かく湿っていて、透明な日の光は物の形をくつきりと浮かび上がらせる。僕たちの羽は、ほんの少し角度を変えらるたびに、小さな輝きを生み出しては消す。僕たちのらせん状のダンスから、ちらちらと細かな乱反射が起きる。周囲にはすでにたくさん仲間が集まってきている。

やがて、僕と彼は何事もなかったかのように、すんなりと

遠ざかってしまう。もちろん、他の仲間と踊るためだ。僕たちは皆、出会う誰彼おかまいなしにダンスを仕掛け、辺り一帯が無言のまま激しく熱を帯びる。

そんな最中、再び言いようのない感情が僕を襲う。うしろめたさ、あるいは罪悪感、そんな言葉が思い浮かぶ。だけど、それはすぐに消えてしまう。さらに僕は激しく踊り狂う。空気が存在しないと思われた場所に、ふいに虹色の油を流したような輝きが生まれ、そして消える。

上空では、巨大な白い雲が音も立てずに流れている。

彼女たちもだいぶ集まってきている——僕は気付く。触角が紐のように細く、胴体は逆に僕たちよりも太く短い彼女たちは、ダンスが佳境に入る時分には、必ず近くに来ている。決して、僕たちには加わろうとしない。それでいて、いつまでも飽きることなく、踊っている僕たちを見つめている。

初めの頃、そんな彼女たちに苛々させられたものだった。なぜだか、もどかしくもあった。だけど、目を繰り返すにつれ、僕の彼女たちに対する気分は変わった。僕たちが踊っているときには、彼女たちはそばにいなければならない。僕たちのダンスは、彼女たちに見られることによって、より熱を帯びるから。ときには、やはり軽い疎ましさを覚えることもあるが、誇らしい気分がそれを帳消しにしてくれる。

現に今、僕は彼女たち、いや、そのうちの特定の一匹を望んでいる。

昨日も一昨日も、その前の日も、踊っている最中になぜか何度も目が合う彼女。

その辺りに隠れているのかもしれない、と僕は思う。きつと、そうだ。根拠もなく確信する。こんなことを考え始めるのは、そろそろ時間が来たということにも、否応なく気付かされる。

空気がさらに温まってきた。きつい日差しが表皮をじりじりと焼いている。仲間たちが、一匹、また一匹とダンスの輪から抜け出し始める。風のない中、風に吹き散らされる花びらのように、次第に集団がばらけ始める。

一枚は真っ直ぐに、丈高い夏の叢の中に呑み込まれていく。また一枚は、手近な木の枝に取り付き、そのまま動きを止めてしまうため、樹皮と見分けがつかなくなってしまう。

また、三、四枚は、どれが誰だか目で追うのさえ難しい。行き交い絡まり合っているのを見守っているうちに、次第に小さくなり、ひとつの光の粒になってどこかへ消えてしまう。

僕もまた、呼吸を整えながら、羽の動きを最小限に抑え、空気の動きを読みながら、――彼女を探す。湿度の高い空気はゆっくり、本当にゆっくりと上に向かっていく。その厚みに体を預けて、――僕は急いではいない。

なぜって、そこには理由なんてないから。探して、見つけて、それでどうしようなんて考えていない。あえて理由らしきことを言えば、それは、――食べることに似ているのかも。しれない。

ようやく気に入った梢の葉陰に身を潜ませて、僕は枝のくぼみの湿り気に口器を寄せる。小さく尖った口器の奥の、柔らかい舌を伸ばして湿気を吸い取る。朝に、草に溜まった露

に舌先を浸すこともある。

それ以上を僕は求めていない。

種によつては、食べることが必要らしい。だけど僕たちは何も食べない。こんな貧弱な口器では何かを咀嚼するなんて難しいし、そもそも呑み込むというのが、どうということなのか分からない。

舌先から目に見えない隙間を伝って、体内に、ほのかに水分が浸み込む。揺れる葉に強い陽光が通過して、僕の白い体が薄い緑に染まっている。僕は気門を開き、よく暖められた湿っぽい空気を吸い込み、吐き出す。

そのまま夕方まで、僕は微睡むことになる。

いつもならば、落日直前に僕たちのダンスが再開される。朝の部よりも短い時間ではあるけども、ひとしきり湧き立つように踊った後、今度は一晩中体を休めて、朝を迎える。また飛び立つ。夏の日の光を浴びながら乱舞する。

夏の日を、いつ果てるともなく僕たちは繰り返す。

葉陰の微睡の中でさえ、僕が夢想するのは夏の日差しと湿った微風、どこまでも続く青い空、踊る僕たちの近くに集っている彼女たち。そして彼女。

――いつからいるの？ ふと気付いて、僕は半ば微睡んだまま、彼女に訊ねる。彼女はいつの間にか、触角を伸ばせば触れるほど近くで羽を休めている。

返事の代わりに、彼女はさらに、その重たげな体を寄せて

くる。

僕は応じる。

僕は、誰に習ったわけでもないのに、なぜだろう？ 自然に、ほとんど自分の意志ではないくらいの自然さで、彼女の頭胸部の付け根を口器で挟み込む。

僕の腹部が自分でも驚くほど強く反り返る。そして――、その先から何かが顔を覗かせ、彼女の腹部にふれ、なでまわし、やがて探り当てる。彼女もまた然るべき姿勢で――夢ではない。

僕と彼女は初めての交尾をする。

少しずつ日は短くなった。

空の色も薄くなり、それにつれて僕たちのダンスの輪は小さく、動きも緩慢になる。仲間の誰かが一瞬見せた派手な動きも、どことなく投げやりで、すぐに失速する。もう皆、ただ習慣に引きずられるまま踊りの輪に加わっている。

僕たちが、今の姿でこの世に生を受けて、どれくらいの日と夜を過ごしたのか分からない。だけど、もうたつぷりと夏を味わった。

そして今、夏の終わりが来つつある。

仲間の数もずいぶん少なくなった。いや、仲間たちだけではない。およそ羽を持ち、飛び交う様々な種がのきなみその数を減らし、すでに、すっかり姿を消してしまった者たちもいる。

以前より澄んだ空気が、しかし外皮にひんやりと冷たい。僕は彼女と二匹だけで木のうろに籠ることが増えた。ここは、彼女が見つけてきた場所だ。

皆も、こんなふうには、どこかに潜んでいるのかもしれない。あるいは、その生をひっそりと終えたのか。ともあれ、夏の終わりが来つつある。それでいいのだと思う。

僕の、もともと華奢な羽は擦り切れ、あるいは毛羽立ってしまったって、ところどころ穴さえ空いている。

だけど不自由はしていない。

昨日から僕はもうダンスには行っていない。薄暗くて濁った空気の中で、彼女と寄り添って、ただじっとしている。ときに気まぐれに、かさかさした六本の脚と、擦れて汚れてしまった羽を、互いに絡ませ合ったりして、それでなぜか僕は満足している。

どういうわけだか、ここが懐かしい。

僕は湿った薄暗がりの中、彼女のシルエットに目を向ける。いつからだろう。彼女の腹部は異様に膨らんでいる。ぶよぶよとした感じではなくて、健康的に張りつめている。それでいて、手足は以前よりやせ細っている。まるで、自分の体を食べながら腹部だけが肥え太っている感じだ。

――食べる？

いや、食べるってそういうことなのか、どうなのか。

ただ、それはともあれ、そんな彼女を美しいと思う。あの夏の日差しの下でならともかく、今ここで、樹木の裂け目の奥の、世界で二匹だけの場所では、まるで女王のようにとこ

ろを得ている。

僕の視線に気付いたのか、彼女が身を揺すって軽く身構え、僕を見る。「食べるってこと……」と、ふいに彼女が話し始める。「私、昔は知っていたんだと思う。」

僕は思わず応える。

「ちやうど僕も同じことを考えてた。前からなんとなく思ってたんだけど、あの感覚はなんだろう？ って」

「露を舐めることとは違って、もちろん、」彼女の体がまどうように動き、静止する。

「うん。交尾とも違う」僕は続ける。「だけど、なぜだろう？ ここで、初めてそのことを思い出すなんて」

「たぶんね、これ」彼女は中脚の先で自分の腹部を示す。「聞こえるかな」

促されるまま、僕は後肢の付け根にある耳を、彼女の腹部にあててみる。瞬時に全身がざわめく。僕の体の中心から重いうねりが起こって体内を波のように伝わり、ゆっくりと表皮から外へ抜けていく。

彼女の腹部から伝わる微細な音、彼女自身の生命とは異質の音を聞きながら、僕の目には、小さな無数の粒がぎっしりと詰まっている様子が浮かぶ。そして僕には、——いや、僕にも分かった。その小さな粒の一つひとつの中で、たしかに一つひとつの命が、今にも動き出そうと身構えている。

——闇の中、僕は一匹ではなかった。姿は見えないけど、無

数の兄弟姉妹たちが周囲でざわざわと蠢いているのが分かる。手足のない、目も持たない彼ら、彼女らと僕——、ぶつぶつと棘のある小さな肉の塊がその体を蠕動させて、大きな口器を動かしては何かを咀嚼している。濃厚な匂い。そして、連続して体をゆさぶる快感。

これもまた、熱狂。最近まで僕たちの行っていたダンスとは異なるけど、僕たち、いや無数の僕は、何も見ず、何も考えないまま、衝動に身を委ねつつ何かにむしゃぶりついている。

しかし何を？

いや、もう分かった。僕には見える。彼女と僕はこの仄暗いうろの中で寄り添っている。とつくに命は抜け落ちていく。時が止まったような静けさのうちに、微動だにしない僕と彼女を邪魔するものは何もない。

しばしの時が経ち、彼女の腹部を食い破り、黒い小さな肉の塊が顔を覗かせる。それは次から次へと続き、僕の体にもその口器でしがみつき、食らいつく。僕たちは密集し、その手足を持たない体をうねうねとくねらせながら、粘液にまみれ、何かにむしゃぶりついている。何かを咀嚼し嚥下する音だけが暗闇の中に響いている。僕たちを邪魔するものは何もない。

僕たちはこんなふうにして生の営みを始め、こんなふうにして、一生を終える。それは、いつ果てるともなく続く。ちやうど、毎日が繰り返されるように、命は無限に繰り返される。遠い記憶がさざ波のように揺れている。そして、遠い未来もまた——。

〈了〉

羽

芦尾カヅヤ

初めて口にした酒は、チョコレート味の味がした。酒が喉を通り、胃で熱を発するのを感じながら、ナツは光を帯びたステージを見つめた。

高円寺の線路下の古本屋で、「エンジェルウイングありますか」と店主に言うと、本棚の後ろの隠し扉から、地下の店に通される。店は、音楽喫茶だった。ナツが重い扉を開けて入ると、彼女はすぐにナツに気付いて、カウンターの中から「嬢ちゃん」と手を振った。彼女の背から生えた白い二枚の大きな羽が、店内の暗い照明を浴びて赤紫に光っていた。

彼女はナツをカウンター席に座らせ「来てくれたんやなあ」と顔を綻ばせたが、すぐにナツが打ち沈むような顔をしているのに気付いて、声を落として「どしたん？」と尋ねる。音楽喫茶のはずなのに、カウンター脇にはなぜか「おでん」と書かれた提灯がぶら下がっていて、その下で火にかけられた四角い大鍋が、赤い湯気を立てている。提灯の後ろの壁に、「ヒナ手羽、一本七千円」と書かれた紙が貼られている。ナツはようやく、この店が天使の手羽を出す店だと気付いた。ナツは貼り紙から視線を逸らし、膝の上で手を握り締めて俯く。コートのポケットの中に、金の入った封筒がある。父の手羽肉と羽根を、ついさっき金に換えてきた。

——イモかんのんが死んだので、今日で、もうおしまいで

す。

手羽肉を売るために通った店で、ナツは震える声でそう言った。ヒナの手羽だと偽っていたのだから、イモかんのんと言っただけじゃなかったのかも知れないと、今更ながらナツは思う。

黙り込んだまま、寒さに耐えるように身体を丸めるナツに、彼女は「嬢ちゃん、酒、飲んだことある？」と尋ねた。

「いいえ、と言おうとしたが、喉が締まって声が出ず、ナツは首を小さく横に振る。」

「したら、今日がお酒デビューや」彼女は歌うような声で言っただけで、ナツのために酒を作り始めた。窮屈そうに畳まれた羽が、酒の並んだ棚の前を揺れ動く。酒の瓶が落ちやしないかと、ナツは落ち着かない気持ちで羽を見つめる。

大阪の空を自在に飛んでいたという彼女の羽は、折り畳んでも彼女の身長より高く、新宿の狭い路地で出会ったとき、天に住む「天使」が、間違っただけで地上に落ちてしまったかのように見えた。

ナツの生まれ育ったところでは、大人の天使はいなかった。幼い天使はたまに見かけたが、羽は大人になる前に切り落とされた。

「お代はいらんよ、サービスや」

彼女は酒の入ったコーヒーカーップをナツの前に差し出し

た。ナツはかすれる喉で声を絞り出し、やっとの思いで「ありがとうございます」と言つて、カップに手を伸ばす。彼女の作つた酒は熱く、両の手でカップを持つと、かじかんだ指先に熱が通つた。

明治時代に西日本で確認された、羽を持って生まれた人間、通称「天使」は、昭和に入ると急激に数を増やし、今や北海道から沖縄まで、天使の赤子が生まれている。現在、全国の新生児の一割が天使として生まれており、中絶を含めれば胎児の二割は羽を持っているとも言われていた。だがその羽は小さく、ほとんどの天使は飛ぶことができない。飛べるほどの羽を持つ赤子はごくまれにしか生まれず、無用の長物ではない器官は、幼いうちに切り落とされた。

ナツの父は天使だった。相模川の支流、田万川沿いの小さな村では、白い二つの羽は日よけ程度にしかならず、機銃掃射の的にされると言われて、村で生まれた他の天使もそうしたように、五つになる前に切り落とされた。物資の乏しい戦中に、酒を麻醉代わりに切り落としたという二枚の羽、その切り取つた傷痕を、父は勲章のようにナツに見せてくれた。肩甲骨と背骨の間、肋骨に繋がるように生えた羽を、骨ごと切り取る。父の羽はさほど大きくもなかったが、腕ほどもある太いつなぎ目を、大人たちが力尽くで押さえて切り落とし、膿んだ傷口に焼きごてを当てた。

あれが一番痛かった、と語る父の話を、ナツは怯えて聞いていた。

「もう痛くないん？」

父の背中に手を当てて、幼いナツは何度も聞いた。ナツが不安そうな顔をしているのを見て、父は「いてえ、いてえ」とおどけた。

ナツが怯えて泣き出して、母があやし始めると、父はけろりと笑つて、もう痛くないと言ふのだった。騙されたと気付いたナツはむくれるが、父が「ほら、飛行機してやるか」と言えばすぐに機嫌を直して、父に抱き上げられてはしゃいだ。「羽は、もう、生えないんかい？」

子供の天使を見かけるたびに、ナツは父を見上げて言った。

「もう生えねえなあ」

不満そうな娘の口調に、父は苦笑する。

「羽のあるとこ、見たかったなあ」

ナツの思い描く父の羽は、西洋の絵画にあるような白く巨大な翼で、翼を持った父はナツを抱き上げ、遠くの町まで飛んでいくのだ。もう一回生えてきたらいい。でなければ自分に羽が生えたらいい。幼いナツは、父の背を見て何度も思った。だから父の背中に突起ができたとき、願いが叶つたと思つてしまった。

イモかんのんと呼ばれる病があることは、ナツはとっくに知つていた。だが、自分の身内のものがその不治の病になるうとは、十四のナツには想像もできないことだった。

イモかんのんと呼ばれる病は、正確には「翼腫」といって、

羽を切り落とした天使が、ごくまれに罹る病気であった。

左の羽を落とした痕から、ぼこり、ぼこりと腫瘍が生まれた。小さな羽の形をしたかたまりは、いくつもいくつも連なって生えた。羽はきちんと骨を持ち、骨はときどき肉を破った。皮膚の上からは羽根が生えたが、羽根は肉と肉の間でひしゃげ、埋まったままで生えた羽毛は、血膿と共に皮膚を破いた。

腫瘍の切除と痛み止めの投薬。できる治療はそれだけだった。心臓の裏側にあるという「羽の核」を切り取れば、翼腫は止まると言われていたが、心臓や肺を傷つける危険があり、うまく取り出すことができても、半数以上の患者は数ヶ月以内に死亡する。タネとも呼ばれるその器官は、羽を産む器官と言われ、羽の切除がその働きになんらかの問題を引き起こすと考えられていた。それでも羽を切る習慣が消えないのは、単純に羽が生活の邪魔になり、イモかんのんに罹る者はごくまれにしかないからだだった。

骨が肉を破く痛みは、日夜、父を襲い続け、家の中は父の呻きと、屠殺場のような臭いで満ちた。腫瘍は日に日に成長を早め、発症から三月ほどで、父はとうとう寝ついてしまった。

寝ついた父の代わりに、母とナツは内職を始め、その合間に父の看病をした。切り取ることを諦めた腫瘍は、赤ん坊ほどの大きさになって、血と垢にまみれた羽根は、陰毛のようにてらてらとしていた。痛み止めを飲んでるのに、痛みは絶え間なく襲い続け、骨と肉とが軋むたび、父は枯れた喉で呻いた。

翼腫が売れると言ったのは、本家を継いでいた父の兄だった。

「ヒナの手羽は高く売れる。ヒナだと言って売りやあいい」
困窮した弟一家を見かねた伯父は、父が呻き声を上げている床の間のすぐ隣の部屋で、声を低くしてそう言った。

ヒナとは、天使の子供の蔑称である。ヒナの手羽肉を出す料理屋があることは、ナツも話では知っていた。戦後の食糧難で生まれたヒナの手羽料理は、ナツが生まれるころには禁じられたが、隠れて手羽を出す店は多い。

法に触れるその提案を、母は初めこそ渋っていたが、大黒柱が寝ついた家は一日一日と困窮していく。四月、ナツの修学旅行の費用が払えないと気付いた母は、とうとう義兄の提案を飲んだ。

父の肉塊を包丁で切り落としたのは伯父だった。音を聞くのさえ恐ろしく、母とナツは畑の隅で、抱き合うようにしやがみこみ、事が済むのを待っていた。

台所の流しに置かれた、冬瓜ほどの大きさの、羽根で覆われた肉塊からは、まだ父のにおいがしていた。母はそれに包丁を入れ、小さな手羽肉に切り分けて、ナツは台所の床に新聞紙を広げて、ひたすら羽根を筆っていた。床の間から、父の声は聞こえなかった。畳にできた血の池の中で、痛みで叫び疲れた父は、すっかり意識を失っていた。

肉をすべて捌き終えたころ、伯父はよそいきの服を着てナツの家に現れた。東京の店までは、伯父とナツが持つて行く。

「なっちゃん、行くべえ」

伯父はそう言って、白い顔をした姪っ子の手から、氷と肉の詰まった袋を取り上げた。ナツは、羽根の詰まった、かさの割に軽い袋を持って、擦り切れた上着の襟を合わせて、伯父のあとについて行った。

「イモかんのん抱えた家は、みんなそれで食ってんだ」

新宿に向かう電車の中で、伯父はナツを慰めるように言った。伯父は父のすぐ上の兄で、五人いる兄妹の中でいちばん仲がよかった。

月に二回、伯父が肉塊を切り落とし、母がそれを切り分けて、ナツが羽根を巻いて洗う。二回目からは、新宿に行くのはナツ一人の仕事になった。

翼腫はかなりの金になったが、ナツは結局修学旅行には行かなかった。行きたくないと言う娘に、母は悲しそうな顔をしたが、娘の気持ちを理解したのだろう「そうかい」と頷いただけだった。翼腫を売ってできた金は、ほとんどが貯金に回された。最低限の金は使ったが、ナツは相変わらず擦り切れた服を着ていたし、母は内職を続けていた。

チョコレート味のする酒を舐めるように飲みながら、ナツは薄暗い店内を見回した。音楽喫茶、ロック喫茶と呼ばれるらしいその店は、地下室にしては天井が高く、その高い天井に色とりどりの照明がつき、ステージのすぐ手前にはミラーボールが吊るされていた。ステージはまだ暗く、店内には聞いたことのない洋楽のレコードが流れている。常連らしい

客の中には、羽を持つ者もいた。天使の手羽を出す店に天使が来るのか、とナツは意外に思う。客たちは、まばらに置かれた丸テーブルの周りで酒を飲み、食事をしていた。その食事の中に手羽があるかもしれないと、ナツはおそろおそろ辺りを見回した。それは父の肉かもしれない。ナツが売りに行った肉かもしれない。

店内を見回すナツの目に、ステージ近くで酒を飲んでいる彼の姿が見えた。彼はなぜか上半身裸になっていて、Gパン姿で酒を飲み、腕に羽根の生えた男と一緒に笑い転げている。タンクトップ姿の男の左腕は異様に太く、肩から手の甲にかけて、白い羽根が生えている。腕と羽が癒着して生まれたのだろうとナツにも分かった。男は、太鼓を叩くような木のスティックを指先でくるくると回すと、彼の背中に腕を回して、それを彼の背中に突き刺した。

思わず上げた小さな悲鳴は、レコードの音と客の笑い声に掻き消された。彼は笑って男に何か言いながら、背中に刺さったスティックを抜こうと腕を背中に回している。ナツは、初めて彼の背中を見た。

背中の左、肩甲骨と肋骨の間に、野球のボールなら入りそうなるほどの、大きな穴があいている。父親に羽をもがれてきた、心臓の裏側にまで達するという穴。それはスティックの先を飲み込み、食虫植物のように、天に向かって口を開けていた。

ナツが彼らと会ったのは、翼腫を売りに通っていた、新宿

の路地の中だった。店の主人が値をつける間、店の前のベンチに腰をおろして手持ち無沙汰にしているナツに、彼はときどき声をかけ、気付けば顔なじみになっていた。

「これ、なんだか分かる？」

ある日、彼はそう言って、うずらの卵ほどの大きさの、黒曜石のような丸い石を、ビールケースとベニヤでできたテーブルの上に置いた。

目の前に置かれた黒く丸い石を、ナツはじつと見つめて「寶石？」と尋ねる。彼はうすら笑いを浮かべたまま答えないう。ナツは首を傾げながら「触ってもいい？」と尋ねて、小さな石を手を取った。ひんやりとしているかと思っただけは、不思議に熱を持っていた。手の上で転がして、指先で拾い上げ、日に透かすようにかざしてみると、石はとつぜん発光し、ドライアイスが昇華するように、白い靄のような光を纏う。ナツは驚いて彼の顔を見た。彼は、ナツの驚きように満足したように、子供のような笑みを浮かべている。光の靄はナツの手の中に広がり、手のひら全体が発光したようになる。

「それね」

彼は小さく手招きし、ナツの顔に自分の顔を近づけ、内緒話を打ち明けるように「俺の羽のタネ」と、ナツの耳に囁いた。

彼の故郷では、生まれた天使は間引かれた。赤子殺しを公にすることはできないから、羽を持って生まれた赤子は、流産死産と処理されて、火葬もされずに埋められる。村の外れ

の共同墓地に埋まっているのは、無縁仏と天使の赤子だった。彼の羽は、生まれてから生えた。彼の背中に二つの突起ができたのは、彼が二つのときだった。彼の両親は驚き、周囲にそれを隠した。村人の目に怯えつつ、天使であることを隠して暮らすうち、背中の羽はどんどん育ち、やがてチャボの手羽ほどの大きさになった。

彼を殺そうと言いだしたのは父親だった。村長に話して始末をすれば、事故ということで処理できる、村の駐在も見て見ぬふりだと父は言う。

しかし母は首を縦には振らなかった。三年近くも育てた我が子である。殺せと言われて殺せるものではない。羽を切り、普通の人として育てたいと母は言った。

だが、羽を切り取ってくれる医者などいないし、よその病院に連れて行けばそれだけで周囲に気付かれる。両親が言い争う横で、彼は意味も分からず怯えていた。父は、それなら自分が切り取ると言って、包丁を持ち出した。母は彼を抱き上げ逃げようとしたが、母子もろとも組み伏せられて、とうとう彼の羽は切られた。右の羽は、根元から切り落とされた。鮮血を噴き上げながら悲鳴を上げる我が子をかばおうと、母はきつく彼の身体を抱いた。父は彼を奪い取ろうと手を伸ばし、妻の腕の隙間から伸びる息子の羽を握り締め、力任せにねじ切ろうとした。

ねじれた羽は、背中の肉ごと引き千切られて、その下の肋骨を砕き、肺と心臓の間に埋まった核を道連れにして抉り取られた。背中にできた巨大な穴から、血液が脈打ちながら流

れた。父は、これで彼は死んだと思った。

しかし、彼は生き延びてしまう。

瀕死の息子を見て半狂乱になった母は、血まみれの彼と羽を抱きかかえ、夜通し走って隣の町の病院に辿りつく。医者が事情を聞くうちに、母は、間引きのことを話してしまう。

村の秘密をしゃべってしまった母は、生死をさまよう息子の横で、三日三晩泣き続けた。四日目、とうとう両眼が溶けて、ぽっかりと空いた眼窩から、二つの水晶体が転がり落ちた。

彼は、それを後生大事に、背中の穴に入れて持っていると言う。

畳に沁みた父の血は、どれだけ拭いても表面だけしか拭えず、目に沁み込んだ血液は黒く変色した。雑巾で何度も拭いたために毛羽立ってしまった畳の表面は、血を吸ったわけでもないのに黒ずんでいる。夏の間じゅう、血の臭いなのか父の臭いか、床の間は悪臭に満ちて、部屋に吊るした蠅取り紙は、二日もすれば隙間なく蠅で埋まった。

死なせてくれ、と父は呻いた。父の体は種芋のように干からびていて、軽い。寝ついて半年、肥大化した翼腫を切り取っても自分の足では立てなくなった父は、自分で死ぬこともできない身体になった。村の人々の「あんなになる前に死なせてやりやあよかったのに」という言葉は、ナツの耳まで届いていたが、母とナツは、父の呻きも村の陰口も聞いていないふりをして、父の身体を湯で清め、父の性器に尿瓶をあて

がい、父の口元へ食べものを運んだ。

身体の側面は床擦れができるので、朝昼夕と就寝前、父の身体の向きを変えてやった。

翼腫は不治の病だが、死ねない病と言われてもいた。筋肉が衰え寝たきりになっても、食欲だけは衰えず、むしろ食事の量は増す。絶食を試みても二日ともたず食べてしまう。翼腫に操られるように、湧き上がる食欲に患者は抗うことができない。食べものを与えてくれるなどと言って絶食を試みたイモカンのんは、しまいには自分の翼腫を筆り、それを食い尽くしてから死んだという。

せめてタネを抉ってくれと父は言う。だが、母やナツが行えば殺人になるし、死ぬと分かかっていて手術を引き受ける医者には少ない。核の手術を受けるには膨大な金が必要で、それができない多くの患者には、薬漬けにして意識を奪う以外の治療はなかった。

死んだ方が楽だろうとは、ナツも母も思っていた。だが人殺しになるわけにはいかない。父の呻きも看病も、母娘をひどく疲弊させたが、翼腫で得られる札束を見れば、そのしんどさも耐えられた。そう思うからこそ二人は一層、かいがいしく父の世話をした。

翼腫で得られた貯金を崩して、強い薬を父に与えた。父の呻きは日に日に弱まり、もうろうとする意識の中で、寝言のような言葉だけが漏れた。

衰弱する父と反比例して翼腫はますます肥大化し、手羽の形も整って羽根も綺麗に生えそろい、売り始めたころよりも

高値で売れるようになっていた。その金でナツは痛み止めを買う。父の翼腫を売り始めて半年が過ぎた。季節は、冬になろうとしていた。

「見て、見て」

彼は、グラスに張った水の中に、羽の核を入れてナツに見せた。

夕闇が迫る路地の中で、それはランプのように光った。綺麗、とナツが呟くと、彼は「水晶体」と言つて、ポケットから小さな玉を取り出して、グラスの中にそっと沈めた。途端に光は強さを増して、グラスに満ちた光の靄は、噴水のように溢れ出す。

ナツがグラスにすっかり見とれていると、ナツの頭上から女の声が降ってきた。

「嬢ちゃん、気イつけえや。こいつ、女口説くときいつもこうすんねん」

ナツが顔を上げると、赤いドレスを纏った天使が、彼の頭に手を乗せて立っていた。

姐さん、と彼はバツの悪そうな顔をして彼女の手を払う。

「お母ちゃんの形見で遊びよつて」

彼女は路地のどこかで飲んでいたので、既に目の縁を赤くしていた。彼はグラスの水を手のひらにこぼすと、三つの石をワイシャツの胸ポケットにしまった。形見と聞いて、ナツは初めて彼の母親が死んでいたことを知る。彼は自分の出自は話したが、誰からその話を聞かされたのかは語らず、両親

や村がどうなったのかも話さなかった。

ナツの前で叱られた彼は、話を逸らそうとしたのか「この人、飛べるんだぜ」と彼女を指差し、自慢げにナツを見る。彼女は何を今更というように、呆れた様子でため息をつく。

「こんなん、故郷にはもつとおるわ」

天使の言葉にナツは驚き、丸い目を彼女に向ける。

「そんなところあるんですか」

路地で時々見かける彼女は、ナツが初めて見た大人の天使だった。最初は作りものかと思ったと言ふナツに、彼女の方が驚いて「ほんまにこっち、天使おらんのな」と、いっそ感心するような調子で言った。

夕暮れ時の路地のどこかで、彼女はよく酒を飲んだり歌ったりして、店の前で待つナツを見つけると、生まれ故郷の話聞かせた。

「飛べる連中ばつか集めて、よく競争しとつたわ」

彼女の生まれた大阪は、こちらよりも天使が多く、飛べる者も少なくない。彼女も近所の大人の天使に飛び方を教わったと言ふ。

「通天閣のてっぺんまでなあ、誰がいちばん速く飛べるか。うちと、もう一人速いのがおつて、そいつとしよつちゆうケンカしとつた」

彼女は懐かしむように目を細めて言う。通天閣とは城か何かかと尋ねると、彼は腹を抱えて笑いだし、彼女は「ちやう、ちやう」と言つて、手をひらひらと振る。

「ほらあ姐さん、こつちじゃ全然知らないって」
「うっそオ、大阪の名物やのに。展望台や展望台。大阪一望できる」

東京タワーのようなものかと尋ねると、彼はまた笑いだす。
「別もの別もの、全然ちっちゃい」
「百メートルあるわ」

酒で目の縁を赤くした彼女は、笑い続ける彼に噛みつく。
彼はまだ腹を抱えたまま、「なんだっけ、大阪のエッフェル塔？」と言う。その言葉に彼女も思わず嘖き出して、「あれなア、エッフェル塔はないと思うわ」と言って苦笑した。

通天閣のすぐ近く、四天王寺の界隈が彼女の生まれた町だった。天使の羽はみな一樣に大きく、羽の切除は二十歳前に行われる。関東では天使専用の服などほとんど見ないが、大阪では天使のための体操服まであるという。学校では、跳び箱をずるして跳ぶ者がいたり、天使は後ろの席にされたり、校則に「羽の染色禁止」の項があったりするほど、天使はたくさん存在していた。

「通天閣に羽が降るんよ」
彼女は甘い声音でそう言う。彼は、彼女に言われて酒を買いに近くの店に走って行った。ナツは彼女の顔を見つめて、遠い大阪の町を思い描く。

彼女は誰に語るでもなく、ひとり思い出に浸るように、ぼつりぼつりと言葉を続ける。

「子供らが、いつせいでっぺん目指す。飛べるいうてもまちまちやから、身長ぐらいしか飛べんのもおる。五メートル

くらいでだいたい諦める。うんと飛べるのが一人か二人、通天閣を回りながら、どんどんどんどん登ってくんよ」

下町の天使は、螺旋を描いて舞い上がる。走り回っていた町を見下ろしながら、風に乗り、展望台の中の人間に手を振り返し、高く高く、登って行く。そのはるか上空を、飛び慣れた天使が鳥のように飛んでいる。展望台の上に足をつき、彼女はガッツポーズをする。

大阪の空からははらと、夕日に照らされた羽根が降る。
「見てみたいな」

彼女の横顔に羽根の降る街を思い描いて、ナツは呟いた。

彼女は、今やと隣に人がいたことを思い出したようにナツを見て「ホンマ、見せたいわア」と言う。

「でもなア、今、もうあかんねん。飛んだらあかんことになってしめて」

大阪ではそうでもないが、天使の少ない土地では、天使をやたらと崇めたり、逆に不具者と罵る者がいる。通天閣の展望台は、窓が開く。天使は滅べと叫ぶ学生がそこから、周囲を飛び回る天使の子供を撃った。弾は身体をそれて羽に当たったが、羽を撃たれた子供は地上数十メートルの高さからコンクリートに叩きつけられ即死した。以来、通天閣では周囲を飛び回ることが禁じられてしまった。

「背中を下にして落ちたんで、羽根がコンクリに飛び散ってなあ。下におった子供らの上に、ばあっと降った。子供ひとりに、あんなたくさんの羽根が生えとるんかと、びっくりしたわ」

見てきたように話す彼女の口調に、死んだ子供は彼女のケンカ友達だったのかもしれないとナツは思った。

「そや」

彼女は、何か思い出したように、財布から小さな紙切れを取り出し、「嬢ちゃん、音楽好き？」と尋ねる。彼女はナツの答えを待たずに「大阪は連れて行けへんけどな、似たようなもんならこつちでも見れる」と言っつて、それをナツの手に握らせた。

高円寺駅徒歩五分、古書店羽衣書房。紙切れには、古本屋の住所と地図が書いてある。彼女は秘密を打ち明けるように声をひそめて、「この店長に、エンジェルウイングあるかア、ゆうたら、羽が降るとこ見せられる」

彼女の言葉は何かの暗号のようで、ナツはきよんととして彼女とメモとを見比べる。高円寺、と、見知らぬ駅名をナツは呟く。

「中央線だよ。国鉄。新宿から一本で行ける」

酒を持って戻ってきた彼が、ナツの手の手を覗き込んで答える。

彼女はくすくすと笑って「コイツが、羽根降らせるねん」と言っつて、彼の背中をトンと叩いた。

通帳の残高は、父が働いていたころよりも増えた。父の肉を売り始めて一年、身体じゆうに血と糞尿の臭いが沁みついていたが、近所の農家には牛や豚がいる。ナツの臭いなど誰も気にしなかった。

一週間前に切り取ったばかりなのに、父の背中肉腫は、もうかぼちゃほどの大きさになっていた。朝、父に食事を食べさせ終えて、ナツが学校に行く支度をしていると、床の間から「ナツ」と呼ぶ声がした。父がはつきりとした声で話すのは久しぶりだった。

襖を開けると、父はこちらに顔を向け、干した芋がらのような手足をこすつて、「俺ア、そろそろ死ぬだろ」と言う。

手足の筋肉はほとんど落ちて、肋骨の浮いた身体は餓死者のようだ。もう内臓だつて弱っているはずだ、きつと死期が近いだろうと父は言う。

ナツはまるでそう答えることが決まっているように反射的に「大丈夫だよ」と言っつていた。

「死ぬわけないよ、お父さん。イモかんのんは、水さえあれば、そうそう死んだりしないんよ」

死という言葉にうろたえたナツは、明るい声を出し、励ますような口調で言っつた。我ながらお粗末な励ましだと、言いながらナツは思っつた。父の目が、力を持ってナツを見つめた。そんなことはない、と言われるだろうかとナツは構える。しかし父は何も言わずに、長い息を吐き、目をつぶった。痛み止めが効いてきたのだろうとしか、そのときナツは思わなかった。

それが、今朝のことだった。

酒のせいか、首から上がじんじんと熱い。目が充血してい

くのを感じて、ナツはカウンターに頭を寄せる。

彼女は出番だと言って、カウンターから出て行った。流れていたレコードが止まり、客から拍手と歓声が沸き起こる。顔を上げると、ステージが明るく照らされていた。その中央に彼女が立ち、マイクを持って足元を見つめている。

ステージの上には、他に三人の男がいた。その中の一人が彼だった。裸の上半身にギターを抱えた姿の彼は、ナツに気付いて手を振っている。ナツは精いっぱい笑顔を作り、手を小さく振り返した。

ステージの照明が落とされ、室内は一瞬しんとなり、真つ暗になった視界の中に、残像のような淡い光が浮かび上がりは消えていく。

もうすぐ死ぬるよと言えばよかったと、ナツは思う。死なないなどと言ったから、父を死なせてしまったのだ。自分が父を殺してしまった。

ステージが光ったと思うと、部屋全体を揺さぶるような音が四方のアンブから客席を襲った。客が高い声を上げる。ナツは目を見開いてステージを見つめた。

光の羽根が、ステージいっぱい降り注ぐのをナツは見た。彼の背中から噴水のように噴き上げる光の粒子は、ミラーボールに当たって飛び散り、反射光を浴びた羽は、その光をますます増殖させる。

彼が抱くようにして弾いているギターに、彼の顔から汗が滴る。その汗もミラーボールの反射に射ぬかれ、光の粒にな

って霧散する。

彼の背中の背骨の左、肋骨の間にあいている、心臓の裏側にまで達する穴。そこから彼は光を噴き出す。赤にも黄にも青にも見える、白い、眩しい光の粒子。

その光を全身に浴びて、彼女はゆつくりと羽を広げる。「天使」と呼ぶにふさわしい、巨大な白い羽がステージいっぱい広がっていく。彼女が羽をはばたかせると、部屋の中には風が巻き起こり、光の粒子は客席にまで降り注ぐ。

——通天閣に羽根が降るんよ。

うっとりとはいた、彼女の甘い声が頭に蘇る。彼女の友人がコンクリートに叩きつけられて散らした羽根は、きつと綺麗だっただろうとナツは思う。光の粒が、全身を叩いた。ベイスの碧い重低音と、地を這うようなドラムの音が、身体の中に入ってくるように、ナツはばかりと口を開けたまま、喘ぐように息をする。

ナツは光の噴き出す方を見つめる。赤に青にときらめく光に、広げた羽は七色に染め上げられる。歌姫はもう一度大きくはばたき、マイクの前で両腕を広げた。

ドラムを叩くのはさっきの羽根の生えた腕を持つ男で、ベイスを弾く男の身体には羽はなかったが、父のように羽を切り取った傷痕が背中にあるのかもしれないとナツは思う。

光の羽を生やした彼は、靴を履いていなかった。踏みしめた足の爪の先からも光が散り、羽根が噴き出す。

羽根の生えた太い腕が、地鳴りのようなドラムを響かせ、

ナツの心臓を叩くように揺すぶる。痺れるような身体の中で、鼻から口から入った光が、渦巻き始めるのをナツは感じた。

彼女が声を発した瞬間、輝きを増した光の粒は、ステージの上を発光させて、生まれたばかりの星雲を閉じ込めたような地下室の中で、客たちは天使の声を聴く。

それは、闇を裂くような声だった。

目の奥が熱くなり、ナツは天井を見上げてきつく目をつむる。降る光が、目蓋越しにも分かった。彼の核が生み出す光の粒が、今のナツには矢が降るようにも感じられた。

父の背中の中のタネもこうやって光を発したのだろうか。タネは、持ち主が死んでしまうと、輝かなくなるといふ。だから天使の死体を切り開いても、光を失ったタネしか取れない。

新宿の狭い路地で彼女は、光るタネを手の上で転がしながら、ナツにそう教えてくれた。

ナツは、光を失ったまま父の身体の中にある、翼腫を生んだタネを思う。

ナツは目蓋を開けて、ステージに視線を向けた。ベースの響きは身体に絡みつき、ナツの身体をきつく締め上げる。身体に爪を立てるようなギターの音が、ナツの身体を引き裂いていく。

七色の音が身体を揺さぶり、身体中が、羽根を噴くように震えている。背から、腕から、翼が生えてきそうだった。

全身から羽根が噴き出して、身体が全部羽根に変わればいい。

そうして、光と一緒にになって、ここに散ってしまえばいい。

学校から帰り、鍵を開けて家に入ると、妙な臭いが鼻をついた。血と糞尿の臭いがするのはいつものことで、畳に沁み込んだすっぱい臭いもずっと前から漂っていたが、それとは違う、饅えたような臭いがナツの鼻にまとわりついた。

野菜か何かを腐らせたのだろうかと思いついたが、ナツは靴を置き、制服を脱ぎ、父のおしめを替えてやろうと、床の間に続く襖を開けた。

饅えた臭いが強くなる。

ナツは、その場に立ち尽くして父を見た。

六畳の床の間で、父は縊れて死んでいた。

イモかんのんでは、人は死なない。イモかんのんの患者が死ぬのは、餓死か事故死か、他殺か自殺。

父は自分の尻にまかれた布を解き、障子の縁にそれを通して輪っかを作り、そこに首を掛けていた。普通の大人が体重をかければ折れていただろう障子の木杵は、痩せ衰えた父の身体では折れもせず、敷居から外れることもなかった。

自分でタネを抉ろうとしたのか、父の周りには翼腫からもがれた羽根が散らばって、肉塊はそこから血を噴いた。だから、父は縊れて死んでいたのに、頭から血を浴びて、顔は汚物にまみれていた。

母と、伯父と、ナツの三人で、父の死体を綺麗にした。背中の翼腫は納棺の邪魔だからと、伯父が鉋で切り落とした。死体から血は流れなかったが、翼腫はまだ血が通っているように、熱こそないが羽根も、肉も、とても綺麗なままだった。

千手観音のようだからと、翼腫はかつて「かんのん」と呼ばれた。だが、醜い腫瘍は「イモ」と呼ばれて、翼腫はやがて「イモかんのん」と言われるようになっていった。

父の背中から連なって生えた羽は「かんのん」と呼ぶにふさわしく、そこから生え出た羽根の一本一本も、高値で売れるとナツは思った。

死んだばかりの父の翼腫を持って、新宿の店に向かった。夜遅くだったからか、彼らの姿は路地にはなかった。

金を受け取り、これで終いだと告げて、かじかんだ手をコートポケットに入れ、新宿駅に向かった。血のついた羽根を冷たい水で洗ったので、指先はすっかりひび割れていた。そのガサガサの指先が、ポケットの中の紙切れに触れた。

音と光の止んだ店内は、またレコードが流れ始め、薄暗い明かりの中で、客たちは酒を飲み続けていた。

「嬢ちゃん、見て見て」という彼の声でナツは顔を上げ、そして悲鳴を上げそうになった。彼の背中の黒い穴から、巨大な翼腫が生えている。

国鉄、中央線、高円寺。駅員の前で彼の言葉を繰り返して、ナツはようやくやく切符を買って、羽根が降るといふ場所に来た。

彼は「嬢ちゃん？」と言ってナツを振り返る。ナツは身体をびくりと震わせ、瞬きをしてもう一度彼を見た。翼腫と見紛ったそれは、背中に挿さった花束だった。

心臓はひどく波打っていた。身体の震えをこらえながら、ナツは「びっくりした」と笑い、椅子から立って花束に手を伸ばす。客に入れられたらしい色とりどりの花は、店内の暗い照明に照らされ、すべてが赤く色付いている。ナツがゆっくりそれを持ち上げると、客が押し込んだらしい小銭が音を立てて落ち、お札がひらひらと散らばった。彼は慌てて身体を倒し、足元の金に手を伸ばす。その拍子に、穴の中にあつた残りの小銭が、彼の首筋を通って足元に落ちた。

その中に、見覚えのある玉が見えた。

ナツは花を取り落とし、落ちた三つの玉のうち、足元にあつた黒い玉に手を伸ばす。転がっていった水晶体を拾おうと、椅子の下に手を伸ばしたとき、ヒナの手羽、という言葉がナツの頭上から聞こえた。ナツは羽の核を持って立ち上がり、声のした方に目を向ける。

カウンターの間にはいつの間にか彼女が戻っていて、客に料理を出していた。ナツの視線は、彼女の手の上の白い皿に注がれる。

天使の手羽肉が、そこにはあつた。

イモかんのんかヒナのものなのか、鶏のもも肉ほどの大きさのその肉は、ナツのよく知る翼腫の手羽と同じ形をしていた。

——おとうさん。

悲鳴は喉の手前で溶け出して、ナツの全身に流れていく。皮膚の下が震えていた。ナツの身体は少しも動かず、けれど身体の中では指先までもが声を上げていた。皿は客の手に渡

り、手羽肉は他の客に紛れて見えなくなった。ナツはそちらをじっと見つめて、石を握り締めたまま立ち尽くしていた。

「どうした？」

声をかけられて、ナツは我に返って彼を見た。彼は拾い集めた金と花をカウンターに置き、水晶体を器用に背中への穴に入れ、ナツの顔を覗き込んだ。ナツは、彼に見せるように石を持った手を広げた。石が手の中で熱を持ち、光の粒を纏い始める。

彼が礼を言つて手を伸ばすと、ナツは石を握り締めて手を引いて、弾かれたように踵を返し、扉を開けて階段を駆け上がった。

嬢ちゃん、と、彼女が驚いたような声でナツを呼ぶのが聞こえた。古本屋を抜け、ナツは外に飛び出した。線路下の横町を抜け、駅前の広場に出ると、町はうっすらと積もった雪で白く浮かび上がっている。月のない暗い空から、白い光が降っていた。

広場の真ん中で、石を握った手を胸に押し当て、息を切らして立ち止まる。指の隙間から光が漏れ出て、ナツの吐く白い息が一緒になってきらきらと光った。

顔を上げると、上にワイシャツを羽織っただけの彼が、裸足で駆けて来るのが見えた。ナツはゆっくりと手を開く。光はどんどん強さを増して、雪まで光を帯び始め、空に向かつて広がっていく。

駆けてきた彼が、ナツの腕を掴んで止まろうとして、積もった雪に足をとられた。ナツはとっさに石を握り締め、その

まま彼と一緒に広場の上に倒れ込んだ。身体を打ちつける衝撃と、雪と地面の冷たさを身体に感じて、ナツは思わず身体を丸める。

「いつてえ！」という悲鳴のあと、彼はすぐに飛び起きて、ナツの身体に腕を回し、必死に謝りながらナツを抱き起こした。不意に嗚咽がこみ上げて、ナツはかすれた声で「ごめんさい」と言うと、そのまま泣き笑いのような調子でしゃくりあげ、「ごめんさい、あんまり綺麗だったから」と言つて、彼の前に石を持った手を差し出した。ナツは地面に座り込んだまま、嗚咽をこらえて涙を拭い、彼の手に石を持たせた。ひどい薄着だというのに、彼の手はあたたかかった。

石を受け取った彼は、泣き出したナツに戸惑ったように押し黙り、それから何かを思案するように空を見上げた。粉雪が彼の顔に当たり、水になって頬を流れる。

彼は石をナツの手に押し戻して立ち上がり、前屈をするように身体を折り曲げてワイシャツを揺すった。襟元から、小さな透明の玉が二つ、ナツの膝に転がり落ちた。彼は身体を震わせてシャツを直すと、ナツの膝から水晶体を拾い上げる。ついさつき降りだしたように見えた雪は、あつというまに勢いを増して、ナツの膝にまで積もり始める。

「手、上げて」

彼に言われて、ナツは石を持った手を頭上に掲げる。石から噴き出した光は周囲の雪を巻き込み、ナツの腕を染め、ナツの身体を発光させていく。彼はナツの手から石を拾い上げると、代わりに二つの水晶体を乗せた。彼の手中で石は一

層光を發して、水晶体は呼応するようにナツの頭上で光を散らす。

彼は光るナツを見つめて優しく笑い、
「よく見てろよ」

と言うと、羽の核を空高く放った。

水晶体から溢れる光が、ナツの手の上で膨らんで、広場の空に弾けた。石は周りの雪をすべて光に変えて空高く登って行く。道行く人が喚声を上げて空を見上げる。ナツは、発光する空が自分に向かって降り注ぐのを見た。光は冷たく暖かく、ナツの身体を刺し貫く。

天を仰ぐナツの目から溢れた涙も光になった。身体じゅうが光る、羽根のように、光る。空は星をばら撒いたように、白く赤くきらめいている。

羽根だ、羽根だとナツは思う。

ナツが筆り取り金にして、ナツが焦がれて彼女が見とれた、七色の羽根、たくさんの羽根。

父の羽根を筆って洗った指先は、血を噴くほどひび割れあかぎれになっていたが、もう、冷たい水で血膿を洗い流すこともない。光の羽根はナツを傷つけることなく、けれどもナツに熱い痛みを与えながら、あとからあとから降り注ぐ。

ナツは、泣いた。

空を仰ぎ、声を上げて、涙が羽根になって消えていくと思しながら、広場の真ん中で発光しながら、全身を震わせて、泣いた。

彼の核が、たくさんの光を纏いながらほうき星のようにな

って落ちて来る。ほうき星の落ちる方向に駆けて行く彼の後ろ姿が見えた。思い切り伸ばした左手で巨大な羽のようなほうき星の先端を受け止めると、彼は頭から花壇に突っ込んだ。ほうき星の尾が飛び散って、虹が弾けたような光が広場に降り注ぐ。ナツに降る羽根も七色に光り、広場は、幾重にも虹がかかったように輝く。

ナツは空を見上げながら、静かに、深く息をした。光が身体の中に入り込み、冷たい空気が熱を持つ。

ナツは、ゆっくりと瞬きをした。冷たい熱を持った雪が、ナツの顔に当たって溶けた。

広場の光がゆるやかに弱まり、ナツは掲げていた手をゆっくりと下ろした。発光していたナツの身体も、ゆっくりと光を失い、広場は、さっきまでの静寂を取り戻す。

花壇の前に座り込んだ彼は、左の手に星を捕まえていた。ナツの手の中の光が弱まるのに合わせて、彼の羽も小さくなっていく。

ナツは雪で濡れた顔を拭くと、透明な二つの石から溢れる光を両の手で包み込み、ゆっくりと立ち上がり、ほうき星の根元に向かって走った。

彼は座ったまま、幼い、得意げな笑顔をしてナツを見ていた。ナツは泣き笑いのような顔をして、彼の隣に膝をついた。

ナツは右の手のひらに、光の消えた二つの水晶体を乗せていた。彼はその手の上に、羽の核をそっと置いた。水晶体は、もう一度だけ、羽根の形の光を放った。

了

モノクローム

しろくま

マイケルは白か黒かと踊り叫んだ。メディアは彼を黒に戻そうとした。彼は白でも黒でもないんだと答えた。赤は、色の無い世界では明るさによって白くも黒くも写る。

華奢な体に大きな外套が合っていない。錆びれたカメラ屋の前で水溜りが乾いていた。煉瓦畳の隙間に、七角形の五十ペンスが立っている。それを見付けて拾い上げる。ブリタニアの顔に付いた土を拭う。カメラ屋のウィンドウにはライカが並んでいた。

天国があったら目を細めて見てやるんだ。そうすれば眩むことなく真実が浮かび上がるだろう。

地獄があったら目を開いて見てやるんだ。そうすれば暗闇の中でも確かな物語を見付けられるだろう。

街にそびえ立つ塔は、何よりも暗い影を街に落としていた。平たく曲がりくねった赤煉瓦の道。影は霧の街を突き刺していた。

外套とハンチング帽は亡くなった父の物だった。目深にかぶった帽子から赤い頬が覗く。その上に粉吹く白い跡。バラバラに伸びた赤毛の髪。

“ 明暗を、穏やかなまでにたくましく捉えるそいつで、この世の全てを曝してやりたい。”

ライカのウィンドウに握ったコインを投げ付けた。「ガチッ」とコインとガラスのぶつかると音が響いた。ウィンドウには、小さな跡を残しただけ。転がったコインが向けた面にブリタニアはいなかった。

拾い上げた煉瓦をウィンドウへ投げ付け、カメラとフィルムを奪い走った。誰も見ていなかった。人の手がすぐに今、どこからか伸びてくるような気がしてとにかく走った。

路地裏に逃れて、モノクロフィルムを手にしたライカに装填する。白い息が掛かる。呼吸は収まろうとしない。寒さで頬が痛い。肺が痛い。頭が熱い。手が震えている。ぐるぐる、頭の位置が定まらない。足が浮いているようで、眩しい。何か地面に力を入れる。

音も無く、知らぬ間に近付いていた赤。真っ赤なコートを着た女が立っていた。こちらに憂いの瞳を向けていた。

瞳孔の開いた目に一面の赤は白く写った。女性の口元が動く。気付けば自分の方に手が伸びて来ている。その時、耳には何の音も届いていなかった。頭の動揺は抑えが利かない。

のどを開く。のどの振動だけが体に感じる。肺をふり絞る。自分の声も耳に届いていなかった。拾った煉瓦で、伸びる手を振り払って頭を殴り付けていた。

…：顔色が悪いわよ。だいじょうぶ？…：

倒れた女性。赤煉瓦に染みゆく黒い血溜まり。その中に白い雪は降っては溶けた。

青い非常階段

安部孝作

一 月は振り子のように

月は振り子のように、振れて

振れ、

車中、わたしは

見果てていた、

ゆらゆらと

そして

首

ゆさぶられて

月はとまる

紺の夜空に突き刺さる

たまごの化石

みずからみえぬようにと

する彼方の輝きに温められた

そして潮の満ちる夜、

きいろく濡れた

嘴はひびをうち、からを穿ち

力にみちた

刃先のような

声で――

声で叫び

世界を

かき混ぜ始める――

そして混ぜられた夜

電車は

遠心力を

捨て去って、直進した

つるされた巨大な

磁石の輪

輪を月の鳥がつかぬき

とびさり

わたしは直面し

寄せられていく

我が肉体に流れるこまかな

血漿が混ぜられていく

回転する両極

わけへだてられる

わたしとわたし

遠くへと飛び去る

振り子の糸は切れ

月は振れて、振れ

離れゆく

遠くへと

飛び去る

月の鳥は

彼方のありかを知っている

そしてわたしも

切符にかかれた

駅がくるまで

直進する電車に

のり

彼方へととんでいく

離れゆく

ロ 暗夜走行

ブルーインク山麓、秋

青焼けの紅葉

紅黄の夕焼け横目に

走り進めよオートバイ

ひじ曲げる山路の筋隆なるを

乙女ならしきビロードの

こっぺん こっぺん

に似るエンジン音

粗整備アスファルト

の凹凸超える

みちばたで標識は赤い夢み

畝辺の山茶花 青萼より飛び放たれ

どこへまで延びるか山の舌

この先は口か胃腸か

うとうと ぎしぎし

奥歯が軋む暗夜走行

高圧鉄塔、ペン先突き刺さり

呑みあう雲に

ブルーインク染みるのを横目に

さあ、走り抜けよオートバイ

目 そして蛾は生まれ

布団はだけ

腹が冷え痛んだ早朝

トイレ行つて

また布団はいり

左手伸ばしカーテン開く

ああ、

なんて晴れがましい空

まだ朝焼けなのに

はやくも

暗転するほどまばゆい世界

世界はここよりはやく廻っている

時は、空は、より早くあかるく

それは誰に確かめなくとも

既にわたしが知っている事実

その晴れがましい空に

ふたつの繭玉のような純白の雲

ぷかぷか小刻みに揺れ

ほのかに桃色に染まっている――

ふたつの繭玉のような雲は

糸を引かれ

引かれるようのび

解かれて穴をなし、

わたしはそこに大きな

流れをみる――

まわり

突きぬけ

滲みだしていく

流れ

――そこへ

一機の黒い飛行機が横切る

ああ、

腹が痛すぎる

ふたつの雲は

共謀する

巨大な力に圧迫され

変形し形作られていく

ああ、

腹が痛すぎる

身体をよじらせるほど

冷や汗もたらたらで、

だから

わたしはまた眠ることにしようと思った
と、丁度太陽が隠れた

そしてなにものかが窓を叩いた

眠るんだから静かにしてくれよ

わたしは無視した、が

ひびは止めどなく、

漏れ出された

そして蛾は生まれ

真っ赤な鱗粉が無尽蔵に窓を叩き

地表、

そして街を覆った

けざやかな音が鋭角に飛翔するなか

耳を塞いだところで

わたしは決して

眠れなどしなかった

Ⅳ 眠れぬ夜

瞬時に切り替わる裏と表

巨大な網膜は焼けるまで見つめ

色彩の漏洩を心配していた

残像は消えようもない

その間危険が姿を消し始めた

階段の壁面に埋めこまれた

予言に満ちた設計図

油のなかで保存された

とけかけた写真

音もなく彗星は飛来し

語り始める人々

展開していく雲の平手が

横暴に弾いて 泡とともに

吹き飛ばされる千億の王冠

その中でふたりが視線を交わし

言葉交わさぬうちに駆けだし

別れるふたり

同時に警報が鳴りだす

のみこむようにあがる歓声

そして瞬間にして訪れた静寂

Ⅴ のこりつづける

足許に落ちゆく髪の毛

部屋のかた隅に

溜まる

ほこりにまみれる

わたしの身体の一部だったもの

サッパリと掃除されて

無くされていく

塵芥の如く

消されていく

昔にわたしだったという事

せめて火にくべて下さい

残り続けるために

とこしえに彷徨う

蓮華になつて

泥に眠っていたいのです

◇ 住処

住処のない貧しき

僕はどこへ行くのか

その赤シャツを着て

清き食事を輝く食卓

へ運び 頂こう この肉体

が住処を奪うのだ そこには

僕の住処があったはず その

食卓に 僕の席とお皿があったはず



住処に与える者は虫に

求める その美しさを 輝く

貧しさを 色彩豊かな硬い殻の中で

眠る 熱の籠った息で満ちた 路上で眠る術を



禿げた大地の硬い皮膚

そこから突き出た草草を覗くと

白い骨にも住処があると

思い知るのだ……

立ち枯れた枝よ

住処を一つ示してくれないか

色あせた一時停止の標識よ

お前の足許を借りてもいいか

まだ見ぬ住処よ

お前はいつまでも

空けられたまま

空き瓶の口が笛吹くように

どうかお前も鳴らして

僕の名の在処を教えてくれ



花の中住処とする

ぬくもりのない虫たち

なにを食ってもいい

どこにも住処がある

お前たちは つやつや輝く――

僕は羨ましく思う

軽く潰されるお前たち

蛙にも吞まれてしまう

されどお前たちには

胃袋にも住処がある

に外ならない

僕には何が――

僕には墓穴がある……

茨の絡んだ墓穴がある

≡ 白犬

白犬が 歩みを止めた

気付けば 灰に薄汚れ

舌を出していた

伏せて今ほだるそうに

鼻をしゅうしゅうならしている

通り行く人が呼ぶ ここへおいで――

だが犬はちかよらない

荒々しい声さえ出ない

眼脂は固まって

琥珀色に光っていた

誰も気づかなかつたが

蠅に覆われていた

ようやく葬られる時には

その犬はしゅうしゅう煙をあげ

真っ白に燃えた

≡ マンホール

朝ぼらけの大会

マンホールの下で小舟が

とまった――

舳先が何かにぶつかった

命じられた子どもらが

ランタンを差し向けると

白かぶらのような

水死体

彼らは欺かれたのだ

滑りゆく人影に

浮遊する飛行船に

むかし読んだ教科書に

命じられた子どもらは

櫛で払い除けようと

中身をながしきった

病んだ卵のような腹をついた

彼らは奪われたのだ

奪えるものは奪うようにと

告げる言葉に――

最後に宿った眼光まで……

そして陽が昇る

マンホールの蓋が開かれる

レンズを収めた子どもらの

手もとで光が逆る

誰もいない

静まり返った窓辺の街

子どもらは知っていて尋ねた

誰かいないのかと――

又 青い非常階段

亜鉛の剥がれ落ちた

粉のちらばる踊り場

雨が降り込み蒼褪めるうえ

乾いた鳩のふんが白く

乾いて咲いた

黒ずんだエーデルワイス

なにが汚し汚されるのか

鴉は知らずに呑んで置き去りにした

海辺のビルの

非常階段は

錆がひどくて柱は折れそう

そこに作業着姿が一人

一段一段降りてきて安全靴は響く

カン……ケン……カン

どこか遠くへ行けそうな

ひらけた階段

手すりに鳩がとまり

雨空の下に腰下ろして

その人はなにも考えなかった

それを海とも思わず

黙って鏡に映った

くすんだ青ばかり見つめていた

記録（九月・十月）

● 連絡事項

◆ 雑誌の廃刊・創刊

- ・『月刊 twitter 文芸部』は九月号をもって廃刊
- ・新たに隔月刊の『Li-tweet』を創刊

◆ 入部・退部まとめ

・ 入部

- 日居月諸 (2012.9.28)
- うやむや (2012.10.28)
- る (2012.11.11) (再入部)

・ 退部

- ヨダレン (2012.9.1)
- 神崎裕子 (2012.9.20)
- イト (2012.10.27)
- フランシ (2012.10.27)

● 活動記録

◆ 隔月刊『Li-tweet』創刊号原稿募集

特集「もつと日本文学。」

応募規定：エッセイ、小説、詩、ジャンルは問わず。枚数規定なし。応募できる原稿は1ジャンルにつき1作まで、最大3作応募可能。

*その他、創作・エッセイ・コラム絶賛募集。

〆切：11月20日

◆ 十一月定例会

日時：11月3日21時～

場所：Skype

ホスト：小野寺那仁

内容：①創刊号について

②ホームページについて

◆ 『月刊 twitter 文芸部』九月号合評会

日時：9月29日20時～

場所：Skype

ホスト：安部孝作

内容：九月号掲載作品の合評

「鈍いいろ」(短歌) あんな

「ネイヴル」安部孝作

「雪 鋼」常磐誠

◆ 【イベント部主宰の事業仕分けツイ文全体会議】

日時：10月18日20時～

ホスト：小野寺那仁

内容：イベントの見直し

◆ 第九回芥川賞読書会

日時：9月6日 22時半～

場所：Skype

ホスト：あんな

作品：古井由吉「杏子」

◆ 第十回芥川賞読書会

日時：9月10日

ホスト：イコびよん

作品：鹿島田真希「冥途めぐり」

◆ 第十一回芥川賞読書会

日時：9月24日 21時～

ホスト：崎本智

作品：諏訪哲史「アサツテの人」

◆ 第十二回芥川賞読書会

日時：9月30日 21時半～

ホスト：安部孝作

作品：青山七恵「ひとり日和」

◆ 【小説の書き手のための実践的創作企画】第二回

テーマ：「先人の作品を作りかえる」

日時：9月2日 19時～

◆ 【小説の書き手のための実践的創作企画】第三回（前半）

テーマ：「絵画から創作する」

日時：9月9日 19時～

◆ 【小説の書き手のための実践的創作企画】第三回（後半）

テーマ：「絵画から創作する」

日時：9月30日 19時～

編集後記

文学に関する他愛ないつぶやき、

或いは引用の雑誌

崎本 智 (6)

「Li-tweet」という雑誌名は一時的に部を離れている牧村拓氏が名付けてくれた。この名前の由来は「Literature」(文学)の最初の二文字「Li」を「tweet」につけ足したごく単純なものに過ぎない。しかしその発音が「リツイート」となることから多重な意味を含むことができているのではないかと僕自身、気に入っている。

「リツイート」……それはもちろん「RT」。タイムライン上で僕たちは「他者」の言葉を引用することができる。「引用」というのは文学に置いて重要な意味を含んでいると思うし、さまざま場面で使われてきた言葉だ。

「小説や評論は過去のさまざま書き手たちの言葉の引用に過ぎない」とは誰の言葉だったのか、思い出すこともできない。

けれど今回の雑誌の書き手たちもまたそれぞれに愛すべき過去の作家を胸の内に秘めたく新しい書き手たちへであることに間違いはない。

過去とそして現在、未来をつなぐことは僕たちのような無名の書き手にとっても一応の使命と考えても良いだろうか。過去、このtwitter文芸部にもさまざまな書き手と読み手がいた。

今回の雑誌はもちろん前身として「月刊twitter文芸部」を踏まえなければここまで大きなものをつくることはできなかったはずだ。

「月刊」で得た技術や知識を部員総出で今回の雑誌に応用させてもらった。よっていまや部を去ってしまった元部員たちの力も当然有形無形に借りている。そのことにまず敬意を払いたい。

僕自身おっかなびつくりで「twi文」に入り、当初は沈黙をしたままだった。しかし沈黙を許さない、或いは興奮を喚起させるさまざまな部員たちとの出会いがあり、素晴らしい示唆を受けた。そのことをあげればきりはなく、いつしか思い出話になってしまいうからここではあえて書かない。けれど過去にいた部員の皆には感謝をしてやまない。Twitter文芸部のいまがあるのは、彼／彼女らのおかげであることに異議のある者はいないはずだ……。

そして現在、この「Li-tweet」発刊のための編集・デザイン・宣伝に携わっていたいたり、寄稿していたいただいた部員に熱く感謝を述べたい。もともと締切日までの時間がない中

でよくぞこれほどの原稿があつまったと驚く。また僕の無理なお願いをいろんな方にきいていただき、それが素晴らしい成果になったと感じている。現在のメンバーでできるベストワークス。手前味噌ばかりだけどそう言って過褒にはならないはずだ。

さいごに未来。ここに集う部員たちはそれぞれの目標に向かう手段としてこの部を利用してもらっていると思う。プロの作家が出る日も遠くないのではないかと真剣に思う。それぐらい部員たちの文章は傍で読んでいて嫉妬したり驚いたりすることが僕にとってはよくある。それぞれの書き手にとってこの「Li-tweet」創刊が目標に向かう一歩になっていれば僕にとりこれほど嬉しいことはない。勿論、プロになることだけがすべてではないし、それを目標とされていない方もいらっしゃるのです。そこは注意が必要。

最後にこの雑誌を読んでくれたあなたに最大級の感謝を述べたい。

ありがとう！

Li-tweet創刊十二月号

平成二十四年十二月一日発行

製作 twitter文芸部

オフィシャルアカウント <https://twitter.com/twibun>

ホームページ <http://twibun.jimdo.com/>

執筆者（五十音順）

芦尾 カヅヤ @akeriya

安部 孝作 @KOUSAKU_Abe

あんな @annecat1310

うさぎ @Mainlander_11

小野寺 那仁 @onoderak

しろくま @fotonovear

崎本 智 (6) @SakiAllende

とーい @10011040

常磐 誠 @evagredra

日居月諸 @das_unheimliche

緑川 @midorikawa_e

る @ru_mentanpin

Rain坊 @_5384393400432

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 創刊十二月号」をプリント用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。